

シ他ニ嫁スルモ將タ婚家ニ留マルモ一ニすいノ自由タル旨ノ意思ヲ表示シタル事實ハ之ヲ認ムルニ適切ナル立證無キノミナラス却テ證人田中翠、前川駒次郎ノ供述ニヨリ明カナル如ク其後訴外眞造すいノ父眞造芳太郎ヨリ原告ニ對シ右すいトノ協議上ノ離婚ヲ求メタル際原告ハ容易ニ之ニ應セザリシ事實ハ寧ろ原告ニ於テ訴外眞造すいニ對シ被告代理人主張ノ如キ特別ノ意思表示ヲ爲サザリシ事實ヲ推知スルニ足ルト謂ハサルヘカラス而シテ前示ノ認定事實ニ徴スルトキハ原告ハ其婦タリシ訴外眞造すいニ對シ重大ナル侮辱ヲ與ヘ且怒意ヲ以テ遺棄シタルモノト云フヘク從ツテ裁判上離婚ノ事由タリ得ヘキヤ勿論ナルモ是等ノ事由ハ其婦タル右すいニ對シ原告以外ノ他人ト私通スルノ自由ヲ許容スルモノニ非サルヤ明カナリ蓋シ婚姻又ハ離婚ハ届出ニヨリ之ヲ爲スヘキモノナルコトハ法ノ明規スル處ナレハ苟クモ離婚ノ届出ナキ以上ハ假令同棲セサルモ尙ホ夫婦ニシテ其婦ト私通スル他人ハ姦通行爲ヲナシタルモノト云フヘク夫カ其妻ニ對シ與ヘラレタル重大ナル侮辱又ハ惡意ノ遺棄ノ事實ハ其妻ニ離婚請求權ヲ與フルニ止マリ之ニヨリ夫ハ妻ノ姦通行爲ニ付同意又ハ宥恕シタルモノト爲スヲ得サルヤ勿論ナレハナリ斯ノ如ク夫カ妻ニ對シ重大ナル侮辱ヲ與ヘ又ハ惡意ヲ以テ遺棄シタルト爲スモ苟クモ夫婦關係ニシテ解消セラレス而カモ夫ニ於テ其妻ノ姦通行爲ニ付キ明示又ハ默示ニ同意又ハ宥恕シタル事實ノ認ムルヲ得サル本件ニ於テハ夫ハ何等夫權ノ行使ニ制限ヲ受クヘキ理ナキヤ明カナレハ夫タル原告ハ其夫權ノ作用トシテ其妻タル訴外眞造すいニ對シ絕對ニ貞操ヲ守ラシムル權アルト共ニ其妻ト姦シタル被告ハ夫タ

ル原告ノ夫權ヲ侵害シタルモノトシテ之カ賠償義務ヲ負擔スヘキハ勿論妻カ姦セラレタルニヨリ夫タル原告ハ其社會上ノ地位ヲ毀損セラレ精神上苦痛ヲ感スルニ至ルヘキヲ以テ之ニ對シ慰藉料支拂ノ義務アルヤ明カナリトス。

仍テ進ンテ損害賠償額如何ニ付キ案スルニ原告ハ被告ノ不法行爲ヲ原因トシテ夫權侵害及名譽毀損ノ慰藉料トシテ總金額千五百圓ノ賠償ヲ請求ス而シテ夫タル原告カ其妻タル訴外眞造すいニ對シ絕對ニ貞操ヲ守ラシムルノ權ヲ有シ其妻ニ與ヘタル重大ナル侮辱又ハ惡意ノ遺棄ノ事實ハ其夫權ノ行使ニ何等ノ制限ヲ與フルモノニアラサルコト前示ニヨリ明カナルモ夫權侵害及名譽毀損ヨリ生シタル損害賠償ヲ判定スルニ付テハ是等ノ事情モ亦斟酌スヘキ一資料タルヤ明カナレハ當裁判所ハ是等ノ事情及證人眞造すいノ供述ニヨリ明カナル訴外眞造すいハ被告ト私通ノ結果懐胎シタル事實竝ニ證人眞造すい、岡本正美ノ各供述ニヨリ推知シ得ヘキ原告被告ノ財産關係竝ニ社會上ニ於ケル地位等ヲ斟酌シテ被告ハ原告ノ妻タリシ訴外眞造すいト姦通シタル前示事實ニ基キ不法行爲トシテ原告ノ夫權侵害ニ對スル損害賠償金二百圓原告ノ名譽毀損ニ對スル慰藉料金百圓合計三百圓ヲ支拂フヘキ義務アルモノト判定ス然レトモ右範圍ヲ超越スル原告ノ請求ハ其部分ニ限り失當トシテ之ヲ棄却スヘキモノトス仍テ民事訴訟法第七十三條ニ則リ主文ノ如ク判決ス。

### 第十九章

執達吏たる被告が差押へたる物件を原告所有の家屋内に差置きたる爲めに原告が右家屋を利用するを得ざるに因り生じたる損害賠償請求の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、給付の訴。
- 2 當事者 原告は家屋の所有者で執達吏たる被告の爲めに之が使用収益を爲すことを妨げられたる者、被告は執達吏。
- 3 管轄 民訴總則の規定に従ふ。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金六百五十圓(民訴二二條一項)
- 6 貼用印紙 金十五圓(民訴印紙法二條)

明治四十一年(ワ)第二八四號損害賠償請求事件 (東京地方裁判所第三民事部判決)

原告 角 谷 和 市

東京區裁判所執達吏

被告 下 里 木 藏

【全文】被告ハ原告ニ對シ金三百五十圓及之ニ對スル明治三十九年六月十七日ヨリ本件判決執行済ニ至ル迄年五分ノ損害金ヲ支拂フヘシ。原告ノ其餘ノ請求ハ之ヲ棄却ス。

【事實】原告訴訟代理人ハ被告ハ原告ニ對シ金六百五十圓及之ニ對スル明治三十九年六月十七日ヨリ本件判決執行済ニ至ル迄年五分ノ損害金ヲ支拂フヘシ訴訟費用ハ被告ノ負擔トストノ判決ヲ求ムト申立テ其請求原因トシテ演述シタル事實ノ要旨ハ原告ハ其所有ナル東京府北豊島郡南千住町大字三ノ輪三百八十五番地三百九十一番地乃至四百番合併壹號宅地五反五畝所在木造瓦葺二階建一棟建坪十五坪七合五勺木造トタン葺平家一棟建坪百五十坪外ニ葺落シ十坪五合木造鐵板葺平家一棟建坪三十三坪木造鐵板葺平家一棟建坪十八坪木造トタン葺平家一棟建坪七合五勺外ニ葺落シ三坪七合五勺木造トタン葺平家一棟建坪四坪木造トタン葺平家一棟建坪五十坪外ニ底シ八坪木造鐵板葺平家一棟建坪十八坪外ニ底シ五坪木造鐵板葺平家建坪十九坪七合五勺木造鐵板葺平家一棟建坪二合五勺鐵板葺便所一棟建坪一坪二合五勺ノ建物ヲ明治三十八年一月二

第十九章 執達吏たる被告が差押へたる物件を原告所有の家屋内に差置きたる爲めに原告が右家屋を利用するを得ざるに因り生じたる損害賠償請求の訴

十日訴外永井八五郎及鈴木角太郎ノ兩名ニ賃料一ヶ月金百三十圓ノ約定ニテ賃貸シ來リタリ又被告ハ東京區裁判所ノ執達吏ニシテ訴外中島彌太郎及花村永次郎ノ右永井八五郎ニ對スル金千餘圓ノ債權ノ爲メ其強制執行ノ委任ヲ受ケ明治三十八年十二月二十六日前掲建物内ニ存在セシ永井八五郎、鈴木角太郎所有ノ有體動産ノ差押ヲ爲シ右建物内ニ置キタル儘其差押物ノ保管ヲ訴外内山辰之助ニ委ネタリ(右差押ニ對シテハ鈴木角太郎ヨリ異議ヲ主張シ審理ノ結果其強制執行ハ不法ナリト認メラレ鈴木角太郎ノ勝訴ニ歸シ該判決ハ確定シタリ)而シテ原告ト永井八五郎鈴木角太郎間ノ右建物ノ賃貸借ハ既ニ明治三十九年一月十二日ニ終了シタルニヨリ右兩名ニ對シ之カ明渡ヲ請求シタルニ被告ノ右差押物件カ其儘明治三十九年六月十五日迄繼續シテ建物内ニ存在シタル爲メ原告ハ明治三十九年一月十五日ヨリ同年六月十五日迄五ヶ月間全ク使用收益ヲナス能ハサリシニヨリ一ヶ月百三十圓宛右期間ノ賃料ノ損害ヲ被リタリ元來本件家屋ノ賃貸借解除ノ事實ハ解除ト同時ニ被告ニ之ヲ通知シタリ然ラストスルモ原告ハ明治三十八年十二月七日日本件家屋ニ付キ賃借人タリシ永井八五郎、鈴木角太郎ニ對シ執達吏菱谷廣司ヲシテ明渡ノ假處分ヲ執行セシメタルモノニシテ其後ニ至リ被告カ同所ニ於テ差押ヲナシタルモノナレハ假處分ノ事實ハ被告ニ於テ之ヲ知リシモノナリ然ルニ拘ラス既ニ家屋ノ明渡後モ猶其差押物件ニ對シ相當處分ヲ爲サス其儘差押物件ヲ右建物内ニ存在セシメタルモノナルヲ以テ民事訴訟法第五百三十二條ノ規定ニ基キ被告ハ之カ賠償責任アリト云フニアリテ立證トシテ甲第一號乃至第五號證ヲ提出シ證人菱谷廣司、鈴木角太郎ノ證言ヲ採用シ證人内山辰之助、小松徳太郎ノ喚問ヲ申請シタリ。

被告訴訟代理人ハ原告ノ請求ヲ棄却ストノ判決ヲ求ムト申立テ答辯トシテ本件家屋ノ所有者ハ原告ナルコト被告ハ訴外中島彌太郎及花村永次郎ノ委任ニヨリ訴外永井八五郎ニ對スル強制執行トシテ原告訴訟代理人主張ノ日時及場所ニ於テ有體動産ノ差押ヲナシタル事實及右強制執行ニ對スル訴外鈴木角太郎ノ異議ノ訴ニヨリ右兩名債權者ノ敗訴ニ歸シタル事實ハ何レモ之ヲ認ムルモ其差押カ明治三十九年六月十五日迄繼續シタル事實原告ハ本件家屋ヲ一ヶ月金百三十圓ニテ訴外永井八五郎鈴木角太郎ニ賃貸シタル事實及被告カ右賃貸借解除ノ通知ヲ受ケタル事實並ニ損害ノ數額其他ハ之ヲ認メス又假ニ本件家屋ニ付キ原告訴訟代理人主張ノ如キ賃貸借關係アリトスルモ差押品ハ必ずスシモ其差押場所ニ於テ保管スルヲ必要トセサルカ故ニ原告カ保管ノ場所ニ變更ヲ要スルトキハ債權者並ニ被告ニ之カ通知ヲ爲セハ可ナルヲ以テ原告訴訟代理人ノ主張事實ニテハ被告ニ責任アリト云フヲ得ス且又原告訴訟代理人主張ノ如キ損害アリトスルモ被告ニ故意又ハ過失ナキカ故ニ何等責ヲ負擔スヘキ理由ナシト陳述シ甲號證ノ成立ヲ認メテ同第四號證中ノ二、三、四及第五號證ヲ採用シ證人菱谷廣司及鈴木角太郎ノ各證言ヲ採用シタリ。

【理由】本件家屋ハ原告ノ所有ナルコト被告カ訴外中島及花村ノ委任ニ因リ原告訴訟代理人主張ノ如ク有體動産ノ差押ヲナシタル事實ハ當事者間ニ争ナシ而シテ原告カ右家屋ヲ永井八五郎及鈴木角太郎ノ兩名ニ賃料一ヶ月金百三十圓ニテ賃貸シ來リタル事

實右貸貸借カ明治三十九年一月十二日頃迄ニ終了シ賃借人ニ於テ明渡シタル事實及被告カ同年六月十五日迄前記差押物件ヲ保爭家屋内ニ存在セシメタル事實ハ被告訴訟代理人ノ否認スル所ナレトモ證人鈴木角太郎ノ永井八五郎ト共ニ原告ヨリ南千住町大字三ノ輪所在建物ヲ明治三十八年一月二十日ヨリ同年十二月七日迄一ヶ月家賃金百三十圓ニテ借受ケタルカ下里木藏ハ中島花村兩名ノ爲メニ永井ニ對スル執行トシテ證人等カ借受ケタル建物内ノ綿等ヲ差押ヘ其差押物品ハ證人等ノ借リ居ル建物ノ一部ナル倉庫内ニ置キ其差押ハ同年十二月二十八日ヨリ翌年六月十五日迄繼續シタリ而シテ證人ハ同三十八年十二月七日ニ明渡ヲ求メラレタルモ何分職工等ヲ使ヒ居ルコト故翌年一月中旬迄待チ貫ヒテ其家屋ヲ明渡シタリ證人カ明渡セシヨリ明治三十九年六月十五日迄其家ハ何人ニモ貸ササリシ旨ノ陳述證人菱谷廣司ノ右建物ニ付テハ原告ノ委任ニヨリ鈴木永井ニ對スル家屋明渡ノ執行ヲ爲シタリソレハ明治三十九年頃ト覺ユ尤モ先キニ假處分ヲ受ケ永井八五郎ハ他ヘ退キ角谷和方ヨリ内山ナル者ヲ留守番トシテ居ラシメタル旨ノ陳述證人小松德太郎ノ證人ハ明治三十九年一月二十日頃三ノ輪所在ノ角永製綿工場ニ貸家札ノ貼附シアリタルニヨリ賃借セントシテ其内部ヲ見タルニ當時其家屋ハ明渡サレ何人モ營業ヲナシ居ラス併シ差押品アリシ故苦情多カルヘシト思ヒ借ルコトヲ止メタル旨ノ陳述及成立ニ爭ナキ甲第三號證ニヨリ何レモ之ヲ認ムルヲ得然レトモ被告ニ對シ該家屋ノ賃貸借カ解除セラレタリトノ通知ヲ解除ノ當時ニナシタリトノ原告訴訟代理人ノ主張ニ付テハ證人内山辰之助ハ明治三十九年一月七八日頃被告

ノ代理君塚ニ之ヨリ原告ノ代理トシテ建物ヲ保管スト告ケタル旨供述スレトモ右證言ハ信憑スルニ足ラサルヲ以テ之ヲ採用セス而シテ他ニ之ヲ認ムヘキ立證ナキニ由リ右主張ノ事實ヲ認メ難シ然ラハ明治三十八年十二月七日日本件家屋ニ對シ原告カ執達吏菱谷廣司ヲシテ明渡ノ假處分ヲ爲サシメタル事實アリヤ又被告カ前記差押ヲナシタル當時右假處分ヲ知リタルカ若クハ知り得ヘキ狀態ニアリシヤ否ヤヲ按スルニ成立ニ爭ナキ甲第一號證ニヨレハ前記期日ニ右假處分ノ執行アリタル事實ヲ認ムヘク尙同證ニヨレハ建物中三棟ハ即時明渡シ難シトノ被申請人永井八五郎ノ申出ニヨリ十二月九日午前九時限り退去スヘキコトヲ命シタル外其他ノ建物ハ總テ之ヲ閉鎖シ入口ノ戸ヲ釘付ケトシ各入口ニハ當職占有保管中ナルヲ以テ何人ト雖モ當職又ハ管理人ノ許諾ヲ得スシテ出入スルヲ得ス若シ之ヲ犯ストキハ處罰ニ附セラレヘキ旨ノ告示ヲ貼附シ假處分中ナルコトヲ明カナラシメタリ倉庫ハ錠前ヲ下シ且封印ヲ施シタリトノ記載アルカ故ニ本件被告ノナシタル差押カ既ニ右假處分後ニ係レル以上ハ少クトモ被告ニ於テ明渡假處分ノ事實ヲ知り得ヘキ狀態ニアリシモノト云ハサルヘカラス而モ被告ノナシタル差押ハ成立ニ爭ナキ甲第二號證及同第四號證ノ一ニヨレハ債務者ニ非サル内山辰之助ニ保管セシメタルモノナルコト明カナリ然ルニ有體動産ノ差押ノ場合ニ債務者以外ノ者ニ差押物ヲ保管セシムルヲ得ヘキ規定ナキカ故ニ結局本件差押物ハ執達吏タル被告ノ保管ニ在ルモノト謂フヘク從テ差押物件ノアリシ建物ニ付キ將來明渡ノ結果ヲ生スル場合ノアルヘキコトハ被告ニ於テ豫知スヘキ所ニシテ若シ明渡サルニ於テハ被告

第十九章

執達吏たる被告が差押へたる物件を原告所有の家屋内に差置きたる爲めに原告が右家屋を利用するを得ざるに因り生じたる損害賠償請求の訴

ハ職務執行上差押物件ニ付キ相當處分ヲナスヘキハ云フヲ俟タサル所ナリ然ルニ本件家屋ニ付テハ既ニ明治三十九年一月十五日以前ニ於テ明渡ノ完了セルニ拘ラス依然トシテ同年六月十五日迄差押物件ヲ其家屋内ニ存在セシメ爲メニ家屋所有者タル原告ノ使用収益ヲ妨ケ損害ヲ生セシメタルハ全ク被告ノ職務執行上過失ト云フヘク民事訴訟法第五百三十二條ニ依リ之カ賠償ノ責アリト云ハサルヘカラス被告訴訟代理人ハ若シ果シテ原告訴訟代理人主張ノ如キ事實アリテ保管ノ場所ノ變更ヲ要ストセハ須ク債權者竝ニ被告ニ其旨ヲ通知シテ場所ノ變更ヲ求ムヘシ然ルニ之ヲ爲サシテ損害ヲ受ケタリトスルモ被告ニ於テ之ヲ賠償スヘキ謂ハレナシト主張スレトモ家屋所有者タル原告ハ被告ニ對シテ此ノ如キ豫告ノ義務ヲ負擔スルモノニ非サルカ故ニ右抗辯ハ之ヲ採用セス然ラハ其損害ノ數額ハ幾何ヲ相當トスヘキヤヲ案スルニ原告訴訟代理人ハ從來ノ賃料ヲ基本トスレトモ被告ノ差押ヘタル物件カ本件家屋全部ニ散在シタルニ非サルコト前記鈴木角太郎ノ證言及成立ニ争ナキ甲第四號證ノ二及三ニヨリ認め得ルト同時ニ原告カ被告ニ對シテ差押物ノ移轉ヲ請求シ以テ自己所有物ノ完全ノ使用収益ヲ爲シ得ヘキ途ヲ講シ得ルニ拘ラス之ヲ爲ササリシハ原告ニ於テモ亦幾分ノ過失ナシトセサルカ故ニ之ヲ斟酌シ金三百五十圓及之ニ對スル明治三十九年六月十七日以後ノ年五分ノ損害金ノ請求ヲ相當トシ其餘ノ請求ヲ不當トシテ棄却シタリ仍テ訴訟費用ニ付キ民事訴訟法第七十三條第一項ヲ適用シ主文ノ如ク判決ス。

### 第二十章

改築家屋を引續き賃貸すべしとして舊家屋を明渡さしめながら賃貸せざるにより借主に生じたる損害賠償請求の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、給付の訴。
- 2 當事者 原告は元被告より家屋を賃借し居りたる者、被告は右家屋の所有者にして之を改築後引續き賃貸すべしとして明渡を求めたる者。
- 3 管轄 民訴總則の規定に従ふ。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金五千圓(民訴二二條一項)
- 6 貼用印紙 金三十圓(民訴印紙法二條)

大正十五年ワ第四一〇號損害賠償請求事件 (東京地方裁判所第四民事部昭和五年三月三十一日言渡)

第二十章 改築家屋を引續き賃貸すべしとして舊家屋を明渡さしめながら賃貸せざるにより借主に生じたる損害賠償請求の訴

原告 加藤 末松  
被告 山田

【主文】被告ハ原告ニ對シ金千二百圓及之ニ對スル大正十五年二月十一日以降昭和二年四月二十一日迄昭和二年五月十三日以降支拂濟ニ至ル迄年五分ノ金額ヲ支拂フヘシ原告ノ其餘ノ請求ハ之ヲ棄却ス訴訟費用ハ之ヲ三分シ其一ヲ原告其餘ヲ被告ノ各負擔トス此判決ハ原告勝訴ノ部分ニ限リ金四百圓又ハ之ニ相當スル有價證券ヲ供託スルトキハ假ニ執行スルコトヲ得。

【事實】原告訴訟代理人ハ被告ハ原告ニ對シ金五千圓及之ニ對スル大正十五年二月十一日以降支拂濟ニ至ル迄年五分ノ金額ヲ支拂フヘシ訴訟費用ハ被告ノ負擔トストノ判決並擔保ヲ條件トスル假執行ノ宣言ヲ求ムル旨申立テ其請求原因トシテ原告ハ大正六年中被告ヨリ其所有ニ係ル東京府豊多摩郡澁谷町中澁谷九百五十六番地(舊稱)所在木造瓦葺二階二戸建一棟建坪二十坪五合二階十三坪七合五勺ノ内西側一戸ヲ期限ノ定メナク賃借シ爾來同所ニ於テ飲食店ヲ營ミ居リタリ而シテ大正十四年三月頃ノ賃料ハ一个月金四十五圓ナリシカ其頃被告ハ原告ニ對シ右家屋ヲ改築セント欲スル故一時其明渡ヲ爲サレ度キ旨求メタルニヨリ原告ハ之ヲ承諾シ同月十四日被告ハ右家屋ノ改築ヲ同年四月末日迄ニ完成スヘク從來ノ賃借契約ハ其儘存續セシメ置キ改築完成ノ上ハ從前通り該家屋ヲ原告ニ使用セシムヘキコトヲ約シ原告ハ一時該家屋ヲ被告ニ明渡シタリ而シテ右家屋ノ改築ハ同年十月上旬漸ク完成シタルヲ以テ原告ハ頻リニ其引渡ヲ懇

請シタルモ被告ハ之ニ應セサルノミナラス同月十日被告自身カ右家屋ニ於テ吳服屋營業ヲ開始スルニ至レリ原告ハ同年十二月二十五日更ニ被告ニ對シ大正十五年一月十日迄ニ右家屋ヲ原告ニ引渡シテ之カ使用ヲナサシムヘク若シ之カ履行ヲ爲ササルトキハ前示賃借契約ヲ解除スヘキ旨ノ通知ヲ爲シタルモ被告ハ右期間内ニ履行ヲ爲ササルヲ以テ本件賃借契約ハ大正十五年一月十日解除セラレ原告ハ右家屋賃借權ヲ喪失シ解除當時ニ於ケル該借家權ノ價格金五千圓ニ相當スル損害ヲ蒙リタルヲ以テ該金額及之ニ對スル本件訴訟送達ノ日ノ翌日ナル大正十五年二月十一日以降年五分ノ損害金ノ支拂ヲ求ムル爲本訴ニ及フト陳述シ被告主張ノ如キ合意解除ノ事實ハ之ヲ否認スト述ヘ立證トシテ甲第一號證第二號證ノ一、二、第三號證ヲ提出シ證人林榮祥(第一、二回)大橋藤重郎、石原正甫、河村喜輔ノ各證言及鑑定人山口金伍ノ鑑定ノ結果ヲ授用シ乙號各證ノ成立ヲ認メタリ

被告訴訟代理人ハ原告ノ請求ヲ棄却ストノ判決ヲ求メ答辯トシテ原告カ大正十四年三月十四日本件家屋ヲ明渡シタル時從來ノ賃借ハ合意ニヨリ解除シ改築完成ノ上ハ新ニ賃借契約ヲ爲スヘキ旨ノ豫約ヲ爲シタルモノニシテ原告主張ノ如ク從來ノ賃借契約ヲ其儘存續セシメタルモノニ非ス而シテ被告ハ大正十四年四月一日右家屋ノ改築工事ニ着手シタルトコロ該家屋ノ敷地ノ所有者タル訴外峯岸梅吉ハ該家屋ハ荒廢シタルヲ以テ被告ノ借地權消滅シタリト主張シ土地明渡請求權ノ執行保全トシテ右改築工事禁止ノ假處分命令ヲ東京區裁判所ニ申請シ(同廳大正十四年(ト)第一、一八六號事件)

第二十章 改築家屋を引續き賃貸すべしとて舊家屋を明渡ししめながら賃貸せざるにより借主に生じたる損害賠償請求の訴

同裁判所ハ右岸岸ノ申請ヲ容レ同月二十九日右工事禁止ノ執行處分ヲ爲シタリ續テ同人ハ被告ニ對シ東京地方裁判所ニ右土地明渡ノ本案ノ訴ヲ提起スルニ至リ(同廳大正十四年(ワ)第一、八七八號事件)前示改築工事進捗ノ上ニ障害ヲ來シ何時改築完成スルヤ逆賭シ難キ状態トナリタルヲ以テ原告ハ被告ニ對シ何時迄モ手ヲ空シクシテ紛争ノ落着ヲ待ツ能ハサレハ他ニ相當ノ家ヲ借りテ之ニ移轉シ營業ヲ開始シ度キ故曩ニ被告ニ差入レタル敷金ヲ返還シ且適當ノ解決ヲ爲サレタキ旨申出テタルヲ以テ大正十四年五月二十二日原、被告協議ノ上原告カ大正六年中本件家屋ノ前賃借人タル訴外加藤木銀次郎ヨリ買受ケタル造作代金三百圓ヲ標準トシテ該金額ヲ被告ヨリ原告ニ移轉料トシテ贈與スルコト原告カ立退ノ際引取リタル疊建具其他ノ造作全部ヲモ原告ニ贈與スルコトヲ約シテ前示貸借ノ豫約ヲ解除シ同日被告ハ曩ニ原告ヨリ預リ居リタル敷金五十圓ヲ返還シタリ而シテ右移轉料ハ同日原告ニ交付シ原告ノ所持スル本件契約書(甲第一號證)ノ返還ヲ受クヘカリシトコト原告ハ今何處ニ藏メアリヤ見當ラサルヲ以テ翌二十三日之ヲ被告方ニ持參シ右移轉料ト引換ニ之カ引渡ヲ爲スヘシト申述ヘナカラ遂ニ右契約書ヲ被告方ニ持參セサリシモノナリ本件家屋ノ改築完成ノ期限ヲ大正十四年四月末日ト定メタルコトハ之ヲ否認ス大正十四年十二月二十五日原告主張ノ如キ催告並解除ノ通知ヲ受ケタルコトハ之ヲ認ムルモ本件契約ハ前示ノ如ク既ニ同年五月二十二日當事者ノ合意ヲ以テ之ヲ解除シタルモノナルヲ以テ右催告並解除ノ通知ハ何等ノ效力ヲ生セス損害額ハ之ヲ争フ其餘ノ原告主張事實ハ全部之ヲ認ムト陳述シ立證トシテ乙第一

號證第二號證ノ一、二ヲ提出シ證人秋元キヨノ證言原告本人ノ供述原、被告對質ノ結果及鑑定人森島淺五郎ノ鑑定ノ結果ヲ援用シ甲號各證ノ成立ヲ認メタリ

【理由】原告カ大正六年中被告ヨリ原告主張ノ如キ家屋ヲ期限ノ定メナク賃借シ爾來同所ニ於テ飲食店ヲ營ミ居タルコト及大正十四年三月當時右家屋ノ賃料ハ一ヶ月金四十五圓ナリシコトハ執レモ當事者間ニ争ナシ而シテ成立ニ争ナキ甲第一號證證人秋元キヨノ證言原告本人ノ供述及原、被告對質ノ結果ニ依レハ大正十四年三月頃被告ハ原告ニ對シ右家屋ヲ改築セント欲スル故一時其明渡ヲ爲サレ度キ旨述ヘタルニヨリ同月十四日原、被告協議ノ上被告ハ可及的速ニ右家屋ノ改築ヲ完成シ改築完成ノ上從前通り該家屋ヲ原告ニ賃貸スヘク改築後被告ハ原告ニ對シ權利若ハ造作其他如何ナル名義ニ於テモ金錢ノ支拂ヲ要求セサルコト家賃ハ改築後改メテ協約スヘキコトヲ約シタル事實ヲ認メ得ヘク原告カ其頃該家屋ヲ被告ニ明渡シタルコトハ争ヒナシ被告ハ右契約ハ從前ノ賃貸契約ヲ解除シ改築完成ノ上ハ新ニ賃貸借契約ヲ爲スヘキ旨ノ豫約ヲ爲シタルニ過キスト主張スレトモ前示認定ノ事實ヨリ觀察スルモ右契約當事者ノ意見ハ從來ノ賃貸借契約ハ其儘存續セシメ置キ只家賃ノ點ニ付テハ改築後新家屋ニ相當ナル家賃ヲ協定スヘキコトヲ定メタルニ過キスト認ムルヲ相當トス被告ハ同年五月二十二日原告ト合意ノ上右契約ヲ解除シタリト主張スルヲ以テ按スルニ成立ニ争ナキ乙第一號證及原被告對質ノ結果ニ依レハ原告ハ大正十四年五月二十二日被告ヨリ本件家屋ノ敷金ノ返還ヲ受ケタル事實ヲ認メ得ヘク該事實ノミヨリ見ルトキハ本件家屋ノ賃貸借終了シ

タルモノノ如シト雖右ハ被告カ大正十四年四月四日頃本件家屋ノ改築工事ニ著手シ間モナク該家屋ノ敷地ノ所有者タル訴外峯岸梅吉ヨリ被告主張ノ如キ假處分ノ執行ヲ受ケ續テ本案ノ訴ヲ提起セラルルヤ被告ハ原告ヲシテ本件家屋ニ對スル權利ヲ斷念セシメント欲シ原告ニ對シテ右事情ヲ告ケ改築ハ何時完成スルヤ分ラヌ故一應敷金ヲ返還セン原告ニ於テ假令受領ヲ拒絶ストモ被告カ之ヲ供託セハ原告カ受領シタルト同様ノ結果ト爲ルヘク又之ヲ受領スルモ原告カ右家屋ニ付有スル權利ニ何等ノ影響ナカルヘシト申述ヘ原告カ再三拒絶シタルニ拘ラス強ヒテ右敷金ヲ受取ラシメタル上前示乙第一號證ノ受取證ヲ徴シタル次第ニシテ其際原告ハ前示貸貸借ノ解除ニ同意シタル事實ナキコト成立ニ争ナキ乙第二號證ノ一、二証人大橋藤重郎、河村喜輔、秋元キヨノ各證言原告本人ノ供述及原告對質ノ結果ニ徴シ明白ナリ而シテ右家屋ハ同年十月上旬改築完成シ同月十日被告自身カ該家屋ニ於テ吳服屋營業ヲ開始シタルコト及被告カ同年十二月二十五日原告主張ノ如キ催告並解除ノ通知ヲ受ケタルモ期間内ニ履行ヲ爲ササリシコトハ孰レモ争ナキヲ以テ本件貸貸借契約ハ大正十五年一月十日適法ニ解除セラレタルモノト認ムヘキモノトス而シテ右解除當時ニ於ケル本件家屋ノ貸借權ノ價格ハ鑑定人山口金吾ノ鑑定ノ結果ニ依リ少クモ金千二百圓ト認定ス鑑定人森島淺五郎ノ鑑定ノ結果ハ採用セス原告ハ右借家權ノ價格ハ金五千圓ナリト主張スレトモ其提出援用ニ係ル全證據ニ依ルモ未タ以テ右原告ノ主張事實ヲ認ムルニ足ラス原告ハ前示解除ニ因リテ右借家權ヲ喪失シ其價格ニ相當スル損害ヲ被リタルモノナルヲ以テ原告ノ本訴請求

中被告ニ金千二百圓及之ニ對スル本件訴狀送達ノ日ノ翌日ナルコト記録上明白ナル大正十五年二月十一日以降昭和二年勅令第九十六號ニヨリ支拂ヲ猶豫セララル昭和二年四月二十二日以降同年五月十二日迄ノ期間ヲ除キ右支拂濟ニ至ル迄年五分ノ損害金ノ支拂ヲ求ムル部分ハ正當ナルモ其餘ハ理由ナキヲ以テ之ヲ棄却スヘク訴訟費用ニ付民事訴訟法第八十九條第九十二條ヲ假執行ノ宣言ニ付同法第九十六條第一項ヲ各適用シテ主文ノ如ク判決ヲ爲ス

### 第二十一章

判事が故意に法律を曲解して原告に不利益なる裁判を爲したるに因りて生じたる損害

#### 賠償請求の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟 給付の訴。
- 2 當事者 原告は損害を被りたる者、被告は判事。
- 3 管轄 民訴總則の規定に従ふ。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金二千圓(民訴二二條一項)

第二十一章 判事が故意に法律を曲解して原告に不利益なる裁判を爲したるに因りて生じたる損害賠償請求の訴



6 貼用印紙 金二十五圓(民訴印紙法二條)

大正四年(ワ)第六二六號損害金請求事件東京地方裁判所第三民事部大正四年十一月五日判決)

原告	栗屋熊植
被告	鶴見守義
被告	棚橋愛七
被告	平野猷太郎

【本文】原告ノ請求ヲ棄却ス。

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス。

【事實及理由】原告ハ一定ノ申立トシテ被告等ハ連帶シテ原告ニ對シ金二千圓及之ニ對スル大正四年一月一日ヨリ辨濟當日ニ至ル迄年五分ノ割合ヲ以テ遅延損害金ヲ支拂フヘシ訴訟費用ハ被告等ノ連帶負擔トストノ判決ヲ求メ其請求ノ原因トシテ陳述シタル要領ハ被告等ハ明治四十四年十一月十六日大審院第二刑事部判事トシテ在職中原告ノ同院明治四十四年(レ)第二一四九號管利誘拐被告事件ノ上告ニ對スル裁判ヲ爲スニ當リ原告カ上告理由第五點トシテ掲ケタル證人安達サワハ被告ノ妻ヒサノ養母タリシ事實アルニ拘ラス原審カ右サワヲ證人トシテ宣誓セシメ訊問シタル豫審調書ヲ採用シテ斷罪ノ資料ニ供シタルハ違法ナリトノ論旨ニ對シ故意ニ刑事訴訟法第二百二十三條第二

號但書ノ解釋ヲ誤リ原告ノ右論旨ヲ理由ナシトシテ上告ヲ棄却シ終ニ原告チシテ冤チ訴フルノ途無キニ至ラシメ多大ノ損害ヲ被ラシメタルモノナリ仍テ之カ損害ノ賠償ヲ求ムルタメ本訴請求ニ及ヒタル次第ナリト云フニ在リ。

被告等ノ訴訟代理人ハ原告ノ請求ヲ棄却ストノ判決ヲ求メ其理由トシテ原告ノ主張事實中被告等カ大審院判事トシテ在職中右刑事事件ニ付キ上告棄却ノ判決ヲ下シタルコト及原告カ服役セシ事實ハ之ヲ認ムルモ該判決ハ被告等ノ故意若クハ過失ニ出テタル誤判ニアラス假ニ該判決カ被告等ノ故意若クハ過失ニ出テタルトシテ責任ヲ負フヘキ謂レナシト答辯シタル行爲ニシテ之ニ對シ民法上不法行爲トシテ責任ヲ負フヘキ謂レナシト答辯シタル。

仍テ案スルニ凡ソ官吏カ國家ノ機關トシテ其職務ヲ行フニ當リ故意又ハ過失ニ因リテ他人ニ損害ヲ加ヘタリトスルモ法令ニ特別ノ明文無キ以上ハ官吏ニ於テ其損害ヲ賠償スヘキ義務無キコトハ我現行ノ法制上疑ヲ容レサル所ナリ竊テ本案ニツキ之ヲ觀ルニ被告等カ原告ノ管利誘拐被告事件ノ上告裁判ヲ爲スニ當リ原告ノ主張シタル前記上告第五ノ論旨ヲ理由無シトシテ排斥シ上告ヲ棄却シタルノ事實ハ當事者間ニ爭ナキ所ナリト雖モ被告等ノ右行爲ハ當時大審院判事トシテ其職務ヲ執行シタルモノニ外ナラサルカ故ニ假ニ原告主張ノ如ク被告等カ故意ヲ以テ刑事訴訟法ノ解釋ヲ誤リ原告ニ損害ヲ與ヘタリトスルモ我現行法令中被告等カ之ニ對シ損害賠償ノ責ニ任スヘキコトヲ規定シタルモノ一モ之アルコト無ケレハ原告ニ於テハ之カ請求ノ途無キモノト云ハサ

第二十一章

刑事が故意に法律を曲解して原告に不利なる裁判を爲したるに因りて生じたる損害賠償請求の訴

ルヘカラス刑事訴訟法第十四條但書ノ規定ハ被告人カ無罪ノ判決ヲ受ケタル場合ニ限リ適用セラルヘキ法意ニシテ本件ノ如ク有罪ノ判決確定セタル場合ノ如キハ其範圍ニ屬セサルモノト解スルヲ相當トス。

然ラハ即チ原告ノ請求ハ夫レ自體ニ於テ既ニ不當ナルコト明カナルヲ以テ更ニ進ンテ審理スルコトヲ須ヒス本訴請求ハ之ヲ棄却スヘキモノナリトス  
仍テ訴訟費用ニ付テ民事訴訟法第二百三十一條第二項第七十二條第一項ヲ適用シテ主文ノ如ク判決ス

第五編 商事編

## 第一章 原被兩會社間の合併契約確認並に計算書提出請求の訴

本訴は次の二個の訴からなる。

### 第一 原被兩會社間の合併契約確認の訴。

- 1 訴の性質 通常訴訟、確認の訴。
- 2 當事者 原告は合併契約を爲したる一會社、被告は他の一會社。
- 3 管轄 民訴總則の規定に従ふ。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金百圓(民訴印紙法三條一項)
- 6 貼用印紙 金三圓五十錢(同法二條)
- 7 商法四四條ノ三參照。

### 第二 計算書提出請求の訴。

- 1 訴の性質 通常訴訟、給付の訴。

第一章 原被兩會社間の合併契約確認並に計算書提出請求の訴

2 當事者 3 管轄 4 訴提起の時期 5 訴訟物の價額 6 貼用印紙に付夫々前説明参照。  
7 以上二個の合算した訴訟物の價額は結局金二百圓で(民訴二三)貼用印紙は七圓である。(法二條)

大正六年(ワ)第六一三號契約確認竝ニ計算書提出請求事件 (東京地方裁判所第二民事部  
大正七年十一月九日判決)

原告

九州電燈鐵道株式會社

右法律上代理人取締役

伊 丹 彌 太 郎

被告

九州水力電氣株式會社

右法律上代理人取締役

日 比 谷 平 左 衛 門

【全文】 原告ノ請求ハ之ヲ棄却ス。

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス。

【事實】 原告訴訟代理人ハ大正二年十一月三十日原告及被告間ニ締結シタル契約中左  
記ノ如キ内容ノ條項ニ從ヒ大正二年四月三十日ニ於ケル原被雙方ノ現在資産勘定ニ基  
キ又同日以後資産勘定ニ變更アルトキハ同日ヲ基礎トシテ計算シ合併後ノ新會社ハ拂  
込金額ニ對シ年一割ヲ下ラサル利益配當ヲ爲シ得ヘキコトヲ標準トシ新會社ノ資本額  
ヲ定メ其株式ヲ原被雙方會社ニ割當ツルノ條件ヲ以テ原被兩會社ノ合併實行ノ手續ヲ

爲スヘキ法律關係ノ原被雙方間ニ存在スルコトヲ確認ス

第一原告及被告ハ大正三年四月三十日ニ於テ現實シ得ヘキ資産勘定ニ基キ合併ヲ實行  
スルコト

第二原告及被告ハ前項ノ資産並ニ損益ノ計算書ヲ作成シ相互審査ノ上原被雙方ノ承認  
セルモノヲ基礎トシ左ノ條件ニ依リ合併ヲ遂行スルコト

(一) 原告及被告合併後ノ新會社ハ確實ニ一ケ年一割ニ當ル株主配當金ヲ爲シ得ヘキコ  
トヲ標準トスルコト

(二) 前記ノ標準ニ依リ原告及被告ノ承認シタル計算書ノ利益配當ノ過不足ヲ查照シ不  
足セル分ハ其不足額ニ超過セル分ハ其超過額ニ比例シテ原告被告兩會社株主ノ引受  
株數ヲ算出ス若シ其算出ニ方リ端數ヲ生シタルトキハ其分ハ現金ヲ以テ之ヲ決済ス  
ヘシ

被告ハ大正二年十一月三十日附原告被告間ノ契約書第三項及第四項ニ定ムル委員三名  
ヲ指定シ合併ノ基礎タル被告ノ資産及損益計算書ヲ原告ニ提出スヘシ訴訟費用ハ被告  
ノ負擔トストノ判決ヲ求ムル旨申立テ其請求ノ原因トシテ演述シタル事實ノ要旨ハ原  
告會社ハ福岡外數縣殊ニ其樞要市邑ヲ網羅シテ電燈電車其他ノ電氣事業ヲ經營シ來リ  
タルトコロ同シク九州ニ於テ電氣事業ヲ營メル被告會社ハ勢ヒ原告會社ノ事業ニ拮抗  
スルノ策ニ出テタルヲ以テ茲ニ激烈ナル競争ヲ惹起シ延テ此無益ナル競争ハ兩會社ノ  
營業ニ影響スルコト極メテ大ナルモノアリシヨリ雙方妥協ヲ希望スルモノ漸ク多ク大

第一章 原被兩會社間の合併契約確認竝ニ計算書提出請求の訴

正二年四月頃ヨリ兩社ノ重役間ニ稍具體的ニ其交渉ヲ開始スルニ至リシカ同年十月中原告會社取締役松永安左衛門被告會社取締役梅谷清一問ニ交渉漸ク熟シ同年十一月中右梅谷清一ヨリ合併ニ付キ被告會社側ニ於テ熟議ヲ終リタル旨ノ通知アリタルニヨリ原告會社側ヨリハ右松永安左衛門被告會社側ヨリハ右梅谷清一外三名及同會社相談役和田豊治相會シ其交渉ヲ進メタルトコロ不調ニ終ラントシタルモ訴外豊川良平串田萬藏等ノ仲介ニヨリ大正二年十一月三十日ニ至リ兩會社共株主總會ノ承認ヲ條件トシテ合併申合契約ヲ締結シ(一)原被兩會社ハ大正三年四月末日ニ於テ現實シ得ヘキ資産勘定ニ基キ合併ヲ實行スルコト(第二項)(二)兩會社ハ前項ノ資産並ニ損益ノ計算書ヲ作成シ相互審査ノ上原被兩會社ノ承認セルモノヲ基礎トシ原被合併後ノ新會社ハ確實ニ一ケ年一割ニ當ル株主配當金ヲ爲シ得ヘキコトヲ標準トシテ合併スルコトヲ主要項目トシ此標準ニ依リ原被告ノ承認シタル計算書ノ利益配當ノ過不足ヲ查照シ不足セシ分ハ其不足額ニ超過セル分ハ其超過額ニ比例シテ原被兩會社株主ノ引受株數(一株金五十圓拂込濟ヲ算出スルコトトシ第二項)其他審査委員ノ選定計算書ノ提出期日調停者ノ選定(第五項)原被告ノ便利ト認メタル案件ノ處理(第六項)ニ關スル事項等ヲ定メ尙之ニ牽連シテ原告所有ノ後藤寺電燈株式會社株式被告ニ讓渡スルコト並ニ福岡市ニ於ケル兩會社ノ營業關係ニ付キ契約ヲ爲シタルモノニシテ原告會社並ニ被告會社ハ互ニ右契約第一項第二項ノ約旨ニ基キ原被兩會社ノ合併ヲ實行スル權利ヲ有シ義務ヲ負擔シタルモノナリ右合併ハ兩會社解散シテ新會社ヲ設立スルモノニシテ其新設會社ノ資本ニ付キテハ

雙方會社ノ財産ヲ評價シ之ヲ資産トシテ一株五十圓拂込濟ノ株式ヲ交付シ兩會社ノ資産ノ範圍ニ於テ此株式ヲ割當ツルモノナリ而シテ各會社ノ資産ハ大正三年四月末日ニ於ケル狀態ニ於テ評價シ合併ヲ實行スル趣意ナリトス仍テ原告會社ハ大正二年十二月十八日被告會社モ亦同月中何レモ之ヲ株主總會ノ特別決議ニ附シ各其承認ヲ得タル以テ原告會社ハ著々合併ノ準備ヲ爲シタルニ拘ハラヌ被告會社ハ誠意事ニ當ラス合併ノ基礎トナルヘキ兩會社カ大正三年四月末日ニ現實シ得ヘキ會社ノ資産並ニ損益計算書提出ノ期日タル大正三年一月十五日ヲ同月三十日ニ延期ヲ求メ更ニ大正三年十一月二十六日ニ至リ合併ノ實行ヲ大正四年十一月迄延期スルノ止ムナキニ至リ同時ニ覺書ヲ交換シテ右十一月以前ト雖モ兩會社ノ狀態及財界ノ事情ニ依リ適當ナル場合ニハ合併ヲ實行スルコト並ニ其期間内ハ兩會社ハ營業上誠意ヲ以テ互ニ便利ヲ計リ合併ヲ容易ナラシムルコトヲ約シタルニ拘ハラヌ右期日ヲ徒過シ大正五年一月三十一日ニ至リ被告會社ハ更ニ同年十一月迄之カ延期ヲ申込ミ其覺書ヲ交換スルニ至リタリ然ルニ右期日ニ至ルモ合併實行ノ運ヒニ至ラス却テ之ヲ拒否スルノ態度ニ出テタルヲ以テ先ツ前記審査委員ノ指定並ニ資産及損益計算書ノ提出ヲ催告シタルモ被告會社ハ之ニ應セサルニヨリ茲ニ合併義務ノ確認ヲ求メ尙ホ其基礎タル右審査委員ノ指定並ニ損益計算書ノ提出ヲ求ムル爲メ本訴請求ニ及ヒタリト謂フニアリテ

(一)合併契約其モノト合併契約ヲ爲スコトヲ目的トスル契約(假ニ之ヲ合併ノ豫約ト稱ス)トハ之ヲ區別セサルヘカラス合併契約ハ其締結ト同時ニ當事會社消滅シ其財産ヲ包括

的ニ當事者ノ一方又ハ新設會社ニ移轉スル效果ヲ有スル會社特有ノ契約ニシテ所謂債務契約ニ非サルヲ以テ當事者ニ合併ヲ爲スヘキ義務ヲ負擔セシムルモノニアラス之ニ反シ合併ノ豫約ハ合併決議前ニ行ハレ之ニ依リテ合併ニ關スル豫備的ノ手續ヲ履踐シ且合併契約ヲ爲ス義務ヲ發生セシムル債務契約ナリ合併契約ハ其豫約ノ履行行爲トシテ締結セララルモノトス故ニ合併ヲ實行スル義務ノ有無ハ合併豫約ノ存否ニ依リテ決スヘク合併契約自體ノ成否ニヨリテ判スヘキモノニアラス從テ合併契約ナキヲ以テ合併ヲ實行スル義務ナシトノ被告主張ハ其當ヲ得ス原告ハ合併契約其モノノ成立ヲ主張スルニアラス合併ノ豫約ノ成立ヲ主張シ以テ被告ニ合併實行ノ義務アルコトノ確認ヲ求メントスルモノナリ

- (二) 株式會社ノ取締役ハ會社ノ營業全部ノ處分ヲ爲シ又ハ當然ニ會社ノ解散ヲ來スヘキ行爲ヲ爲スコトヲ得ル代表權アルヘカラサルヲ以テ取締役ノ締結シタル合併ノ實行義務ヲ負擔スル契約ハ無効ナルカ如シト雖モ本件契約ハ合併契約其モノニアラサルカ故ニ當然ニ會社ノ解散ヲ來スモノニアラサルヲ以テ取締役ハ本件ノ如キ契約ヲ締結スル權限ヲ有シ從テ右契約カ有效ニ成立スルヲ妨ケサルノミナラス右ハ原被兩會社ノ株主總會ノ決議ニヨリ承認セラレタルモノナルヲ以テ假ニ取締役ニ右ノ如キ權限ナク從テ締結當時ハ一ノ契約案ニ過キサリシトスルモ右決議ニヨリテ契約ハ有效ニ成立シ兩會社ヲ羈束スルノ效力ヲ發生シタルモノト云ハサルヘカラス
- (三) 合併契約ヲ締結スルニハ株主總會ノ特別決議ヲ必要トスルヲ以テ取締役ノ爲シタル

合意又ハ合併決議ニアラサル株主總會ノ決議ニヨリテ締結シタル合併豫約ニヨリテ合併契約締結ノ債務ヲ負擔シ會社ヲシテ合併決議ヲ爲シ及合併契約ヲ締結セサルヘカラサラシムルハ合併ニ特別決議ヲ要ストシタル法意ニ副ハサルヲ以テ取締役ノ爲シタル合併豫約ハ合併決議ニアラサル株主總會ノ決議アル場合ト雖モ合併契約締結ノ義務ヲ生セシムルコトヲ得サルカ如シト雖モ株式會社ノ取締役ノ代表行爲ト株主總會ノ決議トヲ以テ債務契約ヲ締結シタルトキハ其契約ノ趣旨ニ從ヒ債務ヲ負擔シ會社ヲ拘束スルハ當然ニシテ會社ハ合併ノ決議ヲ爲シ及合併契約ヲ締結セサルヘカラサルハ明白ナリ假ニ合併豫約ハ株主總會ノ承認アリタル場合ニ於テモ合併決議其モノヲ拘束セストスルモ是レ合併豫約上ノ債務カ合併ヲ否トスルノ決議ニヨリ不履行ト成ルコトアリト云フニ止マリ其爲メニ合併ヲ實行スル義務カ初メヨリ發生シ得スト云フノ理由トナルモノニアラス故ニ合併ノ豫約カ合併決議ヲ拘束セストノ理由ヲ以テ合併決議ヲ爲シ合併契約ヲ締結スル債務加ニ合併ノ準備手續ヲ履踐スル債務其モノヲ成立シ得スト爲スハ其當ヲ得ス故ニ本訴ニ於テ原被兩會社代表者間ニ合併豫約ヲ締結シ兩會社株主總會カ之ヲ承認シタル以上ハ茲ニ契約所定ノ行爲ヲ爲スヘキ債務ヲ生スルモノトス。

(四) 被告ハ委員ノ指定ハ大正三年一月中ニ之ヲ了シタリト主張スレトモ其後合併ノ實行ヲ延期シ再ヒ之ヲ大正五年十一月迄延期シタルヲ以テ右期日ニ於テ更メテ之カ指定ヲ爲スヘク遅クトモ大正五年十一月末日迄ニ其指定ヲ爲ササルヘカラサル筋合ナルヲ以テ右延期前ニ一度指定シタリトノ理由ヲ以テ延期後ノ指定ヲ免脱セラルヘキモノニア

ラス。

(五) 被告ハ原告ノ營業權ノ一部ノ讓渡ヲ受ケタル上ニアラサレハ計算書提出ノ義務ナシト主張スレトモ營業權ノ一部讓渡ト計算書提出トハ何等先後ノ關係ニ立ツモノニアラサルコトハ申合書ノ文辭ニ徴シテ明白ナリ加之福岡市附近ニ於ケル架空線及室内取付設備ノ代金支拂完了迄ハ右區域内ニ於ケル一切ノ經營ハ原告會社ノ手ニ於テ行ハルル約旨ナルニ最初ノ契約上計算書提出期日ハ大正三年一月十五日ニシテ前記代金支拂期日タル大正三年五月末日ヨリ三ヶ月半以前ニアリ由是觀之營業權ノ讓渡ト計算書提出トハ全然別個ニ行ハルヘキ約旨ナルコトヲ明カニシ得ヘク又讓渡ナクトモ資産勘定計算書ヲ作成提出シ得ヘキコトヲ明カニシ得ヘシ尙計算ノ基礎ハ大正三年四月末日ニ現實シ得ヘキ資産勘定ニシテ計算當時ニ於テ現在スル資産勘定ニアラサルヲ以テ營業權ノ讓渡如何ニ拘ハラス計算上資産額ヲ決定シ得ヘキコト明白ナリ故ニ營業權ノ讓渡ナシトノ理由ヲ以テ計算書提出ヲ拒ム被告ノ抗辯ハ其理由ナシト陳述シ立證トシテ甲第一乃至六號證ヲ提出シ證人串田萬藏ノ訊問ヲ求メ乙號各證ノ成立ヲ認メタリ。

被告訴訟代理人ハ原告ノ請求ヲ棄却ス訴訟費用ハ原告ノ負擔トストノ判決ヲ求ムル旨申立テ其答辯トシテ演述シタル事實ノ要旨ハ

(一) 被告會社取締役梅谷清一等カ大正二年十一月三十日原告會社取締役松永安衛門等ト原告主張ノ如キ申合書ヲ作成シタル事實ハ之ヲ認ム右申合書ノ趣旨カ大正二年十二月十八日ノ被告會社株主總會ニ(出席株主總株主ノ半數以上其株數總數ノ半數以上報告

セラレテ異議ナカリシ事實アルモ特別決議ノ形式ヲ以テ申合契約ヲ決議シタル事實ナシ右申合契約カ原告會社ノ特別決議ニヨリテ決議セラレタル事實ハ之ヲ知ラス

(二) 大正二年十一月三十日作成ノ申合書ハ原告主張ノ如キ義務ヲ發生スヘキ契約ニアラス合併實行ノ義務ヲ負擔スルニハ各會社ニ於テ合併ノ決議ヲ爲シ之ニ依リ合併ヲ爲スヘキ合意即チ所謂合併契約ノ成立スルコトヲ要スルニ拘ハラス原被兩會社間ニハ合併契約ノ成立シタル事實ナシ從テ被告會社ハ原告會社ニ對シテ合併實行ノ義務ヲ負擔スルモノニアラス而シテ右申合書ハ單ニ合併ノ基礎事項ニ關スル大綱竝ニ兩會社ノ競争ヲ避ケ其共同利益ヲ計リ合併ノ基礎ヲ確定スル爲メ準備事項ヲ定メタル申合案タルニ過キスシテ所謂合併契約ニアラス然ルニ原告ハ右ヲ以テ合併豫約ナル債權契約トナスモ合併豫約トハ所謂合併契約ノ内容トナルヘキ條件ヲ協定スル豫備的行爲ヲ云フモノニシテ通常株主總會ノ承認決議ニヨリ直ニ合併契約ノ效力ヲ生セシムルモノナリ然レトモ右申合書ハ右ノ如キ條件ヲ定メタルモノニアラサルコト前述ノ如クナルヲ以テ株主總會ノ承認ニヨリ直ニ合併契約タルノ效力ヲ生スルニ由ナク單ニ將來原告ノ所謂合併豫約トナルヘキ條件ノ協定ヲ爲サンコトヲ申合セタルニ過キサレハ其協定成立シテ始メテ原告ノ所謂合併豫約カ締結セララルモノトス換言スレハ之ヲ合併豫約ノ豫約ナリト謂ハハ或ハ可ナランモ合併豫約其モノナリト謂フハ全ク理由ナシ而シテ所謂合併豫約其モノハ商法カ合併ヲ認メタルヨリ推論シテ會社ノ取締役ニ之ヲ締結スル權限アリト云ヒ得ヘシトスルモ合併豫約ノ契約ヲ締結シ合併豫約ヲ締結スル債務ヲ負擔スル

カ如キハ會社ノ目的ノ範圍ニ屬セサルコト勿論ナレハ若シ右申合カ原告主張ノ如キ性質ヲ有スル契約ナリトスレハ被告會社ヲ羈束スル何等ノ效力ヲ有スルモノニアラス

(三) 被告ハ大正三年一月中右申合書ノ約旨ニ從ヒ三名ノ委員ヲ指定シテ協議ヲ進メタリ原告ハ一旦其指定アリタリトスルモ合併ノ實行延期セラレタルカ故ニ更ニ委員ヲ指定セサルヘカラスト主張スレトモ合併ノ延期ハ其延期前ノ手續ヲ無効ナラシムル理由ナキコト明白ナリ而シテ被告ハ原告主張ノ資産竝ニ損益計算書ヲ未タ提出シ居ラサル事實ハ之ヲ認ムルモ右申合書中第七項記載ノ事項ハ合併ノ實行ヲ期スルカ爲メニハ先ツ之ヲ履行スルコトヲ要スルモノニシテ就中被告會社カ契約成立當時現ニ施行中ノ地下線電燈工事ヲ中止シ同時ニ原告會社ハ其現在經營ニ係ル被告會社地下線施行區域内ノ營業權竝架空線室内設備一切ヲ被告會社ニ讓渡シ又被告會社ハ之ニ對シ福岡市及其附近ニ於ケル地下線ニ依ル電燈營業ニ關スル一切ノ施設ヲ廢スルコトト定メタル約款ハ兩會社カ合併ヲ惹起シタル最も重要ナル原因ナルヲ以テ先ツ本事項ノ解決ヲ必要トスルヲ以テ被告會社ハ直ニ地下線工事ノ中止ヲ爲シタルニ拘ハラヌ原告會社右義務ノ履行ヲ爲ササルモノナリ一方ニ於テ合併後引受クヘキ株數割當ノ點ニ於テ原告側ハ專ラ現在ノ實勢ニ重キヲ置キ被告側ハ現投資ニ對シ近キ將來ニ於テ實現スヘキ利益ヲ打算シ爲メニ各引受數ノ割合ニ關スル主張ヲ異ニシタル爲メ訴外豊川良平ノ調停ニヨリ大正四年十一月三十日迄延期ノ合意ヲ爲シタリ然ルニ其後兩會社共資産ニ大異動ヲ生シ計算愈々複雑トナリ急速ニ整理シ難キニヨリ更ニ大正四年十二月ニ於テ大正五年

十一月迄延期ノ合意ヲ爲シ且特ニ協定書ヲ作成シ其條項ノ一トシテ前述營業權讓渡手續ハ遲滞ナク之ヲ履行スヘキコトヲ確約シタリ然ルニ原告會社ハ右讓渡手續ヲ爲サスシテ今日ニ及ヘルモノナリ右ハ合併ノ基礎ヲ定ムヘキ資産竝ニ損益計算ヲ確定スルニ付キ必要缺クヘカラサル事項ナルカ故ニ此事項ヲ履行セサル限りハ合併ノ實行ヲ期スルカ如キハ不可能ニシテ從テ合併ノ基礎タルヘキ資産竝ニ損益計算書ハ之ヲ原告ニ提出スルヲ得サルモノナリ原告ハ計算書提出ニ關スル事項ト營業權讓渡ニ關スル事項トカ先後ノ關係ニ立ツモノニアラサルコトハ申合書ノ文辭上明白ナリト謂フモ營業權ノ讓渡ハ契約成立後直ニ履行セラルヘキモノナルコト竝ニ計算書ハ此等營業權ノ讓渡ヲ豫期シ讓渡後ノ資産計算ヲ爲スヘキ意思ナルコトハ右申合書ノ全趣旨ヨリ明白ナリ

(四) 原告ノ主張ニヨレハ大正二年十一月三十日附申合書ノ趣旨ハ後日財産狀態ニ變更アリトスルモ尙大正三年四月末日ニ於テ現實シ得ヘキ資産勘定ニ依リ確實ニ一ヶ年一割ニ當ル株主配當金ヲ爲シ得ヘキコトヲ標準トスヘキコトニアリト謂ヘトモ被告會社ハ大正五年三月二十八日豊後電氣鐵道株式會社外一會社ヲ合併シ又原告會社ハ大正五年五月四日長崎電氣瓦斯株式會社外二會社ヲ合併シ資産狀態各當時トハ著シク變化シタルヲ以テ今日ニ於テハ當初ノ趣旨ノ如キ計算ヲ爲スコトハ全然不可能ナリ依テ假ニ原告主張ノ如ク前記申合セテ一種ノ契約ナリトシ是ニ由リ法律上何等カノ義務發生スルモノトスルモ其義務タルヤ今日ニ於テハ履行不能ニヨリ最早消滅ニ歸シタルモノトス依テ本訴ハ此點ヨリスルモ其理由ナキモノナリト云フニアリテ立證トシテ乙第一、二號



證第三號證ノ一、二ヲ提出シ證人串田萬藏ノ證言ヲ利益ニ採用シ甲號各證ノ成立ヲ認メ  
タリ。

【理由】 被告會社取締役ト原告會社取締役トノ間ニ大正二年十一月三十日兩會社合併  
ニ關スル申合ヲ爲シ申合書(甲第一號證)ヲ作成シタル事實ハ當事者間ニ爭ナシ原告ハ右  
申合ハ兩會社ニ合併ノ權義ヲ生スル契約ナリト主張シ、被告ハ右申合ヲ單純ナル申合ニ  
過キスシテ何等合併ノ權義ヲ生スヘキ契約ニアラスト主張スルニ付キ按スルニ甲第一  
號證證人串田萬藏ノ證言並ニ甲第二號乃至第四號證ニ依ルニ右申合ハ原告會社並ニ被  
告會社間ニ互ニ合併ノ權利ヲ生シ義務ヲ負ハシムルノ債權的契約ナリトハ解シ難シ單  
ニ原告會社取締役並ニ被告會社取締役間ニ兩會社ヲシテ合併ノ方向ニ進轉セシムヘキ  
機運ヲ作ルノ申合ヲ爲シタルモノニ過キサルモノト解スヘキモノナリトス。

姑ク右申合カ原告主張ノ如ク原告會社並ニ原告會社間ニ互ニ合併ノ權義ヲ生セシムル  
債權的契約ナリト解スルヲ得ルトスルモ株式會社ノ取締役ハ右ノ如キ合併ノ權義ヲ生  
スルノ債權的契約ヲ締結スルノ代理權ヲ有スルヤ否ヤ未タ鞅ク之ヲ肯定スルヲ得ス凡  
ソ株式會社ノ取締役ハ一般ニ會社代表ノ權限ヲ有スルモノナリト雖モ是レ固ヨリ會社  
ノ營業ノ目的ノ範圍内ノ行爲ニ限ラルモノニシテ合併ノ權義ヲ生セシムル契約ノ如  
キハ會社營業全部ノ處分ヲ目的トシ當然ニ會社ノ解散ヲ來スコトヲ目的トスルモノナ  
ルヲ以テ會社ノ營業ノ目的ノ範圍ニ屬セサルコト明白ナルカ故ニ株式會社ノ取締役ハ  
此ノ如キ契約締結ノ代理權ヲ有スルモノニアラスト解スルチ相當トス從テ右申合契約

ハ當然原被告會社ヲ羈束スルモノニアラストシテ此ニヨリテ原被告兩會社ハ何等合併ノ權  
義ヲ有スルモノニアラスト明白ナリ若シ原被告兩會社ノ特別決議ニヨリテ各共取締  
役ニ合併ノ權義ヲ生セシムル契約締結ノ代理權ヲ授與シタル事實アリトセハ其間ニ締  
結セラレタル契約ハ兩會社ヲ羈束スヘキコト當然ナルモ兩會社カ此ノ如キ代理權ヲ各  
其取締役ニ授與シタル事實ハ毫モ之ヲ認ムルニ足ラサルカ故ニ兩會社ノ取締役カ此ノ  
如キ權義ヲ生スルノ契約ヲ締結シタリトスルモ兩會社ニ原告主張ノ如キ合併ノ權義ヲ  
生セシムルモノニアラスト明白ナリトス甲第六號證ニ依ルニ原告會社第三十五回  
定時株主總會ニ原告會社ノ總株主ノ半數以上ニシテ資本ノ半額以上ニ當ル株主カ出席  
シ本件申合書ヲ承認シタル事實ハ之ヲ認ムルヲ得ヘク甲第五號證ニ依ルニ被告會社第  
六回定時株主總會ニ於テ(總株主ノ半數以上ニシテ資本ノ半額以上ニ當ル株主カ出席シ  
タルコトハ被告ノ認ムルトコロナリ)本件申合書承認ノ件ヲ附議シ取締役ヨリ經過ノ大  
要ヲ説明シ株主ノ承認ヲ得タル事實ハ之ヲ認ムルヲ得ヘシ而シテ右申合カ原告主張ノ  
如キ合併ノ權義ヲ生スル契約ナリト解スルチ得ルモノト假定スルトキハ之ニ對シテ前  
述ノ如キ承認ヲ與ヘタル以上右承認ト右申合契約相合シテ茲ニ右契約ハ有效ニ兩會社  
ヲ羈束スルノ效力ヲ生スルニアラスト疑ナキニアラストモ本件申合ニシテ前段說  
明シタルカ如ク代理權限ヲ有セサル取締役カ締結シタル權限外ノ契約ナリトセハ是レ  
無權代理人ノ爲シタル契約ニ外ナラサルカ故ニ兩會社ノ追認ナキ限り其效力ヲ生スヘ  
キモノニアラスト而シテ追認ハ相手方ニ對スル意思表示ニ依リテ之ヲ爲スチ本則トスル

モノナルカ故ニ假ニ兩會社ノ株主總會カ特別決議ノ形式ヲ以テ之カ承認ヲ爲シタリト  
 スルモ是レ會社内部ノ關係ニ過キスシテ或ハ之ニヨリテ取締役ニ對シ合併契約締結ノ  
 代理權ヲ授與スルノ效果ヲ生スルコトアルヘシト雖モ決議自體ニヨリテハ何等追認ノ  
 效果ヲ生スヘキ限ニアラス而シテ其代理權ニ基キ兩會社ノ取締役カ爾後合併ノ權義ヲ  
 生セシムヘキ契約ヲ締結シタル事實ハ原告ノ主張セサルトコロナリトス或ハ之ニヨリ  
 テ取締役ニ追認ヲ爲スヘキ代理權ヲ授與スルノ效果ヲ生スルコトアルヘシト雖モ決議  
 自體ハ前述ノ如ク會社内部ノ關係ニ過キサルカ故ニ之カ爲メ何等追認ノ效果ヲ生スヘ  
 キ限ニアラス而シテ其代理權ニ基キ兩會社ノ取締役カ追認ヲ爲シタリトノ事實モ亦原  
 告ノ主張セサルトコロニシテ何等之ヲ認ムルニ足ラス加之前掲兩會社ノ定時株主總會  
 ニ於ケル所謂承認ナルモノカ此ノ如キ代理權ヲ授與スルノ意思表示ヲ包含シタルモノ  
 ナリトハ前掲證據ニヨリテハ到底之ヲ認ムルニ足ラサルノミナラス寧ろ單純ナル事實  
 ノ承認ニ過キサルモノト認ムルノ外ナキモノナリトス或ハ兩會社ノ取締役カ兩會社ノ  
 特別決議ニ依ル承認ヲ條件トシテ合併ノ權義ヲ生スヘキ契約ヲ締結シタル事實アリト  
 セハ其承認ノ意義如何ニヨリテハ其承認ノアリタルト共ニ契約ハ其效力ヲ生スルコト  
 アルヘシト雖モ本件申合カ姑ク法律上ノ效果ノ發生ヲ意欲シテ締結セラレタル契約ナ  
 リト假定スルモノ兩會社ノ特別決議ニ依ル承認ヲ條件トシテ合併ノ權義ヲ生セシムヘキ  
 趣旨ノ下ニ締結セラレタルモノナル事實ハ原告ノ擧ケタル證據方法ニヨリテハ毫モ之  
 ヲ認ムルニ足ラス却テ單純ナル無條件ノ申合ニ過キサルモノト認ムルノ外ナキヲ以テ

株主總會ノ承認ノ意義如何ニ論ナク其承認ト共ニ兩會社ニ合併ノ權義ヲ生シシムヘキ  
 限リニアラス

上來説明シタルカ如ク被告會社ニシテ原告會社ニ對シ原告主張ノ如キ合併ノ義務ヲ負  
 擔スルモノニアラスト爲ス限リ此ノ如キ義務ノ存在ヲ前提トスル原告ノ本件請求ハ全  
 部其理由ナキコト明白ナルヲ以テ之ヲ棄却スヘキモノトシ民事訴訟法第七十二條第一  
 項第二百三十一條第二項ニ則リ主文ノ如ク判決シタリ

### 第二章 合名會社社員除名通知無効確認の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、確定の訴。
- 2 當事者 原告は除名通知を受けたる社員、被告は會社。
- 3 管轄 土地の管轄は民訴總則の規定に依る、事物の管轄に付て裁構法二六條一號參照。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金百圓(民訴印紙法三條一項)
- 6 貼用印紙 金三圓五十錢(同法二條)
- 7 本訴請求原因に付ては商法七〇條二號六〇條一項參照。

大正四年(ワ)第六六〇號社員除名通知無效確認請求事件 (大阪地方裁判所第三民事部大正六年十月十九日判決)

原告 被告

松岡三之助

合名會社浦江鐵工所

右法律上代理人代表社員

岸本蘭次郎

【全文】原告ノ請求ハ之ヲ棄却ス。

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス。

【理由】原告訴訟代理人ハ一定ノ申立トシテ被告會社ハ原告ニ對シ大正四年九月二十八日附ニテ爲シタル被告會社ノ社員タルコトヲ除名ストノ決議ノ無效ヲ確認ス訴訟費用ハ被告ノ負擔トストノ趣旨ノ判決ヲ求ムト言ヒ其請求原因トシテ陳述シタル事實ノ要旨ハ被告會社ハ明治四十四年十月十八日瓦斯石油發動機精米機卷煙草機其他諸機械類ノ製造販賣ヲ目的トシテ設立シ該登記ヲ經同年十一月十四日會社ノ目的ヲ瓦斯石油發動機精米機其他諸機械販賣ト改メ之カ變更登記ヲ經由シタリ而シテ會社設立當時ノ社員ハ山内代吉和田春吉松岡三之助及玉津島壽親ノ四名ナリシカ和田春吉ハ明治四十五年一月二十二日退社シタリ爾後原告ハ被告會社ノ爲メニ誠意ヲ以テ盡力シ來リシカ其當時ノ被告會社代表者山内代吉及社員玉津島壽親等ハ相結托シ原告ヲ疎外シ原告ノ文盲ナルニ乘シ專横ノ行ヲ爲シ常ニ會社ノ不利ヲ計リ一面原告ヲ排斥センコトヲ計劃

シ終ニ大正四年九月二十八日第一原告カ被告會社ノ營業タル鐵工業ト同種ノ營業ニ屬スル商行爲ヲ福山鐵工所等ニ於テ爲シタリトシ第二原告カ被告會社ヲ代表シテ會社ノ營業ニ屬スル注文ヲ受ケナカラ志ニ原告ノ關係セル福山鐵工所ニテ注文ノ工事ヲ爲シ自己ノ計算ニ於テ取引ヲ完了シタルノミナラス第三被告會社ハ解散整理中ニシテ其營業ヲ閉鎖セリト虛偽ノ事實ヲ文書ニ印刷シテ會社ノ顧客ニ發表シ因テ會社ノ業務ヲ妨害シテ自己ノ利益ヲ圖リ社員トシテ重要ナル義務ヲ盡ササル者ナリトシテ他ノ社員全部ニテ除名ノ決議ヲ爲シ大正四年九月二十八日附ニテ其通知ヲ爲シ來レリ然レトモ大正三年一月中旬既ニ被告會社代表社員山内代吉ハ病氣ノ故ヲ以テ出資額ノ支拂ヲ受ケ退社ノ希望ヲ有シ社員玉津島壽親モ山内代吉ト同様ノ希望ヲ有シ原告ニ其相談アリタルニ原告ハ之ヲ承諾シタルモ右出資額ノ拂戻ニ付テハ會社財産ヲ擔保トシ今暫ク猶豫アラントトヲ求メタルニ之ニ從ハサルヲ以テ訴外石川篤三郎ヨリ調金ノ承諾ヲ得山内及玉津島兩名ニ其希望ヲ充サンコトヲ回答シタルニ何故カ意外ニモ前言ヲ食ミテ退社セサルニ至リシコトアリ次テ大正四年三月初メ山内及玉津島ノ兩名ハ被告會社ノ事業ヲ中止シ工場ヲ閉鎖センコトヲ協議シ職工ヲモ解雇シタリ然レトモ原告ハ他迄事業ノ繼續ヲ主張シ工場閉鎖ニ反對シタルニ前記兩名ハ原告ニ對シ原告自ラ事業ノ經營ヲ爲スヘシ要スル所ノ諸機械ハ相當代價ニテ讓渡スヘシトテ玉津島ノ作成ニ係ル值段書甲第二號證ヲ原告ニ交付シタリ故ニ原告カ獨立シテ會社ノ目的タル營業ニ同様ナル事業ニ從事シタル事實アリトスルモ何レモ被告會社代表者ノ承諾ノ下ニ爲シタルニ過キス

現ニ兩名ハ會社財産中ノ原料品ノ一部ヲ原告ニ賣渡シ鑄物ノ型ヲ原告ニ貸與セル事實アリ又被告會社ハ機械ノ一部ヲ原告ニ賣渡シタル事實アルニ依リテ見ルモ被告カ原告ノ行為ヲ認容セルコト明カナリトス元來被告會社ノ營業目的タル石油發動機ノ製造ハ和田春吉ト原告トノ新案登録ニ成レルモノニ基キ被告會社カ製造シ來リシモノニシテ是等ノ關係アリシヲ以テ山内ハ其後更ニ大正四年三月十日頃自己ノ出資ヲ讓渡スヘキコトヲ申出テ又大正四年八月頃山内及玉津島兩名ハ原告ニ對シ右兩者ノ出資ヲ其五分五厘ノ對價ニテ原告ニ於テ讓受クルカ又ハ原告ノ出資ヲ其六分ノ對價ニテ右兩名ニ讓渡スルカノ申込ヲ爲シタルコトアリ是等ノ談合ハ何レモ不調ニ終リ從テ法律上解散シタルコトナシト雖モ兎ニ角被告會社カ解散ノ手續ニ出テント欲シタルコト明カナリトスサレハ原告カ被告會社ハ解散シ營業ヲ閉鎖セリトノ文書ヲ顧客ニ通知シタル事實アルモ是レ固ヨリ被告會社ノ異存ナキ所ナリトス依テ被告會社ノ除名ノ決議ハ無効ナルニ付キ本訴ニ及ヒタリト言フニ在リテ立證トシテ甲第一號證乃至第三號證第四號證ノ一、二第五號證並ニ第六號證ヲ提出シ證人福山武三尾形繁造及岡崎芝之助ノ證言ヲ援用シ乙號各證ノ成立ヲ認メタリ。

被告訴訟代理人ハ主文第一項記載ト同趣旨ノ判決ヲ求ムト申立テ其答辯ノ要旨ハ被告會社ノ設立其目的社員ノ數及是等ニ變更ヲ生シタル事實並ニ除名ノ決議ノ事實ニ關スル原告ノ陳述ハ之ヲ認ム原告ハ其主張ノ如ク被告會社ノ社員ナルニ拘ハラス第一自己ノ營業トシテ大正四年五月六日頃河野製作所ヨリボンスト稱スル壓搾機並ニ石粉機ヲ

スル機械一臺ノ注文ヲ受ケ之ヲ製造スル爲メ壓搾機ヲ高木繁太郎方ニ石粉機ヲ駒井鐵工所ニ鑄造セシメタル事實アリ又同年七月頃何人カノ注文ヲ受ケ佐山鐵工所ニ發動機ノ鑄造ヲ委託シ同月十四日及十六日ノ兩度ニ横山鐵工所ニ其仕上ヲ委託シタル事實アリ其後屢々和田春吉等ニ發動機其他機械ノ製造ヲ委託シ自己ノ計算ニ於テ今尙ホ營業ヲ爲シツツアリ第二大正四年三月頃平川喜作カ被告會社ニ對シ三馬力半ノ發動機一臺及精米機一臺其他附屬品一切ヲ金三百五十圓ニテ注文シタルニ拘ハラス原告ハ之ヲ自己カ旅行先ニテ特ニ委託セラレタルモノナリト詐稱シ自己ノ計算ニ於テ取引ヲ完了シ以テ會社ノ利益ヲ阻害シタル事實アリ第三被告會社ハ歐洲戰亂ノ餘波ヲ受ケ一時營業不振ノ状態ニ陥リシヲ以テ職人ヲ解雇シタルコトアルモ尙營業ヲ繼續シ居リテ毫モ解散ノ事由ナキニ拘ハラス原告ハ大正四年四月十一日被告會社ノ各得意先ニ對シ被告ハ解散シテ目下工場整理中ニ付キ自己カ福山鐵工場ヲ假工場トシテ營業ヲナスヘケレハ注文アリ度シトノ案内狀(乙第一號證ノ三)ヲ郵送シ以テ會社ノ營業ヲ妨害シタリ是等ノ事實ハ商法ニ所謂除名ノ事由トナルカ故ニ會社ハ其當時ニ於ケル他ノ總社員即チ山内代吉(代表社員)玉津島壽親(社員)ノ一致ニ依リ大正四年九月二十八日原告ヲ除名スル決議ヲ爲シ同日之ヲ原告ニ通知シタリ而シテ被告會社ハ會社財産ノ清算ヲ遂ケ原告ノ持分一千二百六十七圓十二錢ヲ拂渡サントスルモ原告ハ之カ受領ヲ拒ミタルヲ以テ大正四年十月七日大阪本金庫ニ供託シテ其供託證書ヲ原告ニ送付シ被告會社ハ茲ニ其義務ヲ完了シタルモノナリ被告會社ハ原告ニ機械ノ一部ヲ賣渡シタルコトアルモ是レ原告ニ

欺カレタルニヨルモノナリ又石油發動機ハ原告及和田春吉ノ新案登録セシモノニ基キ製作セシモ之ノミカ被告ノ目的タル營業ニ非ス是等ノ事實アリト雖モ原告ノ競業行爲竝ニ營業妨害行爲ニ對シ承諾シタルコトナキヲ以テ原告ノ請求ハ失當タルヲ免カレス又被告會社ハ原告主張ノ如キ社員間ノ持分讓渡ノ交渉事實ハ之ヲ知ラスト云フニ在リテ立證トシテ乙第一號證ノ一乃至三、第二號證乃至第五號證ヲ提出シ證人平川喜作小崎磯三郎長谷川萬之助高木繁太郎駒井徳三郎及森田梅吉ノ證言ヲ援用シ甲第一號證第五號證及第六號證ノ成立ヲ認メ同第二號證及第四號證ヲ否認シ同第三號證ハ不知ト答ヘタリ。

【理由】 本件ニ於テ被告會社ハ明治四十四年十一月十四日以來瓦斯石油發動機精米機其他諸機械ノ製造販賣ヲ營業ノ目的ト爲セル事被告會社カ解散セサル事被告會社ハ大正四年九月二十八日原告ニ商法第七十條第二號及第五號所定ノ違反行爲アリトシテ原告以外ノ總社員ノ一致ヲ以テ原告除名ノ決議ヲ爲シ同日之ヲ原告ニ通知シタル事及其決議當時ニ在リテハ被告會社ハ代表社員山内代吉社員原告及玉津島壽觀ノ三名ヨリ組織セラレタル事ハ當事者間ニ爭ナキ處ナリトス。

先ツ原告ニ競爭業禁止違反ノ行爲アリシヤ否ヤノ點ヲ案スルニ證人平川喜作ノ證言ニ依レハ平川喜作ハ被告會社ニ對シ大正四年三月頃石油發動機竝ニ精米機ノ製作ノ注文ヲ爲シテ之ヲ買取リタルモ是等契約ノ締結ニ際シテハ專ラ原告ト對談シ其代金ノ受領書ハ原告一個人ノ名義ナリシ事及原告ハ當時被告會社ハ休業シ居リテ注文品ナキ旨ヲ

答ヘタル事何レモ明瞭ナリ又證人駒井徳三郎長谷川萬之助ノ各證言ニ依レハ原告ハ被告會社使用ノ機械ノ型ニ準據シタル機械ノ製作ヲ大正四年五月頃駒井徳三郎ニ同年七月及八月頃ノ兩度長谷川萬之助ニ各注文シタル事ヲ認メ得ヘク是等ノ製作販賣ハ被告會社目的タル營業ノ部類ニ屬スルコト勿論ナリトス然リ而シテ成立ニ爭ナキ乙第一號證ノ三竝ニ前記證人長谷川ノ證言ニ依レハ原告ハ前記認定ノ各注文アリタル當時被告會社ト同一ノ營業ヲ爲サントスル意思アリタルコト明カナルヲ以テ是等ノ事實ニヨレハ反證ナキ限リ前記原告ノ製作セシメタルモノ又ハ販賣シタルモノハ何レモ原告一個入ノ營業トシテ原告自ラ爲シタルモノナルコトヲ推知スルニ難カラス然ラハ原告ハ被告會社ノ營業ノ部類ニ屬スル商行爲ヲ爲シタルコト洵ニ論ナシ然レトモ原告ハ右ノ競爭業行爲ハ被告會社ノ承諾ニ出テタルモノナリト主張スルヲ以テ案スルニ證人福山武三尾形繁三及岡野芳之助ノ各證言ニ徵スレハ原告主張ノ如ク被告會社ハ大正四年三月頃ヨリ同年十月頃迄休業ノ状態ニ在リ又其當時社員山内代吉及玉津島壽觀等ハ自己ノ持分ヲ原告或ハ其他ノ者ニ賣却センコトヲ希望セシコトヲ認メ得ヘク且被告會社ハ其機械一部ヲ原告ニ賣却シタルコト竝ニ會社ハ原告及和田春吉ノ新案登録セシ考案ニ基キ石油發動機ノ製作ヲ爲シ居リタルコトハ被告ノ自認スル處ナリト雖モ是等ノ事實アレハトテ直チニ以テ被告會社カ原告ノ競爭業行爲ヲ承諾シタルモノト認ムヘキ資料タラサルノミナラス前記證人駒井徳三郎及長谷川萬之助ノ各證言ニヨレハ同人等カ原告ノ言ニ從ヒ被告會社ニ存在スル機械ノ型ヲ取りニ行キタル際會社ノ社員ヨリ之ヲ拒絕

セラレ之ニ付キ紛擾ヲ生シタル事實ヲ認メ得ヘク又證人森田梅吉ノ證言ニ依レハ山内及玉津島兩名ノ社員ニ於テ却テ原告ノ持分ヲ買取ラントノ希望ヲ有シタル事ヲ認メ得ヘキニ依リテ推考スレハ假令被告會社ハ休業中ナリト雖モ其營業行為ニ付キ原告ノ自由ニ放任シテ意トセサリシモノト解スルヘカラサルヘシ從テ被告會社カ原告ノ競争業行為ヲ承認シ認容シタルモノト判定スルヲ得ス尤モ證人長谷川萬之助ノ證言ニ依レハ同人カ前記説明ノ如ク被告會社ニ型ヲ取りニ行キタル際其事務員井上某カ之ヲ手傳ヒタル事ヲ認メ得ヘク又證人平川喜作ノ證言ニ依レハ同人カ會社ニ注文ニ行キタル際原告及會社事務員井上某列座ニテ獎勵ヲ受ケタルコトヲ認メ得ヘキニ依リ恰モ被告會社カ原告ノ前記行為ヲ承諾ノ結果事務員井上チシテ之ニ參加セシメタルカ如シト雖モ井上ハ右各證言ニ依リ明カナルカ如ク一個ノ事務員ニ過キサルモノナレハ社員タル原告ノ命ニ依リ其手足トナリテ行動シタルモノト認ムルヲ相當トスヘケレハ是等ノ事實並ニ其他ノ原告ノ立證ニ依リテハ前記認定ヲ覆スニ足ラス唯被告會社内部ノ狀態ハ上來説明シタルカ如キ關係ナリシヲ以テ原告ハ自己カ會社ノ營業ヲ讓受ケ得ヘシト即斷シタル末深慮チ用キス會社ノ營業ト同種ノ行為ヲ敢テスルニ至リシモノト認メ得サルニ非ス然ラハ必スシモ原告ハ會社ノ營業ヲ妨害セントノ故意ヲ以テ前記認定ノ行為ヲ爲シタルモノト論斷スルヲ得スト雖モ是レ少クトモ原告ノ過失ニ出テタル輕率ト認定セサルヲ得サルカ故ニ其行為ニ付キ責任ヲ免カルヘカラサルヤ勿論ナリト然レトモ前記説明ニヨリテ明カナルカ如ク原告ノ右行為ハ被告會社ノ休業中ニ爲サレタルモノ

ナルヲ以テ斯ル場合ニ在リテモ尙ホ競争業行為トシテ商法ノ禁スル所ナリヤ否ヤハ解釋上疑問ナキ能ハス抑モ會社ハ一時營業ヲ休止スト雖モ亦何時ニテモ之ヲ開始シ得ヘキ地位ニアルモノナレハ會社カ解散ヲ爲ササル限りハ休業中ナル場合ニ於テモ尙ホ社員ニ對シ商法第六十條第一項ノ適用アルモノト論斷セサルヲ得ス從テ前記ノ場合ニ於テモ原告ノ行為ハ之ヲ競争業禁止違反ノ行為ト認メサルヲ得ス又原告ハ其自認スルカ如ク被告會社ハ解散セサルニ拘ハラス乙第一號證ノ一乃至三ニ依リ明カナル如ク大正四年四月十一日被告會社ハ解散シタルヲ以テ自己ニ會社同様ノ機械ノ製作ヲ注文サレタシトノ通知ヲ顧客ニ對シ發シタリ斯ノ如キハ社員タル重要ノ義務ニ違背シタルモノト謂ハサルヘカラス原告ハ右通知モ亦被告ノ承諾ニ出テタルモノナリト主張スレトモ前記説明シタル所チ參酌スレハ原告ノ證據ハ右主張ヲ確認スルニ足ラス然ラハ被告會社ノ爲シタル本件除名ノ決議ハ相當ニシテ原告ノ本訴請求ハ排斥ヲ免カレス仍テ民事訴訟法第二百三十一條第二項第七十二條第一項ニ從ヒ訴訟費用ノ負擔ヲ定メ注文ノ如ク判決ス

### 第三章 合資會社解散請求の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、創設の訴。
- 2 當事者 原告は本件合資會社の無限責任社員、被告は社員。

判例 商法第八十三條ニ依ル會社解散ノ請求ハ會社ニ對シテ爲スヘキモノニシテ個人タル社員ヲ相手取ルヘキモノニ非ス(大審三七年五一三頁)

- 3 管轄 土地の管轄は民訴總則の規定に依り事物の管轄は裁構法二六條一號。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金百圓(民訴印紙法三條一項)
- 6 貼用印紙 金三圓五十錢(同法二條)
- 7 商法八三條非訟事件手續法一三五條ノ二參照。
- 8 本件に付被告會社の法律上代理人として特別代理人を選任したる根據は恐らく商法一〇五條八三條一條民法五七條であらう。

大正十年カ第一五四號合資會社解散命令請求事件 (東京地方裁判所第二民事部大正十年八月十日判決)

原告

寺 井 康 正

右法律上代理人親權者

寺 井 源 吾

被告

合資會社美濃鈴商店

右法律上代理人特別代理人

松 原 靜 吾

【全文】 合資會社美濃鈴商店ヲ解散ス。

訴訟費用ハ被告ノ負擔トス。

【理由】 原告訴訟代理人ハ主文第一項同旨ノ判決ヲ求ムル旨申立テ其請求ノ原因トシテ被告會社ハ大正八年九月二十日設立セラレ帽子類ノ製造販賣及之ニ關聯スル一切ノ業務ヲ目的トスル合資會社ニシテ原告ヲ無限責任社員原告ノ父寺井源吾及伯父寺井義雄ヲ有限責任社員トスルモノナリ然ルニ原告ハ未タ十年ニ滿タサル未成年者ニシテ被告會社ノ業務ハ専ラ親權者タル右寺井源吾ニ於テ之ヲ掌握シ居ルモノナルモ同人ハ地方ニ銀行ノ經營ヲモ爲シ居ルカ爲メ被告會社ノ常務ハ多ク店員ニ委セアリシ結果自然監督モ行キ届カス從テ營業モ不振ニ陥リ缺損ヲ生スルニ至リシノミナラス被告會社ハ前示ノ如ク親族ノミヲ以テ成立シタルモノニシテ最モ親密ニ一致共同シテ經營セサルヘカラサル筋合ナルニ拘ハラズ近時寺井源吾ト寺井義雄トノ間ニ感情ノ衝突ヲ惹起シタルコトアリテ之カ爲メ被告會社ノ經營ニ付テモ事毎ニ意見ノ一致ヲ缺キ所詮共同經營ヲ爲スコト能ハサル事態ニ立チ至レリ依テ原告ハ之カ解散ヲ決議センカ爲メ有限責任社員寺井義雄ニ對シ同意ヲ求メタルモ直ニ不同意ヲ表セラレ遂ニ總社員ノ同意ヲ得ルコト能ハサルモノニシテ止ムコトヲ得サル事由アルモノト思料スルニ依リ被告會社解散ノ判決ヲ求ムル爲メ本訴ニ及ヒタリト述ヘ立證トシテ甲第一號乃至第三號證ヲ提出シ證人町山東作熊谷源七ノ證言ヲ援用シタリ。

被告特別代理人ハ原告請求棄却ノ判決ヲ求メ答辯トシテ被告會社ヲ解散スルノ必要アリトノ點ヲ除キ其他原告ノ主張事實全部ヲ認メ甲號證ノ成立ヲ定メタリ。

【理由】原告主張ノ被告會社ノ目的組織社員相互ノ關係其義務執行ノ狀態ニ付テハ被告ノ爭ハサルトコロニシテ證人熊谷源七ノ證言ニ依レハ原告ノ父有限責任社員寺井源吾ト有限責任社員寺井義雄トハ兄弟ナルニ拘ハラヌ感情ノ衝突アリテ其間兎角圓滿ヲ缺キ被告會社ノ經營ニ付テモ亦事毎ニ意思ノ疏通ヲ缺キ寺井義雄ハ從前被告會社ノ社員タリシ鈴木忠雄ト相謀リ同人ノ名ヲ以テ被告會社ノ經營ハ同人ニ於テ經營スヘキ旨各得意先ニ通知シタル上現時ハ被告會社ノ店舗ニ占居シテ其業ヲ營ミ居リ之カ爲メ被告會社ハ營業ヲ廢スルノ止ムナキニ至リ而シテ寺井源吾同義雄間ノ斯クノ如キ紛争ニ付テハ屢々之カ調停ヲ試ムル者アリタルモ未タ到底其調和ヲ得難ク從テ同人等カ共同シテ被告會社ヲ經營スルコトハ甚タ困難ナル狀態ニ在ルコトヲ認メ得ヘシ而シテ原告ハ寺井義雄ニ對シ被告會社解散ノ決議ヲ爲ス爲メ同人ノ同意ヲ求メタルモ同人ハ之ヲ拒ミタルコトハ被告ノ認ムルコトコロナレハ總社員ノ同意ニ因リ會社ヲ解散スルノ途ナキコト明カナリ然ラハ原告ノ本訴請求ハ憲ニ商法第八十三條ニ所謂止ムコトヲ得サル事由アルモノニ該當スルモノト謂フヘキヲ以テ之ヲ正當ト認メ訴訟費用ニ付キ民事訴訟法第七十二條第一項第二百三十一條第二項ノ規定ニ依リ主文ノ如ク判決シタリ。

### 第四章

株式會社の甲發起人が乙發起人に代りて其未拂込株金を拂込みたるに因る求償金請求の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、給付の訴。
- 2 當事者 原告は本件株式會社の發起人の一人(甲)にして發起人(乙)の引受けたる株式に對する株金を拂込みたる者、被告は右乙發起人。
- 3 管轄 民訴總則の規定に従ふ。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金三千九百圓(民訴二二二條一項)
- 6 貼用印紙 金三十圓(民訴印紙法二條)
- 7 商法一三六條民法五〇〇條五〇一條參照。
- 8 尙假執行宣言に付民訴一九六條。

大正七年(ワ)第一三三四號求償金請求事件 (東京地方裁判所第九民事部大正十年十月二十二日判決)

原告

今

野

晋

三

### 第四章

株式會社の甲發起人が乙發起人に代りて其未拂込株金を拂込みたるに因る求償金請求の訴



【六一】 被告ハ原告ニ對シ金參千九百圓及之ニ對スル大正十年三月二十日ヨリ本件判決執行濟ニ至ル迄金百圓ニ付キ日歩四錢ノ割合ニ依ル金額ヲ支拂フヘシ。

訴訟費用ハ被告ノ負擔トス。

本判決ハ原告ニ於テ執行前保證トシテ金壹千參百圓又ハ之ニ相當スル有價證券ヲ供託スルトキハ假ニ執行スルコトヲ得。

【理由】 原告訴訟代理人ハ主文第一、二項表示ノ如キ判決並ニ保證ヲ條件トスル假執行ノ宣言ヲ求ムル旨申立テ其請求ノ原因トシテ主張シタル事實ノ要旨ハ被告ハ訴外東京市芝區南佐久間町二丁目十八番地大正不動產株式會社ノ發起人ニシテ同會社株式一株金額十圓全額拂込二百株ヲ引受ケ其定款ニ記名捺印シタルニ拘ハラス右引受株式ニ對シ證據金トシテ金百圓ヲ拂込ミタルノミニテ其餘ノ株金參千九百圓ノ支拂ヲ爲ササルヲ以テ同シク右會社ノ發起人タル原告ハ大正十年三月十九日同會社ノ創立總會ニ當リ商法第三百三十六條ノ規定ニ依リ被告ニ代リ其未拂込株金參千九百圓ヲ拂込ミテ同創立總會ヲ終了セシメ茲ニ右會社ハ成立シタリ依テ原告ハ被告ニ對シ右代位辨濟シテ拂込ミタル金參千九百圓及之ニ對スル拂込ノ翌日タル大正十年三月二十日以降完済ニ至ル迄右會社ノ定款ニ規定スル金百圓ニ付キ日歩四錢ノ割合ニ依ル損害金ノ支拂ヲ求ムル爲メ本訴ニ及ヒタリト謂フニ在リテ被告ノ答辯ニ對シ大正不動產株式會社定款ノ第十三條ニ被告主張ノ如ク其前段ニ所持ト云ヒ後段ニ所有ト在リテ其用語ヲ異ニスト雖モ

右ハ結局商法第二百十條第五號ニ謂フ有スルノ意ト同一ナリト解スヘク又取締役ノ資格要件タル株式數ト供託株式數トハ必スシモ一致スルヲ要スルモノニ非サレハ取締役ノ資格要件タル株式數ト一致セサル其供託株式數ヲ定メタル本件定款ノ無効ニ非サルハ論ヲ俟タスト述ヘ立證トシテ甲第一乃至四號證ヲ提出シ證人久田博人ノ喚問ヲ求メタリ。

被告訴訟代理人ハ原告ノ請求ヲ棄却ストノ判決ヲ求ムル旨申立テ其答辯トシテ原告主張事實全部ヲ否認シ假ニ被告カ大正不動產株式會社ノ發起人ニシテ其定款ニ署名捺印シタル事實アリトスルモ原告カ右會社ノ定款ナリト主張スル甲第一號證ノ記載ニ依レハ其第十三條ノ前段ニハ「取締役ハ本會社株式百株以上監査役ハ參拾株以上ヲ所持スル株主中ヨリ之ヲ選任ス」トアルヲ以テ取締役ノ資格要件トシテハ自己所有タル他人所有タルトヲ問ハス單ニ同會社ノ株式百株以上ヲ所持スルヲ以テ足り其所有株式數ノ如何ヲ問ハサルコトトナリテ商法第二百十條第五號ノ絕對的記載事項ノ一ヲ缺ク定款トナリ無効タルヘク假ニ同條後段ニハ「取締役ハ其所有株式五拾株ヲ監査役ニ供託スヘシトアルヲ以テ前段ハ取締役ノ所有スヘキ株式數ヲ規定シタルモノナリトスルモ取締役ノ資格要件タル所有株式數ト其監査役ニ供託スヘキ株式數トハ一致セサルヘカラサルニ同條ニ依レハ資格要件タル株式數ハ百株以上供託株式數ハ五拾株トアルカ故ニ商法第二百六十八條ニ反スル事項ヲ規定シタルモノナレハ何レノ點ヨリ謂フモ無効ノ定款ト謂フヘク斯ル無効ノ定款ニ發起人トシテ記名捺印シタルハトテ引受株式ニ對スル株金

第四章 株式會社の甲發起人が乙發起人に代りて其未拂込株金を拂込  
みたるに因る求償金請求の訴

拂込義務發生セサルニ因リ原告ノ請求ニ應シ難シト述ヘ甲第一號證中被告ノ名下ノ印影ノ成立ヲ認メ其餘ノ部分及同第二、三號證ハ不知ヲ以テ答ヘ同第四號證ノ成立ヲ認メタリ。

【理由】按スルニ證人久田博人ノ證言並ニ同證人ノ證言ニ依リ真正ニ成立シタリト認ムル甲第一、三號證ヲ綜合スレハ被告カ訴外大正不動產株式會社ノ發起人ニシテ同會社株式(但一株金額貳拾圓ニシテ全額拂込)二百株ヲ引受ケ同會社ノ定款ニ記名捺印シタル事實被告ハ其引受ケタル株式二百株ニ對シ證據金トシテ金百圓ヲ拂込ミタルノミナル事實並ニ原告カ同會社ノ發起人ノ一人ニシテ大正十年三月十九日被告ノ爲メ其未拂込株金參千九百圓ヲ同會社ニ拂込ミタル事實ヲ認ムルニ足レリ而シテ被告ハ右會社ノ定款第十三條ニ取締役ハ本會社株式百株以上監査役ハ參拾株以上ヲ所持スル株主中ヨリ之ヲ選任ス取締役ハ其所有株式五拾株ヲ監査役ニ供託スヘシナル文言アリテ右所持ナル語ハ商法第二百二十條第五號ニ謂フ「有スル」ノ意ニ非サルカ故ニ右定款ハ絶對的記載事項ノ一タル取締役ノ有スル株式ノ數ヲ記載セサル無効ノモノナル旨抗爭シ右定款ニ所持ナル文言ノ使用セラレアルコトニ付テハ原告ノ認ムル處ナルモ會社ノ定款ニ取締役ノ資格要件タル株式數ヲ定メテ記載スルニ當リ所持或ハ所有ナル語ヲ用フルモ結局商法第二百二十條第五號ニ所謂「取締役カ有スヘキ株式ノ數」ヲ記載シタルト同一義ナリト解スルヲ妥當トスルノミナラス殊ニ本件定款ニ於テハ其第十三條中ニ所持ナル語ト所有ナル語トヲ併用スルコトヨリ觀ルモ該條項ニ於テハ明カニ取締役ノ有スヘキ株式ノ數

ヲ規定シタルモノト觀サルヘカラサルカ故ニ右抗辯ハ理由ナシ次ニ被告ハ取締役ノ資格要件タル株式數ト取締役カ監査役ニ供託スヘキ株式數トハ一致セサルヘカラサルニ拘ハラス右定款ハ資格要件タル株式數ハ百株以上供託株式數ハ五拾株ト規定シアルカ故ニ該定款ハ無効ナル旨主張スレトモ元來取締役ヲシテ一定ノ員數ノ株式ヲ監査役ニ供託セシムルハ取締役ノ有スル株式ノ融通ヲ禁止シ其資格ノ繼續ヲ保證セシムル目的ニ出テタルモノニシテ理論上供託株式數カ資格要件株式數ト一致スルコトハ最モ其目的ニ適フヘシト雖モ實際ノ事情ニヨリ少數ノ株式ヲ供託セシムルモ保障トシテ充分ナリトシタル場合ニ於テハ之ヨリ少數ナル株式ヲ供託スヘキコトヲ定款ニ掲クルモ其定款ヲ無効トスヘキモノニ非サルハ商法カ之ヲ定款ノ必要的記載事項トセサルコトヨリ觀ルモ同法第六十八條ノ文言ヨリ觀ルモ明カナリト謂フヘク從テ右被告ノ主張モ亦採用セス而シテ原告ハ被告ノ爲メ前示拂込ヲ爲シタル結果自己カ會社ニ對シテ負ヒタル被告ノ未拂込金支拂ノ債務ヲ免レタルモノナルカ故ニ右辨濟ヲ爲スニ付キ正當ノ利益ヲ有シタルモノニシテ民法第五百條第五百一條ニ依リ法律上當然債權者タル右會社ニ代位シ被告ニ對スル求償權ノ範圍内ニ於テ右會社カ被告ニ對シテ有シタル株金拂込遲滯ニヨル損害金請求ノ債權ヲ取得シタルモノトス而シテ右損害ハ前示甲第一號證ニ依レハ同會社定款ニ於テ拂込金額ニ對シテ金百圓ニ付日歩四錢ノ割合ノ金額ト規定セラレタルコトヲ認メ得ルヲ以テ原告カ被告ニ對シ前記代位辨濟シタル被告ノ未拂込株金參千九百圓及之ニ對スル辨濟ノ翌日大正十年三月二十日以降完済ニ至ル迄右

第四章 株式會社の甲發起人が乙發起人に代りて其未拂込株金を拂込  
みたるに因る求償金請求の訴

會社定款ニ定ムル金百圓ニ付キ日歩四錢ノ割合ニ依ル損害金ノ支拂ヲ求ムル本訴請求ヲ正當ナリト認メ訴訟費用ニ付キ民事訴訟法第七十二條第一項ヲ假執行ノ宣言ニ付キ同法第五百三條第一項ヲ適用シ主文ノ如ク判決シタリ。

### 第五章 株式會社設立無効請求の訴

其一 大正九年第二六一九號株式會社設立無効請求事件(東京地方裁判所第二民事部大正十年五月七日判決)

- 1 訴の性質 通常訴訟、創設の訴。
- 2 當事者 原告は本件株式會社の株主、被告は會社。
- 3 管轄 商法二二三二條二項九九條ノ三の一項に従ひ本店の所在地の地方裁判所の管轄に屬する
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金百圓(民訴印紙法三條一項)
- 6 貼用印紙 金三圓五十錢(同法二條)
- 7 商法二二三二條參照。

原告 原告

平沼彌太郎  
小菅雄道

原告 原告 原告 被告

小池多郎  
葉本澄  
岩崎彌五郎  
東京浴場炭礦株式會社

右法律上代理人右專務取締役  
田村彰一

【主文】 被告東京浴場炭礦株式會社ノ設立ハ無効トス。  
訴訟費用ハ被告ノ負擔トス。

【理由】 原告訴訟代理人ハ主文掲記ノ如キ判決ヲ求メ其請求ノ原因トシテ被告會社ハ石炭ノ探礦賣買竝ニ之ニ附隨セル事業ヲ營ムヲ以テ目的トシ資本金三百萬圓株式總數六萬株一株ノ金額五拾圓第一回拂込金一株ニ付キ十二圓五拾錢ト定メ大正八年十二月十二日創立總會ヲ終結シテ右設立ヲ完了シ尙同月二十六日其登記ヲ了ヘ爾來事業ニ著手シタルモノニシテ原告等ハ其株主ナリ然ルニ被告會社ノ拂込金額ハ第一回拂込金額七十五萬圓ニ對シ僅ニ五萬四百六十二圓五拾錢ニ過キス而モ右金額中三萬圓ハ創立費ニ宛テタルヲ以テ會社ノ資金ハ當初ヨリ二萬餘圓ニ過キサレモノナリ此ノ如キ狀態ニテハ被告會社カ其目的トスル事業ヲ遂行スルハ到底不可能ノコトニシテ被告會社ノ設立ハ無効ナルヘキモノナルヲ以テ原告等ハ商法第二百三十二條ノ規定ニ基キ本訴ニ及ヒタリト陳述シ立證トシテ甲第一乃至三號證ヲ提出シ證人津村千松河田常次郎ノ由

出ヲ爲シタリ。

被告訴訟代理人ハ原告ノ請求ヲ棄却ストノ判決ヲ求メ答辯トシテ原告主張ノ事實中第一回拂込金額七十五萬圓ニ對シ事實拂込アリタルハ僅ニ五萬四百六十二圓五十錢ナリトノ點ヲ否認シ株式總數六萬株ハ全部拂込済ナリト陳述シタル外其餘ノ主張事實ヲ認メ甲第一、二號證ハ不知ト答ヘ第三號證ノ成立ヲ認メタリ。

【理由】 被告會社カ原告主張ノ如キ組織ナルコト同會社カ大正八年十二月十二日創立總會ノ終結ニヨリ設立セラレ事業ニ著手シタルコト竝ニ原告等カ被告會社ノ株主ナルコトハ當事者間ニ爭ナシ而シテ右會社株式總數六萬株此第一回拂込金額七十五萬圓ニ對シ事實拂込アリタル株式ハ四千三十七株ニシテ此金額五萬四百六十二圓五十錢ナルコトハ證人河田常次郎津村千松ノ各證言竝ニ右津村千松ノ證言ニ依リ當裁判所カ真正ニ成立シタリト認ムル甲第一號證ヲ綜合シテ之ヲ認メ得ヘク被告會社カ創立費トシテ三萬圓ヲ費シタルコトハ當事者間ニ爭ナキヲ以テ被告會社ハ當初ヨリ二萬四百六十二圓五十錢ノ資本ヲ有シタルニ過キサレコト明カナリ然ラハ右金額ヲ以テシテ到底被告會社ノ目的タル事業ノ遂行ヲ完ウシ得サルノミナラス會社ノ經濟的基礎ノ鞏固ハ得テ望ムヘカラサルカ故ニ被告會社ノ設立ハ株式會社設立ノ手續ニ於テ重大ナル欠缺アリタルモノト謂フヘク此ノ如キ會社ノ設立ハ無効ナリト云ハサルヘカラス依テ事業著手後ノ被告會社ニ對シ被告會社ノ株主タル原告等カ商法第二百三十二條ノ規定ニ依リ其設立無効ヲ主張スル本訴請求ヲ理由アリト認メ訴訟費用ニ付キ民事訴訟法第七十二條

ヲ適用シ主文ノ如ク判決シタリ。



其二 大正六年第三六八號會社設立無效請求事件(東京地方裁判所第二民事部)前事件に關する説明を全部援用する。

原告	白 完 熾
原告	宋 乘 峻
被告	南洋拓殖株式會社

右法律上代理人取締役

山下 敬 太郎

【主文】 被告會社ノ設立ハ無効ナリ。

訴訟費用ハ被告ノ負擔トス。

【事實】 原告兩名訴訟代理人ハ主文表示ノ如キ判決ヲ求ムル旨申立テ其請求原因トシテ陳述シタル事實ノ要旨ハ被告會社ハ元朝鮮綿花株式會社ト稱シ資本金二百萬圓株式數四百株一株ノ金額五十圓第一回拂込金一株ニ付キ十二圓五十錢ニシテ大正元年八月三十一日創立總會ノ終結ニ依リテ設立セラレ同年九月二十六日東京區裁判所ニ於テ其設立登記手續ヲ爲シタリ而シテ原告宋乘峻ハ被告會社ノ株式一千株原告白完熾ハ同五

百株ヲ有シ其第一回拂込金合計金一萬八千七百五十圓ハ當時之カ拂込ヲ終了シタルカ右創立總會當時第一回拂込ヲ終了シタルモノハ總株式四萬株中僅カニ四千二百三十三株其金額五萬二千九百十二圓五十錢ニ過キヌシテ其餘ノ株式二萬五千七百六十七株此金額四十四萬六千八百七十四圓五十錢ニ對シテハ全然之カ拂込ナキモノナリ然ルニ右拂込金額ノミヲ以テシテハ被告會社ノ目的タル事業遂行ノ資金ト爲スコト能ハサルノミナラス現ニ被告會社ハ設立以來既ニ五ケ年ヲ經過スルモ未タ其事業ヲ開始スルニ至ラサル状態ニ在ルモノナルカ故ニ斯カル拂込ノ欠缺ハ會社存在ノ運命ニ影響スルコト恰モ全然拂込ナキ場合ト同一ニシテ會社ノ本質ヲ害スルモノナルヲ以テ假令其創立總會ヲ終結スルモ其成立ヲ認ムヘキモノニアラス仍テ被告會社ニ對シ其設立ノ無効確證ヲ求ムル爲本訴ヲ提起シタリト云フニアリ。

被告訴訟代理人ハ原告請求ヲ棄却ストノ判決ヲ求ムル旨申立テ其答辯トシテ右原告主張事實ヲ全部認メタリ。

【理由】原告主張事實ハ當事者間ニ争ナキ處ナリ。

案スルニ株式會社ニアリテハ株式總數ノ引受ナク又ハ株金四分ノ一ノ拂込ヲ了ラサルニ拘ハラズ創立總會ヲ開キ之カ終結ヲ爲シタル場合ニ於テ會社成立スルヤ否ヤハ株式ノ引受又ハ株金拂込ニ關スル欠缺ノ程度如何ニヨルモノニシテ其欠缺ノ程度輕微ニシテ之カ爲メ會社資本ノ鞏固ト事業ノ遂行ニ障害ヲ生セサルモノナルトキハ商法第三百三十六條ニヨリ發起人ニ於テ其株式ヲ引受ケ又ハ其拂込ヲ爲スヲ以テ足ルヘク之ニ反シ

其欠缺程度ノ重大ニシテ之カ爲メニ會社資本ノ鞏固ト事業ノ遂行ニ障害ヲ與フルモノナルニ拘ハラズ尙形式的創立總會ノ終結アリタルコトヲ理由トシテ會社ノ設立ヲ有效ナラシムルカ如キコトアラハ是資本團體タル會社ノ本質ヲ害シ其基礎ヲ脆弱ナラシメ資本ノ充實ヲ強制スル以上ノ法規ハ全ク空文ニ歸スルヤ明カニシテ斯ノ如キ會社ハ假令總會終結スルモ其成立ヲ認ムヘキモノニアラスト斷セサルヘカラス本件ニ於テ被告會社カ株式總數四萬株ニシテ創立總會ノ終結ニ至ル迄其第一回ノ拂込ヲ完了シタル株式ハ僅カニ四千二百三十三株ニ止マルコト當事者間ニ争ナキトコロナリ果シテ然ラハ右拂込株式カ其總株式ニ對シテ實ニ十分ノ一弱ニ過キサルモノナルヲ以テ斯ノ如キハ其第一回拂込ニ付キ重大ナル欠缺アル以上ハ假ニ創立總會ヲ召集スルモ其總會ハ前提要件ニ欠缺スル無効ノモノニシテ從ツテ其終結ニヨリ被告會社ノ成立ヲ來タスモノニアラサルコト前説示ノ趣旨ニ徴シ明カニシテ被告會社設立ノ無効ナルコト勿論ナリ仍テ原告ノ本訴請求ヲ理由アリトシ訴訟費用ニ付キ民事訴訟法第七十二條第一項ニ則リ主文ノ如ク判決シタリ。

### 第六章 株金拂込請求の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、給付の訴。
- 2 當事者 原告は株式會社、被告は其の株主。

- 3 管轄 民訴總則の規定に従ふ。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 二百圓(民訴二三條一項)
- 6 貼用印紙 金七圓(法二條)
- 7 株金の拂込に付商法一五二條參照。

昭和四年(ワ)第二〇八四號株金拂込請求事件 (東京地方裁判所第二民事部昭和五年四月二十二日判決)

原告

日清毛織株式會社

右代表者取締役

徳 成 虎 雄

眞 尾 源 一 郎

宮 越 惣 兵 衛

被告

被告

【主文】 被告等ハ原告ニ對シ各金百圓及之ニ對スル昭和三年十月十七日以降完済迄百圓ニ付一日四錢ノ割合ニ依ル金員ヲ支拂フヘシ訴訟費用ハ被告等ノ負擔トス

【事實】 原告訴訟代理人ハ主文同旨ノ判決ヲ求メ其請求原因トシテ陳述シタル事實ノ要旨ハ原告ハ元商號ヲ日本綿羊毛織株式會社ト稱シ資本金五百萬圓一株ノ金額五拾圓

株式總數十萬株第一回株金拂込一株ニ付金十二圓五十錢ニテ大正八年十二月十日設立セラレ其後一株ニ付七圓五十錢ノ第二回拂込ヲ徵收シタル株式會社ニシテ大正十二年一月二十七日商號ヲ現在ノ如ク變更シ、後昭和三年六月十日ノ株主總會決議ニ依リ訴外清水俊外四名ヨリ無償ニテ其所有株式合計四萬株ノ提供ヲ受ケテ之ヲ消却シ以テ資本金三百萬圓、一株ノ金額五十圓株式總數六萬株ニ減資シタリ被告等ハ孰レモ原告會社ノ株式二十株ヲ有スル株主(被告眞尾ハ引受ニ因ル株式取得者)ナルカ、原告會社ハ昭和三年九月二十日ノ取締役會ニ於テ第三回拂込トシテ一株ニ付金五圓宛チ同年十月十六日迄ニ拂込マシムヘキ旨ヲ決議シ之ニ基キ同年二十七日被告等其他各株主ニ對シ此趣旨ノ拂込ヲ爲スヘキコトヲ催告シタルモ被告等ハ其拂込ヲ爲サス而シテ原告會社定款ニハ株金拂込ヲ怠リタル株主ニ對シテ百圓ニ付一日四錢ノ損害金ヲ請求シ得ヘキ旨規定シアルヲ以テ各被告ニ對シ二十株分ノ拂込金百圓及之ニ對スル右拂込期日ノ翌日タル昭和三年十月十七日以降完済迄日歩四錢ノ割合ニ依ル損害金ノ支拂ヲ求ムル爲本訴ニ及ヒタリト謂フニ在リテ被告等ノ抗辯事實ヲ否認シ被告宮越ノ訴不適法ノ抗辯ニ對シテ原告會社發起人ノ作成シタル原始定款ニ右被告主張ノ如キ定アリタルコトハ爭ハサルモ其規定ハ創立總會ニ於テ代表取締役ヲ置クコトヲ得ルコトニ變更セラレ大正十三年十月十五日代表取締役清水達也ノ辭任以來引續キ現在ニ至ル迄會社ヲ代表スヘキ取締役ヲ定メサリシヲ以テ被告ノ右主張ハ理由ナシ又被告等ノ原告會社設立無効ノ抗辯ニ對シテ假ニ原告會社ノ設立ヲ無効ナラシムル事實アリトスルモ原告會社ハ既ニ事業ニ

著手シタルモノナルヲ以テ其設立ノ無効ナルコトハ抗辯ヲ以テ主張スルコトヲ得スト  
 述ヘ立證トシテ甲第一號證同第二號證ノ一、二、同第三、第四號證同第五號證ノ一乃至三同  
 第六號證同第七號證ノ一乃至九、同第八號證ヲ提出シ、證人山崎佐太郎ノ證言ヲ援用シ、乙  
 各號證ノ成立ヲ認メタリ。

被告宮越訴訟代理人ハ原告ノ訴ヲ却下ストノ判決ヲ求メ其理由トシテ原告會社定款ニ  
 ハ取締役ノ互選ヲ以テ定メタル社長タル取締役カ會社ヲ代表スヘキ旨規定シアルニ拘  
 ラス本訴ハ代表取締役ニ非サル取締役徳成虎雄カ原告會社ヲ代表シテ提起シタルヲ以  
 テ不適法ナリト述ヘタリ。

本案ニ付被告等訴訟代理人ハ執レモ原告ノ請求ヲ棄却ストノ判決ヲ求メ答辯トシテ被  
 告眞尾訴訟代理人ハ原告主張ノ如キ第三回株金拂込催告ヲ受ケタルコトハ認ムルモ同  
 被告カ原告會社ノ株式二十株ヲ引受ケタルコトハ否認ス假ニ此事アリトスルモ被告ハ  
 大正十一年十月中原告會社ヨリ第二回株金拂込催告ヲ受ケテ之ニ應セサリシニ因リ同  
 年十二月二日限りニテ株主ノ權利ヲ失ヒタルモノナルヲ以テ原告主張ノ第三回拂込催  
 告當時ハ既ニ株主ニ非ス其餘ノ原告主張事實ハ不知ナリト述ヘ抗辯トシテ(一)假ニ被告  
 カ現ニ原告會社ノ株主ナリトスルモ原告會社ハ元資本金五百萬圓株式總數十萬株ニシ  
 テ其第一回拂込一株ニ付十二圓五十錢ナリシヲ以テ右拂込株金合計額八百二十五萬圓  
 ナルニ拘ラス現實拂込アリタルハ約六萬圓ニ過キス殆ト全ク拂込ナキト同視スヘク株  
 式會社ノ資本團體タル本質ニ反スルニ因リ其設立ハ當然無効ナルヲ以テ第三回株金拂

込決議又無効ナリ加之(二)假ニ第二回拂込ノ催告ニ應セスシテ失權シタリトノ主張ニシ  
 テ認メラレストスルモ被告ハ當時ノ原告會社破産管財人川村文吉ヨリ第二回拂込請求  
 ノ訴訟ヲ提起セラレタル結果同人トノ間ニ大正十四年一月三十日當時ノ請求金百五十  
 八圓ノ内金五十圓ヲ支拂ヒ同被告ニ對スル將來ノ株金拂込請求權ノ免除ヲ受ケル旨ノ  
 和解契約ヲ爲シタルモノナリ更ニ(三)原告ハ昭和三年六月十日ノ株主總會ノ決議ニ依リ  
 有效ニ資本減少アリタルコトヲ前提トシテ本訴請求ヲ爲スモ其株主總會ニ於テ決議セ  
 ラレタル減資ノ方法ハ原告自身ノ主張スルカ如ク清水俊外四名ノ株式ヲ消却セントス  
 ルモノニシテ斯ノ如キハ株主平等ノ原則ニ反スルヲ以テ右株主總會決議ハ無効ニシテ  
 從テ右清水俊外四名ノ株式ハ其實消却ノ效力ヲ生セサルニ因リ此分ノ株式四萬株ヲ除  
 外シテ爲シタル本件第三回株金拂込ノ催告ハ株主平等ノ原則ニ反シ無効ナリ四原告會  
 社ノ株主中第一、二回ノ拂込ヲ了セサル者多數ニシテ原告會社力是等ノ者ニ對スル拂込  
 ノ請求ヲ勵行セハ第三回拂込ノ必要ナキニ拘ラス之ヲ放任シテ爲ス本件第三回拂込ノ  
 請求ハ又株主平等ノ原則ニ反シ無効ナリ以上執レノ點ニ於テモ原告ノ請求ハ失當ナリ  
 ト述ヘ。

被告宮越訴訟代理人ハ同被告カ原告會社ノ二十株ノ株主ナルコトハ認ムルモ第三回株  
 金拂込催告ヲ受ケタルコトハ否認ス其餘ノ原告主張事實ハ不知ナリト述ヘ前記不知ヲ  
 以テ爭ヒタル事實ノ肯定セラレタル場合ノ抗辯トシテ被告眞尾ノ述ヘタル(一)及(三)ノ抗  
 辯ト同一ノ主張ヲ提出シ(三)ノ抗辯ニ付尙被告ニ對シテハ原告會社ヨリ此資本減少ヲ決

議シタル株主總會ノ招集通知ナカリシコトヲ主張シ此事由ヲモ右決議ノ無効ナルコトノ原因ト爲シタリ。

立證トシテ被告眞尾訴訟代理人ハ乙第一乃至第四號證ヲ提出シ甲第一號證ハ不知同第二號ノ一ノ被告眞尾ノ印影ノ成立ヲ認メ其ノ他ノ部分ノ成立ハ不知同第三、第四號證同第五號證ノ一、二、同第六號證同第七號證ノ一乃至五ノ成立ハ不知、同第七號證ノ六乃至九、同第八號證ノ成立ヲ認メタリ。

被告宮越訴訟代理人ハ甲第七號證ノ六乃至九同第八號證ノ成立ヲ認メ其他ノ甲號各證ノ成立ヲ不知ヲ以テ答ヘタリ。

【理由】先ツ被告宮越ノ訴不違法ノ主張ニ付按スルニ本件カ原告會社取締役徳成虎雄ニ依リテ代表セラレテ提起セラレタルコトハ記録ニ徴シ明ニシテ原告會社發起人ノ作成シタル原始定款ニハ右被告主張ノ如キ定アリタルコトハ原告モ争ハスト雖モ成立ニ争ナキ甲第八號證竝ニ證人山崎佐太郎ノ證言ヲ綜合スレハ其規定ハ創立總會ニ於テ代表取締役ハ必スシモ常ニ置クコトヲ要スルモノニ非ス單ニ之ヲ置クコトヲ得ルコトニ變更セラレ而シテ少クトモ本訴提起當時以來原告會社ハ代表取締役ヲ設ケサリシコトヲ認メ得ルヲ以テ取締役ハ各自會社ヲ代表シ得ルモノニシテ右主張ハ理由ナシ。

次に進ンテ本案ニ付按スルニ其記載ノ態様ニ依リ眞正ニ成立シタリト推定シ得ル甲第一號證ニ依レハ原告會社ノ設立組織ニ關スル事實カ總テ原告主張ノ如クナルコトヲ認メ得ヘク之ニ對シ被告等ハ原告會社ノ第一回拂込トシテ現實ニ拂込マレタル金額ハ約

六萬圓ニ過キササル旨主張スレトモ何等之ヲ認ムルニ足ル證據ナキヲ以テ之ヲ前提トシテ其拂込ハ殆ト皆無ト同視スヘキニ因リ其設立ハ當然無効ナリトノ抗辯ハ採用スルニ由ナシ。

被告宮越カ原告會社ノ二十株ノ株主ナルコトハ當事者間ニ争ナク甲第二號證ノ一、二中被告眞尾名下ニ存スル印影カ被告ノ眞正ナル印章ト符合スルコトハ同被告ノ認ムルトコロナルヲ以テ反證ナキ限リ同被告自身ニ依リ又ハ其承認ノ下ニ捺印セラレタルモノ從テ右書證全部ハ眞正ニ成立シタリト推定スヘク該書證ニ依レハ被告眞尾モ亦原告會社ノ二十株ノ株主ナルコトヲ認ムルニ足ル然モ同被告カ既ニ第二回拂込催告ニ應セサリシニ因リ大正十一年十二月二日ノ經過ト共ニ株主ノ權利ヲ失ヒタル旨ノ主張ニ付テハ乙第一號證ハ其記載自體ニ依ルモノヲ以テ第二回株金拂込ニ付テノ失權豫告ヲ附シタル第二次催告ヲ爲シタルモノトハ解シ難ク單ニ被告カ第一次催告ニ應セサリシ爲メ非公式ニ拂込ヲ勸告シ若シ應セサルトキハ或ハ右ノ如キ失權豫告附催告ヲナスニ至ルヘキコトヲ警告シタルモノト解スルヲ相當トスヘク假ニ之ヲ右ノ如キ正式ノ失權豫告附催告ト解スルモ其催告ノ日附タル大正十一年十一月二十五日ト指定期限タル同年十二月二日トノ間ニハ法定ノ二週間ノ期間ヲ有セサルヲ以テ之ニ因リ失權ノ效果ヲ生スルコトナク其他同被告カ株主ノ權利ヲ失ヒタルコトヲ認メ得ヘキ立證ナシ

然リ而シテ證人山崎佐太郎ノ證言竝ニ同證言ニ依リテ眞正ニ成立シタリト認メ得ル甲第三號證ニ依レハ原告會社カ昭和三年九月二十日ノ取締役會ニ於テ第三回株金拂込ト



シテ一株ニ付金五圓宛チ同年十月十六日迄ニ拂込マシムヘキ旨ノ決議ヲナシタルコトヲ認定シ得ヘク之ニ基キ其他ノ各株主ト共ニ被告眞尾ニ對シ原告主張ノ如キ第三回株金拂込催告ノナサレタルコトハ當事者間ニ争ヒナク又被告宮越ニ對シテモ同様同年九月二十七日原告主張ノ如キ拂込催告ヲナシタルコト右證人ノ證言及之ニ依リ眞正ニ作成セラレタルコトヲ認定シ得ル甲第四號證第五號證ノ一、二ニ徴シ之ヲ認メ得ルニ十分ナリ。

被告眞尾ハ大正十四年一月三十日原告會社破産管財人トノ間ニ和解契約成立シ同被告ノ將來ノ株金拂込義務ヲ免除セラレタル旨抗争スレトモ其主張ハ立證不十分ナルノミナラス(乙)第二號證ニテハ足ラス)假ニ斯ノ如キ事實アリトスルモ株式會社カ株主ニ對シ將來ニ於ケル株金拂込義務ヲ免除スルカ如キコトハ其資本團體タル本質ニ反スル行爲ナルヲ以テ斯カル和解契約ハ無効ナリト謂フヘク從テ右抗辯ハ正當ナラス。

更ニ被告等ハ原告會社ノ執リタル清水俊外四名ノ株式ノミテ消却セントスル資本減少ノ方法ハ無効ナルヲ以テ其株式四萬株ハ消却ノ效力ヲ生セストナシ之ヲ除外シテ爲シタル木件第三回株金拂込催告モ亦無効ナリト主張スト雖モ假ニ原告會社ノ減資方法ニシテ株主平等ノ原則ニ反シ無効ナリトスルモ株金拂込催告ハ會社ニ於テ必スシモ株主全部ニ對シ同時ニナスコトヲ要スルモノニ非ス特ニ一部ノ株主ニ付不平等ノ取扱チナス事情ノ存セサル限り取扱上ノ過誤又ハ故障等ニ因リ時ノ前後ヲ生スルコトアルモ之ヲ以テ株主平等ノ原則ニ反スルモノニ非スト解スルチ相當トシ而シテ原告會社カ昭和

三年六月十日ノ株主總會ノ決議ニ依リ資本減少ノ方法トシテ前示清水俊外四名ノ株式四萬株ニ付消却ノ手續ヲ執リタルコトハ當事者間ニ争ナキトコロナレハ原告會社トシテハ特ニ此消却カ無効ナルコトヲ知レルニ非サル限り第三回拂込ノ催告ヲ爲スニ當リテ殘部ノ株式ニ付テノミ其手續ヲ執ルハ當然ノ事理ニシテ而シテ右清水俊外四名ノ四萬株ヲ除外シテナシタル木件第三回拂込ノ催告(此事實ハ當事者間ニ争ナシ)ニ付原告會社ニ特ニ不平等ノ取扱チナス事情ノ存シタルコトヲ認メ得ル證據ナキヲ以テ原告會社ノ第三回株金拂込催告ハ有效タルコトヲ失ハス右抗辯モ理由ナシ此點ニ付被告宮越ハ尙原告會社ヨリ右資本減少ノ決議アリタル株主總會ノ招集通知ヲ受ケタルコトナキ事實ヲ主張シテ右資本減少ノ決議無効ノ根據トナセトモ其無効ナルト否トカ木件株金拂込催告ノ效力ニ影響ナキコト右判示ノ如クナルノミナラス如キ理由ニ因ル株主總會決議無効ハ訴ヲ以テスルニ非サレハ之カ主張ヲナスコトヲ得サルモノナリ。

被告眞尾ハ又原告會社ニ第一、二回株金拂込ヲ完了シ居ラサル株主多數アリテソレ等ノ株主チシテ現實ニ右拂込ヲ爲サシムルニ於テハ第三回拂込ノ必要ナキ旨主張スレトモ之ヲ認ムヘキ證據ナシ。

而シテ證人山崎佐太郎ノ證言ニ依リテ眞正ニ成立シタリト認メ得ル甲第六號證ニ依レハ原告會社定款ニハ株金拂込ヲ怠リタル株主ニ對シ日歩四錢ノ損害金ヲ請求シ得ル規定アルコトヲ認メ得ルヲ以テ被告等ハ原告ニ對シ各二十株分ノ第三回拂込金合計百圓及之ニ對スル拂込期日ノ翌日タル昭和三年十月十七日以降完済迄日歩四錢ノ割合ニ依

ル損害金ノ支拂ヲナスヘキ義務アルモノトス、仍テ原告ノ請求ヲ全部認容シ訴訟費用ノ負擔ニ付民事訴訟法第八十九條ノ規定ヲ適用シテ主文ノ如ク判決シタリ。

### 第七章 拂込株金返還請求の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、給付の訴。
- 2 當事者 原告は被告貯蓄銀行の増資による新株の應募者として株金を拂込みたる者、被告の一人は右銀行他の三人は右銀行の取締役。
- 3 管轄 民訴總則の一般規定に依る。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金二千二百三十四圓(民訴二二條一項)
- 6 貼用印紙 金二十五圓(民訴印紙法二條)
- 7 貯蓄銀行條例 明治二十三年法律七三號
  - 第一條 複利ノ方法ヲ以テ公衆ノ爲ニ預金ノ事業ヲ營ム者ヲ貯蓄銀行トス
  - 公衆ノ爲左ノ事業ヲ營ム者ハ貯蓄銀行ノ業ヲ爲スモノト爲シ此條例ニ依ラシム
    - 一 一回五圓未満ノ金額ヲ預金トシテ受入ルルコト
    - 二 豫メ拂戻ノ期限ヲ定メ定期ニ又ハ一定ノ期間内ニ於テ數回ニ預金ヲ入ルルコト

三 期限ヲ定メテ一定金額ノ給付ヲ爲スコトヲ約シ定期ニ又ハ一定ノ期間内ニ於テ數回ニ金錢ヲ受入ルルコト

第三條 貯蓄銀行ノ取締役ハ在任中ニ生シタル銀行ノ義務ニ付連帶無限ノ責任ヲ負フモノトス但其責任ハ退任後二箇年ノ滿了ニ因リテ消滅ス

尤も右條例は大正十年四月十四日法律七十四號貯蓄銀行法で廢止せられた(同法二四條)而して舊法の一條三條に相當する新法の法條は一條と十五條とである。

大正六年(ワ)第一二六號拂込株金返還請求事件 (東京地方裁判所第二民事部大正六年十月二日八日判決)

原告 佐藤竹次郎  
 被告 株式会社勸業貯蓄銀行  
 外四十七名

右法律上代理人取締役

確 戸 務  
 寺 田 梅 次 郎  
 神 戸 務  
 五十嵐 敬 止

【全文】 被告株式会社勸業貯蓄銀行ハ原告桐ヶ谷隆良ニ對シ金百三十七圓五十錢原告  
 第七章 拂込株金返還請求の訴

岩井彦八小宮彦八矢澤大吉齋藤市作川邊シカ石川久藏ニ對シ各金百二十五圓宛原告美濃口儀ハニ對シ金八十七圓五十錢原告畑金次郎青山サト大川民藏安西嘉吉濱野市五郎安西久市萩原淺次郎山中龜吉ニ對シ各金六十二圓五十錢宛原告大矢喜作ニ對シ金五十圓原告麻生常藏野崎啓藏小山タケ飯島福松ニ對シテハ各金三十七圓五十錢宛原告入内島國次郎安西重太郎入内島周藏須藤茂三郎菅沼國藏飯島龜吉菅沼榮次郎川邊福重矢澤ヒサ井上熊吉石山松吉萩原貞助桐ヶ谷七藏ニ對シ各金二十五圓宛原告佐藤竹次郎鈴木ワカ磯崎淺吉同辰五郎川合秀吉菅沼啓次郎石井イチ須藤幸七矢澤仁三郎葉山大次郎川邊澤藏入内島市太郎山村友吉井熊カノニ對シテハ各金十二圓五十錢宛竝ニ右山村留吉分ニ對シテハ大正五年七月十二日ヨリ右石川久藏分ニ對シテハ同年八月五日以降本件判決執行済ニ至ルマテ年五分ノ割合ニヨリ損害金ヲ支拂フヘシ。

原告其餘ノ請求ハ之ヲ棄却ス。

訴訟費用中原告及被告株式會社勸業貯蓄銀行トノ間ニ生シタル部分ハ被告銀行ノ負擔トシテ其餘ハ原告等ノ負擔トス。

【事實】原告等訴訟代理人ハ被告等ハ連帶シテ原告桐ヶ谷隆良ニ對シテハ金百三十七圓五十錢原告岩井彦八小宮彦八矢澤大吉齋藤市作川邊シカ石川久藏ニ對シ各金百二十五圓宛原告美濃口儀ハニ對シ金八十七圓五十錢原告畑金次郎青山サト大川民藏安西嘉吉濱野市五郎安西久市萩原淺次郎山中龜吉ニ對シ各金六十二圓五十錢宛原告大矢喜作ニ對シ各金百二十五圓宛原告麻生常藏野崎啓藏小山タケ飯島福松ニ對シテハ各金三十七圓五十錢宛原告入内島國次郎安西重太郎入内島周藏須藤茂三郎菅沼國藏飯島龜吉菅沼榮次郎川邊福重矢澤ヒサ井上熊吉石山松吉萩原貞助桐ヶ谷七藏ニ對シテ金二十五圓宛原告佐藤竹次郎鈴木ワカ磯崎淺吉同辰五郎川合秀吉菅沼啓次郎石井イチ須藤幸七矢澤仁三郎葉山大次郎川邊澤藏入内島市太郎山村友吉井熊カノニ對シテ各金十二圓五十錢宛竝ニ右山村留吉分ニ對シテハ大正五年七月十二日ヨリ右石川久藏分ニ對シテハ同年八月五日ヨリ右萩原淺次郎ニ對シテハ同年七月二十日ヨリ爾餘ノ各原告分ニ對シテハ同年八月五日ヨリ各本件判決執行済ニ至ルマテ年五分ノ割合ニヨリ損害金ヲ支拂フヘシ訴訟費用ハ被告等ノ連帶負擔トストノ判決ヲ求ムル旨申立テ其請求原因トシテ陳述シタル事實ノ要旨ハ被告株式會社勸業貯蓄銀行ハ貯蓄銀行條例ニヨリ其業ヲ營ムモノナルトコロ大正五年中新株發行ニヨル資金増加ヲ計畫シ大藏大臣ニ對シ其増資ニ基ク定款變更ノ認可申請ヲ爲シ其認否ノ行政處分前一株金五十圓第一回株金拂込金十二圓五十錢ト定メ新株ノ募集ヲ爲シタリ原告等ハ右株式募集ニ應シ原告桐ヶ谷隆良ハ十一株ヲ原告岩井彦八矢澤大吉齋藤市作川邊シカ石川久藏ハ各十株ヲ原告美濃口儀ハ八七株ヲ畑重次郎青山サト大川民藏安西嘉吉濱野市五郎安西久市萩原淺次郎山中龜吉ハ各五株ヲ原告大谷喜作ハ四株ヲ原告麻生常藏野崎啓藏小山タケ飯島福松ハ各三株ヲ原告入内島國次郎安西重太郎入内島周藏須藤茂三郎菅沼國藏飯島龜吉菅沼榮次郎川邊福重矢澤ヒサ井上熊吉石山松吉萩原貞助桐ヶ谷七藏ハ各二株ヲ原告佐藤竹次郎鈴木ワカ磯崎淺吉同辰五郎

川合秀吉菅沼啓次郎石井イチ須藤幸七矢澤仁三郎葉山大次郎川邊澤藏入内島市太郎山村友吉井熊カノハ各一株ヲ各引受クルコトトシ右山村友吉ハ大正五年七月十二日石川久藏ハ同月十九日右萩原淺次郎ハ同月二十日爾餘ノ各原告ハ同八月五日各引受ケタル新株ノ數ニ應シ一株ニ付金十二圓五十錢宛ノ割合ニテ被告株式會社ヘ拂込ミタリ然ルニ右増資認可申請ハ大正五年七月ニ却下サレ被告銀行ノ新株發行ニヨル資本増加ハ不能トナレルヲ以テ被告銀行ハ前記原告等ノ拂込ミタル各金額竝ニ之ニ對スル前記各拂込ミタル日以降年五分ノ割合ニヨル利息竝ニ損害金ヲ支拂フヘキ義務アルモノトス而シテ被告寺田梅次郎ハ大正四年十月二十五日ヨリ同六年三月六日迄被告神戶務ハ大正四年十月二十五日ヨリ今日迄被告五十嵐敬止ハ大正三年十二月二日ヨリ同五年十二月六日迄何レモ被告株式會社勸業貯蓄銀行ノ取締役トシテ在任シ前記被告銀行ノ右原告ニ對スル債務モ右被告三名カ取締役在任中ニ生シタルモノニ外ナラサルヲ以テ右被告銀行ト連帶シテ其債務ヲ辨濟スヘキ責任アルヤ明カナリト云フニアリテ被告ノ抗辯ニ對シ本件原告等ハ總テ現金ヲ以テ株金ノ拂込ヲ爲シタルモノナリ假ニ原告中被告ノ摘示セルモノカ被告主張ノ如ク訴外勸業貯蓄株式會社ニ對スル債權ト同額ヲ以テ被告銀行ニ振替タリトスルモ其振替ハ株金拂込トシテ有效ナリト附陳シ立證トシテ甲第一、二號證ヲ提出シ乙號證ニ對シテハ不知ヲ以テ答ヘタリ。

被告訴訟代理人ハ原告等ノ請求ヲ棄却ストノ判決ヲ求ムル旨申立テ其答辯トシテ被告銀行カ普通銀行ノ業務ノ外貯蓄銀行ノ業務ヲ併セ營ムコト大正五年四月大藏大臣ニ對

シ増資ヲ爲サンカ爲メニ定款變更認可ノ申請ヲ爲シ該申請カ大正五年七月五日附ニテ不認可トナリタルコト被告銀行ニ於テ右申請却下前増資株式ノ募集ヲ爲シ原告等カ夫レノ株式ノ申込ヲ爲シタルコト被告寺田梅次郎同神戶務同五十嵐敬止カ原告等主張ノ期間被告銀行ノ取締役タリシコトハ何レモ之ヲ認ム然レトモ本件被告等ノ内第一回株金トシテ全部現金ニテ拂込ヲ爲シタルハ麻生常藏川邊福重萩原淺次郎ノ三人ニ止マ

ル矢澤大吉ハ金八十五圓川邊シカハ金七十五圓石川久藏ハ金七十二圓五十錢桐ヶ谷隆真ハ金六十七圓五十錢小宮彦八ハ金六十二圓五十錢齋藤市作ハ金五十七圓美濃口儀八ハ金四十二圓五十錢安西久市畑金次郎ハ各金四十圓青山サト濱野市五郎ハ各金三十七圓五十錢岩井彦八ハ金二十五圓山中龜吉ハ金二十五圓小山タケハ金十三圓七十五錢大川民藏安西嘉吉ハ金十二圓五十錢飯島龜吉大矢喜作矢澤ヒサハ金十圓野崎啓藏菅沼榮次郎ハ各金八圓七十五錢須藤藤茂三郎石井イチ矢澤仁三郎石井松吉飯島福松井熊カノハ各金七圓五十錢入内島國次郎安西重太郎入内島周藏菅沼國藏井上熊吉萩原貞助桐ヶ谷七藏等ハ各金五圓佐藤竹次郎鈴木ワカ磯崎淺吉同辰五郎川合秀吉菅沼啓次郎須藤幸七川邊澤藏入内島市太郎山村友吉ハ各金二圓五十錢葉山大次郎ハ金二圓ヲ確實ニ拂込ミタルニ止マリ其餘ハ右原告等カ訴外勸業貯蓄株式會社ニ對シテ有セシ三年据置定期預リ金ノ債權ヲ同額ヲ以テ被告銀行ニ振替ヘタルモノナルヲ以テ株式ノ拂込トシテ無効ナレハ被告銀行ニ於テ拂戻ヲ爲スヘキ義務ナシ尙被告銀行ハ普通銀行ノ業ヲ營ムト主トシ從トシテ貯蓄銀行ノ業ヲ合セ營ムニ過キス而シテ本件株式ノ申込ノ如キハ株式組

織ニヨル資本團體ノ設立又ハ増資ノ方法タル一體的ノモノニシテ何等貯蓄銀行ト特種ノ牽連ヲ有スルモノニアラサレハ其拂込金ノ返還ニ付キ取締役ハ銀行ト共ニ連帶責任ヲ負擔スヘキモノニアラサル旨尙被告五十嵐敬止訴訟代理人ハ被告五十嵐ハ被告銀行ノ右増資ノ計畫ニ關與セサルヲ以テ本件請求ニ應スヘキ義務ナキ旨各陳述シ立證トシテ被告訴訟代理人等ハ乙第一號證ノ一、二ヲ提出シ被告銀行寺田梅次郎神戶務訴訟代理人ハ證人近藤武吉水主哲夫ノ喚問ヲ甲號各證ノ成立ヲ認メ被告五十嵐ノ訴訟代理人ハ甲第一號證ノ成立ヲ認メ甲第二號證ニ對シテハ不知ヲ以テ答ヘタリ。

【理由】 仍チ先ツ被告株式會社勸業貯蓄銀行ニ對スル原告等ノ請求ニ付案スルニ被告銀行カ大正五年四月増資ヲ爲サンカ爲メ大藏大臣ニ對シ其定款變更ノ認可ノ申請ヲ爲シタルコト被告貯蓄銀行カ右大藏大臣ノ認否確定前増資株式ノ募集ヲ爲シ本件原告等ニ於テ夫レノ其主張ノ如キ株式ノ拂込ヲ爲シタルコトハ本件當事者間ニ争ナク而シテ本件原告中麻生常藏川邊福重萩原淺次郎三人カ何レモ其主張ノ口ニ現金ヲ以テ全部拂込ヲ爲シタルコト矢澤大吉ハ金八十五圓ヲ川邊シカハ金七十五圓ヲ石川久吉ハ金七十二圓五十錢ヲ桐ヶ谷隆良ハ六十七圓五十錢ヲ小宮彦八ハ金六十二圓五十錢ヲ齋藤市作ハ金五十五圓ヲ美濃口儀八ハ金四十二圓五十錢ヲ安西久市畑金次郎ハ各金四十圓ヲ青山サト濱野市五郎ハ各金三十七圓五十錢ヲ岩井彦八ハ金二十五圓ヲ山中龜藏ハ金二十五圓ヲ小山タケハ金十三圓七十五錢ヲ大川民藏安西嘉吉ハ各金十二圓五十錢ヲ飯島龜吉大矢喜作矢澤ヒサハ各金十圓ヲ野崎啓藏菅沼榮次郎ハ各金八圓七十五錢ヲ須藤茂

三郎石井イチ矢澤仁三郎石井松吉飯島福松井熊カノハ各金七圓五十錢入内島國次郎安西重太郎入内島周藏菅沼國藏井上熊吉萩原貞助桐ヶ谷七藏ハ各金五圓佐藤竹次郎鈴木ワカ磯崎淺吉同辰五郎川合秀吉菅沼啓次郎須藤幸七川邊澤藏入内島市太郎山村友吉ハ各金二圓五十錢葉山大次郎ハ金二圓ヲ何レモ現金ヲ以テ其申込ミタル被告銀行株式第一回株金トシテ拂込ミタルコトハ被告銀行ノ認ムル所ナリ而シテ成立ニ争ナキ甲第二號證竝ニ證人近藤武吉水主哲夫ノ各證言ヲ綜合考覈スルトキハ本ト原告等ニ於テ原告等主張ノ日ニ株金トシテ現實ニ拂込ミタリト主張スル金額ヨリ被告銀行カ認メタル前記各金額ヲ控除シタル殘額ハ麻生常藏川邊福重萩原淺次郎以外ノ原告等カ訴外勸業貯藏株式會社ニ對シ三年ノ据置定期預金ノ債權ヲ有シ右會社ニ於テ該債權ニ對スル期限ノ利益ハ拋棄シテ右原告等ニ該預金ノ拂戻ヲ爲シ之ヲ原告等ニ於テ更ニ現實ニ被告銀行ニ拂込ミタルノ事實ヲ認メ得ヘシ被告銀行訴訟代理人ハ被告銀行カ認メタル以外ノ株式拂込ハ債權ヲ以テ爲サレタル旨抗爭スレトモ其爲シタル立證ヲ以テシテハ未タ抗辯事實ヲ認ムルニ足ラサルカ故ニ右抗辯ハ之ヲ排斥ス然リ而シテ本件原告等ニ於テ被告銀行ニ株金トシテ夫レノ拂込ミタル右金額ハ大藏大臣ヨリ被告銀行増資ノ認可アラハ増資株式第一回拂込ミニ充當スルモノナリシコトハ證人近藤武吉ノ證言ニヨリテ之ヲ認ムルコトヲ得ヘク右増資認可ノ申請カ大正五年七月五日附ニテ不認可トナリタルコトハ本件當事者間ニ争ナキ所ナルヲ以テ被告銀行ハ遅クモ同月十日頃ニハ右不認可ノ事實ヲ知りタルモノト認ムヘク從テ被告銀行カ原告等ヨリ右ノ如キ金額ヲ受取リ

タルコトハ法律上原因ナキコトヲ知りナカラ利益ヲ受ケタルコトニ歸シ被告銀行ハ原告等ヨリ受取リタル右各金額並ニ之ニ對スル各受取リタル本件判決執行済ニ至ル迄年五分ノ割合ニヨル利息並ニ損害金ヲ支拂フ義務アルコト明カナリ。

次ニ爾餘ノ被告三名ニ對スル原告等ノ請求ノ當否ヲ案スルニ被告株式會社勸業貯蓄銀行カ貯蓄銀行條例ニ準據シ其業ヲ營ムコト被告五十嵐敬止神戸務寺田梅次郎カ原告等主張ノ期間被告銀行ノ取締役トシテ在任シタルコトハ本件ノ各當事者間ニ争ナシ仍テ貯蓄銀行條例第三條ノ取締役ノ責任ノ範圍ニ付キ審究スルニ凡ソ貯蓄銀行條例第一條ニ規定スル貯蓄預金並ニ一回五圓未満ノ金額ヲ預金トシテ受入ルル場合其他同條第二項第二、三號ノ場合ノ如キハ其預ケ金ノ性質上主トシテ零細ナル資金ヲ吸集シ長期ニ涉リテ之ヲ保管利殖スルコトヲ要スルモノナルヲ以テ其安全ト確實トヲ期スルカ爲メ特ニ同條例ヲ設ケ之ニ依ラシムル立法ノ趣旨ニ外ナラサレハ其取締役ノ連帶責任範圍ニ關シテモ濫リニ之ヲ擴張スルコトナク之ヲ貯蓄銀行固有ノ業務ノ範圍ニ限定スルヲ至當ナリトス本件ニ於テ原告等ハ株金拂込ニ充當センカ爲メニ被告銀行ニ交付シタル金額ノ拂戻ヲ求ムルモノニシテ該金額ノ拂込ノ如キ貯蓄銀行條例第一條第一項ノ貯蓄預金ノ拂戻ニアラサルハ勿論同條第二項ノ預ケ金ノ拂戻ニモ該當セサルコト明カナルヲ以テ被告銀行ニ於テ該金額拂戻ノ債務アルコト前段認定ノ如シトスルモ右三名ノ被告カ右銀行ノ義務ニ付キ貯蓄銀行條例第三條ノ責任ナキヤ論ヲ俟タス。

以上ノ理由ニヨリ本件原告等ノ請求中被告株式會社勸業貯蓄銀行ニ對スル各拂込金額

戻請求並ニ之ニ對スル原告等ノ各拂込タル日以降年五分ノ割合ニヨル利息並ニ損害金ノ請求ヲ認容シ其餘ノ原告等ノ請求ハ之ヲ棄却スヘキモノトシ尙ホ訴訟費用ニ付テハ民事訴訟法第七十二條第一項ニ則リ主文ノ如ク判決シタリ。

### 第八章 株式(及株主名簿)名義書換請求の訴

其一 大正七年(第一二二七號株主名簿及株券名義書換請求事件(東京地方裁判所第二民事部) 大正七年十一月十二日判決)

- 1 訴の性質 通常訴訟、給付の訴。
- 2 當事者 原告は株主、被告は會社。
- 3 管轄 民訴總則の規定に従ふ。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金百圓(民訴印紙法三條)
- 6 貼用印紙 金三圓五十錢(同法二條)

原告 被告

石橋 惣吉  
東京絹毛紡織株式會社

右法律上代理人取締役

高橋 虎太

【全文】 被告ハ原告ニ對シ東京絹毛紡織株式會社株式第一九六七號同甲第一九六八號（以上若尾璋八名義）同甲第三八〇三號同甲第三八〇四號同甲第四九六七號（以上萩原仙之助名義）ノ各拾株券ヲ原告名義ニ書換ヘ且株主名簿ニ原告ノ氏名住所株式ノ數及株券ノ番號各株ニ付キ拂込ミタル株金額及拂込ノ年月日株式取消ノ年月日ヲ記載スヘシ。訴訟費用ハ被告ノ負擔トス。

【事實】 原告訴訟代理人ハ主文同旨ノ判決ヲ求ムル旨申立テ其請求原因トシテ陳述シタル事實ノ要旨ハ訴外白井福三郎ハ大正六年九月二十五日株式會社片濱銀行ヨリ金一千圓ヲ借受ケ訴外若尾璋八及萩原仙之助ハ右債權ノ擔保トシテ主文記載ノ各株式ニ質權ヲ設定シタリ然ルニ右白井福三郎ハ右債務ヲ辨濟セサリシ爲メ右債權者ハ該擔保權ノ實行トシテ競賣法ニヨリ本件株式ヲ競賣ニ付シ原告ハ大正七年六月二十七日競落ニヨリ之ヲ取得シタルヲ以テ同年八月十五日被告ニ對シ株主名簿並ニ株券ノ名義書換ヲ請求シタルモ被告ハ之ニ應セサルヲ以テ本訴ニ及ヒタリト謂フニ在リテ立證トシテ甲第一號證乃至第十號證ヲ提出シタリ。被告訴訟代理人ハ原告ノ請求ヲ棄却ストノ判決ヲ求ムル旨申立テ答辯トシテ原告主張事實ハ全部之ヲ認ム然レトモ眞實ノ競落人ハ訴外白井福三郎ニシテ原告ニ非ス故ニ本訴請求ニ應スルコト能ハスト陳述シ甲各號證ノ成立ヲ認メタリ。

【理由】 仍テ案スルニ被告ハ本件各株式ノ眞實ノ競落人ハ訴外白井福三郎ニシテ原告ニ非スト主張スレトモ成立ニ爭ナキ甲第六號證ニ依レハ本件株式ノ競賣ニ於テ原告カ眞實ノ競落人ナルコトヲ認メ得ヘク其他原告主張事實ハ當事者間ニ爭ナキ所ナルヲ以テ原告ノ本訴請求ヲ理由アリト認メ訴訟費用ニ付キ民事訴訟法第七十二條第一項ヲ適用シ主文ノ如ク判決シタリ。

其二 大正六年ヲ（第七九三號株式名義書換請求事件（東京地方裁判所第二民事部）大正六年七月三十一日判決）

前事件の説明を援用する。

原告  
原告  
被告

小川 準 三  
稻川 仙之助  
揖斐川電力株式會社

右法律上代理人取締役

立川 勇次 郎

【全文】 被告會社ハ原告小川準三ニ對シ被告會社ノ株式十株券甲第〇〇一一號及甲第〇〇一二號ノ守屋初次郎名義ノ株式二十株ヲ原告小川準三名義ニ書換フヘシ被告會社ハ原告稻川仙之助ニ對シ被告會社ノ株式十株券甲第〇〇一三號乃至甲第〇〇一五號ノ

守屋初次郎名義ノ株式三十株ヲ原告稻川仙之助名義ニ書換フヘシ。  
訴訟費用ハ被告ノ負擔トス。

【事實】原告訴訟代理人ハ主文表示ノ如キ判決ヲ求ムル旨申立テ其請求原因トシテ陳述シタル事實ノ要旨ハ原告小川準三ハ大正五年十月二十六日商慣習ニ從ヒ被告會社株式十株券甲第〇〇一一號及甲第〇〇一二號記載ノ守屋初次郎名義ノ株式二十株ヲ同人ノ株式名義書換白紙委任狀附ニテ讓受ケ原告稻川仙之助ハ同年十一月二十二日商慣習ニ從ヒ被告會社株式十株券甲第〇〇一三號乃至甲第〇〇一五號記載ノ守屋初次郎名義ノ株式三十株ヲ同人ノ株式名義書換白紙委任狀附ニテ讓受ケタルモノナルヲ以テ原告等ハ大正六年六月十一日被告會社ニ對シ右株式名義書換ヲ請求シタルモ被告會社ハ之ニ應セサルヲ以テ本訴ニ及ヒタリト謂フニアリテ被告ノ答辯ニ對シ被告會社カ岐阜區裁判所ヨリ被告主張ノ如キ財産權差押命令ノ送達ヲ受ケタル事實ハ之ヲ認ム然レトモ斯ル違法ノ差押命令ハ何等株式差押ノ效力ヲ生スルモノニアラスト陳述シタリ。  
被告訴訟代理人ハ請求棄却ノ判決ヲ求メ原告ノ主張事實ハ全部之ヲ認ム然レトモ被告ハ岐阜區裁判所大正五年債第三八號債權者林友之助債務者守屋初次郎第三債務者被告會社ノ財産權差押事件ニ付キ大正五年十月二十五日同區裁判所ノ爲シタル本件株式ハ之ヲ差押ヘ且被告會社ハ右株式ノ名義書換ヲナスヘカラサル旨ノ財産權差押命令ノ送達ヲ受ケ居ルヲ以テ本訴請求ニ應スル能ハスト答辯シタリ。  
【理由】原告小川準三カ大正五年十月二十六日商慣習ニ從ヒ被告會社株式十株券甲第

〇〇一一號及甲第〇〇一二號記載ノ守屋初次郎名義ノ株式二十株ヲ讓受ケ原告稻川仙之助ハ大正五年十一月二十一日商慣習ニ從ヒ被告會社ノ株式十株券甲第〇〇一三號乃至甲第〇〇一五號記載ノ右守屋初次郎名義ノ株式三十株ヲ讓受ケタルコトハ本件當事者間ニ爭ナキ處ナリ。  
被告ハ右株式ニ付キ岐阜區裁判所ヨリ右株式ヲ差押ヘ且被告會社ハ右株式ノ名義書換ヲ爲スヘカラサル旨ノ同裁判所ノ財産權差押命令ノ送達ヲ受ケ居ルヲ以テ原告ノ請求ニ應シ難キ旨抗辯シ右ノ如キ財産權差押命令ノ被告會社ニ送達サレタル事實ハ本件當事者間ニ爭ナキ處ナルモ記名株券ノ發行サレタル株式ノ差押ハ宜シク民事訴訟法第五百六十六條以下ノ有體動産差押ノ規定ニヨリ之ヲ爲スヘキモノニシテ右ノ如キ財産權差押命令ヲ以テスルモ何等實體上株式差押ノ效力ヲ生シ得ヘキモノニアラスト解スヘキモノナリ從テ被告ハ右ノ如キ實體上差押ノ效力ナキ命令ニ基キ株式讓受人タル原告等ニ對シ株式ノ名義書換ヲ拒ミ得ヘキ筋合ニアラサルヲ以テ被告ノ右抗辯ハ之ヲ排斥シ各原告ノ請求ヲ正當ト認メ訴訟費用ニ付民事訴訟法第七十二條第一項ニ則リ主文ノ如ク判決シタリ。

其三 大正六年(ハ)第四五號株式名義書換請求事件(本更津區裁判所大正七年三月二十二日判決)



本章其一に付爲したる説明を援用する。

原告  
被告

川名 鐵之助  
君津電氣株式會社  
右法定代理人取締役  
小幡 孫兵衛

【全文】 被告會社ハ訴外土谷頼二名義ニ係ル被告會社乙第八一號同第八二號ノ株券ヲ被告名義ニ書換ノ手續ヲ爲スヘシ。訴訟費用ハ被告ノ負擔トス。

【事實】 原告ハ主文記載ト同一ノ判決ヲ求ムル旨申立テ其請求ノ原因トシテ原告ハ大正四年五月二十四日訴外土谷頼二ニ對シ金參百圓ヲ貸與シ同日頼二名義ノ本訴株券ニ質權ヲ設定シタルモ之カ辨濟ヲ爲ササルニ依リ原告ハ質權實行ノ爲メ横濱區裁判所執達吏ヲシテ該株券ヲ競賣セシメ大正六年九月十九日原告自ラ競落ニ因リ該株主權ヲ取得シタリ依テ其名義書換ヲ被告會社ニ請求シタルモ之ニ應セサルニ付キ已ムナク本訴ニ及ヒタリト陳述シ尙被告ノ抗辯ニ對シ本件株式ニ對シ土谷頼二ノ債權者株式會社湊實業銀行ヨリ被告會社ヲ第三債務者トナシ株式差押命令ヲ發シタル事實アルモ右ハ執達吏ニ於テ該株券ヲ占有セスシテ爲シタル差押ナルカ故ニ法律上何等效力ナク從テ原告ノ名義書換請求權ニ毫モ影響ナキモノト附加演述シ立證トシテ甲第一號乃至第四號證ヲ提出シ乙第一號證ノ成立ヲ認メタリ。

被告ハ原告ノ請求ヲ却下ストノ判決ヲ求メ答辯トシテ訴外土谷頼二カ本件係争ノ株式ヲ有スルコト及該株券ヲ競賣シ原告ニ競落シタル事實ハ之ヲ認ムルモ原告カ該株式ニ對シ質權ヲ設定シタリトノ事實ハ之ヲ認メス假ニ原告ニ質權設定ノ事實アリトスルモ本件株式ニ付テハ大正六年八月八日右頼二ニ對スル債權者訴外株式會社湊實業銀行ノ申請ニ基キ當被告會社ヲ第三債務者ト爲シタル千葉區裁判所ノ差押命令ニ依リ一切ノ處分ヲ禁止セラレタルモノナレハ名義書換ハ不可能ニ屬スト演述シ立證トシテ乙第一號證ヲ提出シ甲第三、四號證ノ成立ヲ認メ同第一、二號證ハ不知ト述ヘタリ。

【理由】 本件ニ於テ訴外土谷頼二カ係争株式ノ所有名義人ナルコト及大正六年九月十九日横濱區裁判所執達吏カ該株券ヲ競賣シ原告自ラ競落人トナリタルコト竝ニ係争株券ニ對シ大正六年八月八日千葉區裁判所ニ於テ差押命令ヲ發シ被告會社ニ一切ノ處分禁止シタル事實ハ當事者間ニ争ナキ所ナリ故ニ本訴主要ノ争點ハ(一)原告ハ係争株式ニ對シ有效ナル質權ヲ取得シタルヤ(二)原告ハ質權實行ノ結果適法ニ該株式ヲ取得シタルヤ(三)株式ノ取得ト差押命令ノ效力トノ關係如何ニ在リトス仍テ案スルニ(一)成立ノ眞正ナルコトニ付キ疑ナキ甲第一號乃至第三號證ニ依レハ原告ハ大正四年五月二十四日訴外土谷頼二ニ對シ金三百圓ヲ辨濟期大正四年七月三十日ト定メテ貸與シ同時ニ係争株券又ハ其他ノ株券ヲ併セ該債權擔保トナシ頼二名義ノ白紙委任狀ヲ添ヘ株券ト共ニ之ヲ債權者タル原告ニ交付シタル事實ヲ認ムルニ難カラサル所ニシテ畢竟原告ハ株券及白紙委任狀ノ交付ニ因リ其株式ノ上ニ有效ナル權利質ヲ取得シタルモノト謂フヲ得ヘ

シ然ラハ原告ハ該債權ノ辨濟ヲ受ケサル場合ニ於テ法律ノ規定ニ基キ右質權ノ實行ヲ爲シ得ヘキコト毫モ疑ナキ所ニシテ而モ本件ニ於テハ原告ハ質權實行トシテ横濱區裁判所執達吏星野秀夫ニ對シ本件株式ノ競賣ヲ委任シ同執達吏ハ制規ノ手續ヲ履踐シ大正六年九月十九日競賣ヲ實施シタルコト甲第四號證ニ徴シ明カナル所ナリ(二)而シテ原告ハ右適法ナル競賣ニ基キ同日自身其競落ヲ許サレ爰ニ完全ナル係争株式ノ所有權ヲ取得シタルモノナルコトハ成立ニ争ナキ甲第四號證ノ三ニ依リ明白ニシテ斯ノ如ク原告ハ適法ナル質權實行ニ因リ本件株主ノ權利ヲ取得シタルモノナル以上被告會社ニ對シ之カ名義書換ヲ請求シ得ヘキコト固ヨリ株主ノ權利ナレハ被告會社ハ謂レナク其請求ヲ拒ムコト能ハサルヤ論ナキ所ナリ(三)然ルニ被告會社ハ該株式ニ付テハ舊株主タル訴外土谷頼二ノ債權者株式會社淡實業銀行ヨリ申請シタル千葉區裁判所ノ差押命令ニ依リ名義書換等一切ノ處分禁止セラレタル旨ヲ以テ原告ノ名義書換請求ヲ拒絶スルニ付キ此點ヲ審案スルニ原告ハ執達吏カ株券ヲ占有セスシテ爲シタル差押ハ法律上無効ナリト主張スレトモ本件差押ハ記名株式ヲ有價證券ト看做シタル單純ナル動産差押ニアラサルコトハ乙第一號證千葉區裁判所判事加賀美明ノ差押命令ニ依リ明カニシテ惟フニ同裁判所ハ訴外土谷頼二カ被告會社ニ對シテ有スル株主ノ權利ヲ一ノ財産權トナシ民事訴訟法第六百二十五條ノ規定ニ則リ差押ヲ爲シタルモノナルコトヲ推知スルニ難カラサルカ故ニ固ヨリ株券ナル有體物ニ對スル差押トシテ執達吏ノ占有スヘキ筋合ノモノニアラサルヤ疑ナシ故ニ此點ニ付テハ原告主張ハ被告ノ抗辯ニ副ハサルモノナ

レハ之ヲ排斥スヘク依テ進テ同裁判所ノ爲シタル株式差押命令ノ效力如何ヲ案スルニ該差押命令ハ債權者ナル訴外株式會社淡實業銀行カ其債權保全ノ爲メ債務者タル訴外土谷頼二ノ賣買讓渡ヲ禁止シ併セテ該株式ノ名義書換ヲ第三債務者タル被告會社ニ禁止シタルニ止マリ固ヨリ當事者間ニ於テ其命令ノ有效ナルハ論ナキ所ナルモ第三者タル原告ハ右命令ニ因リ何等ノ拘束ヲ受クヘキ筈ナキヲ以テ原告カ差押命令前適法ナル質權實行ニ因リ其株式ヲ取得シタルコト前叙ノ如クナル以上叙上ノ差押命令ニ依リ被告ハ名義書換ノ請求ヲ拒ムヘキ權利ナキモノト謂ハサルヘカラス左レハ原告ノ本訴請求ハ相當ナルヲ以テ之ヲ許容シ訴訟費用ニ付キ民事訴訟法第七十二條第一項ヲ適用シ主文ノ如ク判決ス。

### 第九章 株主權確認請求の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、確認の訴。
- 2 當事者 原告は被告會社の株主なりと主張する者、被告は右會社。
- 3 管轄 民訴總則の規定に従ふ。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金百圓(民訴印紙法三條一項)

6 貼用印紙 金三圓五十錢(同法二條)

大正八年(ワ)第四一二號株主權確認請求事件 (東京地方裁判所第二民事部大正八年四月二十二日判決)

原告	栗田昇一
原告	古賀賢之助
原告	岡安順三
原告	保里十三三
被告	東京麻毛紡織株式會社

右法律上代理人取締役

井出治

【主文】 原告等ノ請求ハ之ヲ棄却ス。

訴訟費用ハ原告等ノ負擔トス。

【事實】 原告訴訟代理人ハ原告栗田昇一ハ被告會社ノ株式三百株原告古賀賢之助ハ同三百株原告岡安順三八同五百五十株原告保里十三三八同三百株ノ株主ナルコトヲ確認ス訴訟費用ハ被告ノ負擔トストノ判決ヲ求ムル旨申立テ其請求原因トシテ演述シタル事實ノ要旨ハ被告會社ハ資本金壹百萬圓株式總數二萬株一株ノ金額五十圓第一回四分

ノ一拂込濟ノ會社ニシテ原告等ハ夫々右申立ニ表示スル株數ノ株主ナルトコロ被告會社ハ大正七年十二月十日ノ取締役會ニ於テ第二回株金拂込ノ決議ヲ爲シ大正八年一月十七日原告等ニ對シ同年二月十五日迄ニ一株ニ付キ金五圓宛第二回ノ拂込ヲ爲スヘキ旨催告シ同月二十一日更ニ二週間内ニ其拂込ヲ爲スヘキ旨及其期間内ニ拂込ヲ爲ササルトキハ各其株主權ヲ喪失スヘキ旨ヲ通知シ且其通知ノ事項ヲ公告シタルモ原告等ハ其期間内ニ拂込ヲ爲ササリシモノナリ然レトモ右拂込ノ催告ハ取締役五名ノ内井出治會根長三耶野村龜藏ノ三名カ前記取締役會ニ出席シ野村龜藏ハ中途退席シテ決議ニ加ハルコトナク井出治會根長三耶野村兩名ノ爲シタル決議ニ依ルモノニシテ取締役過半數ノ決議ニ依ルモノニ非ス從テ商法第六十九條ニ違反スル無効ノ催告ナルヲ以テ原告等ハ株主權ヲ喪失スルコトナク依然トシ株主ナルニ因リ本訴ニ及ヒタリト云フニアリテ被告主張ノ定款第十五條ノ定ヲ認メタリ。被告訴訟代理人ハ原告等ノ請求棄却ノ判決ヲ求メ原告等ノ主張事實ハ之ヲ認ムルモ商法第六十九條ハ定款ニ別段ノ定メナキ場合ニ適用アルヘキモノニシテ被告會社ノ定款第十五條ニハ株金ノ拂込ハ取締役會ニ於テ決定シ二週間前ニ之ヲ各株主ニ通知スヘシトノ定アリ被告會社ハ各取締役ニ對シテ取締役會召集ノ適法ナル通知ヲ爲シ因リテ出席シタル取締役會ノ決議ニ從ヒ原告主張ノ催告及通知ヲ爲シタルモノナレハ取締役過半數ノ決議ニ依ラサルノ理由ヲ以テ其催告及通知カ無効トナルヘキモノニアラス從テ原告等ハ再度ノ株金拂込ノ催告ニ定メタル二週間内ニ拂込ヲ爲ササルニ因リ各株主

権ヲ喪失セルモノナリトノ旨答辯シタリ。

【理由】按スルニ被告會社ノ定款第十五條ニ株金ノ拂込ハ取締役會ニ於テ決定シ二週間前ニ之ヲ株主ニ通知スヘキ旨ノ定メアルコト及被告會社カ取締役全員五名ニ對シテ取締役會召集ノ適法ナル通知ヲ爲シ中三名其取締役會ニ出席シ一名ハ決議ニ加ラスシテ退席シ殘二名ニ於テ第二回ノ株金拂込ノ決議ヲ爲シ被告會社カ之ニ基キ株主タル原告等ニ對シ二週間以上ノ期間ヲ定メテ其拂込ヲ催告シ原告等カ應セサルヲ以テ更ニ二週間内ニ其拂込ヲ爲スヘキ旨及其期間内ニ於テ之ヲ爲ササルトキハ株主ノ權利ヲ失フヘキ旨ヲ通知シ同時ニ其通知ノ事項ヲ公告シタルモ原告等カ仍ホ其拂込ヲ爲ササリシコトハ當事者間爭ナキ所ナリ仍テ右ノ決議カ取締役過半数ノ決議ニ非サル爲メ無効ナリヤ否ヤヲ考フルニ商法第六十九條ニハ會社ノ業務執行ハ定款ニ別段ノ定ナキトキハ取締役ノ過半数ヲ以テ之ヲ決定シ被告會社ノ定款第十五條ニハ株金ノ拂込ハ取締役會ニ於テ決定スヘキ旨ノ定メアリテ其取締役會ニ於テ決定スト云フハ適法ニ召集セラレタル取締役會ニ出席シタル取締役ニ於テ決議ストノ意味ニシテ其出席シタル取締役カ取締役全員ノ過半数ナルト否トヲ問ハサルノ趣旨ナリト解スルヲ相當トスルヲ以テ右定款第十五條ノ定ハ則チ商法第六十九條ニ定款ニ別段ノ定トアルニ該當スルモノト云フヘク一旦出席スルモ決議ニ加ラスシテ退席シタル取締役ハ出席セサルモノト同視スヘキモノナルヲ以テ前示本件取締役會ノ決議ハ即チ有效ナルモノト謂ハサルヘカラス左レハ原告等カ其株主權ヲ喪失シタルコトハ明瞭ニシテ本訴請求ハ理由ナ

キニ因リ民事訴訟法第七十二條第一項ヲ適用シテ主文ノ如ク判決ス

### 第十章 失權株式競賣不足額請求の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、給付の訴。
- 2 當事者 原告は株式會社、被告は右會社の株主たりしも株金拂込を爲さざる爲め失權したる者。
- 3 管轄 民訴一二條。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金七百五十圓(民訴二二條一項)
- 6 貼用印紙 金十五圓(民訴印紙法二條)
- 7 本訴に付ては商法一五二條一五三條一五三條ノ二參照

大正十年(一三〇五號)株式競賣不足額請求事件 (東京地方裁判所第七民事部大正十一年九月二十日判決)

原告

寶永銅山株式會社

右法律上代理人取締役

第十章 失權株式競賣不足額請求の訴

二六三

被告

波邊三郎  
中村富久  
右親權者  
中村觀惠

【主文】 被告ハ原告ニ對シ金七百三十圓及之ニ對スル大正九年九月二十八日ヨリ本件判決執行濟ニ至ル迄百圓ニ付キ日歩四錢ノ割合ニ於ケル損害金ヲ支拂フヘシ。訴訟費用ハ被告ノ負擔トス。

此判決ハ原告ニ於テ保證トシテ金三百圓又ハ之ニ相當スル有價證券ヲ供託スルトキハ假ニ執行スルコトヲ得。

【事實】 原告訴訟代理人ハ主文第一、二項表示ノ如キ判決及保證ヲ條件トスル假執行ノ宣言ヲ求ムト申立テ其請求原因トシテ陳述シタル事實ノ要旨ハ原告會社ハ資本金一百万圓一株ノ金額五十圓各株ニ付キ第一回拂込金十二圓五十錢ヲ以テ創立總會ヲ終結シ大正六年十一月五日其設立登記ヲ了シタル株式會社ニシテ被告ハ創立以來ノ一百株ノ株主ナリシ處原告會社ハ各株ニ付キ金七圓五十錢宛ノ第二回拂込ヲ爲サシメタル後更ニ大正九年九月六日株主總會ニ於テ第三回拂込トシテ各株ニ付キ金七圓五十錢ヲ拂込マシムル決議ヲ爲シ翌七日附ヲ以テ株主タル被告ニ對シ大正九年二月二十七日迄ニ一株ニ付キ七圓五十錢宛即チ百株分七百五十圓ヲ拂込ムヘク若シ右期間内ニ之カ拂込ヲ爲ササルトキハ百圓ニ付キ日歩四錢ノ定款所定ノ割合ヲ以テ延滞日歩ヲ徵收スヘキ旨

ノ催告ヲ發シタルモ被告ハ之ニ應セザリシニヨリ原告會社ハ更ニ同年十二月十五日附ヲ以テ同年同月三十日迄ニ右拂込ヲ爲スヘク若シ期間内ニ之カ拂込ヲ爲ササルトキハ株主タルノ權利ヲ喪失スヘキ旨ノ通知ヲ發シ同年同月十一、十二日ノ時事新報國民新聞中外商業新報ニ其旨ノ廣告ヲ爲シタリ然ルニ被告ハ尙之カ催告ニ應セスシテ期間ヲ經過シタルニヨリ株主タル權利ヲ喪失セルヲ以テ原告ハ大正十年二月二十一、二十二日ノ兩日前示各新聞紙ニ失權シタル被告ノ氏名住所及其株券ノ番號ヲ廣告シ大正十年四月七日東京區裁判所執達吏御園理兵ニ委任シ失權株式ヲ競賣セシメタル處一株ニ付キ二十錢即チ百株ニ付キ二十圓ニ競賣シ得タルヲ以テ百株ノ滯納金七百五十圓ヨリ右賣得金二十圓ヲ控除シ其殘額七百三十圓及之ニ對スル拂込催告期間滿了ノ翌日即チ大正九年九月二十八日以降完済迄定款所定ノ百圓ニ付キ日歩四錢ノ割合ニ依ル金額ノ辨濟ヲ求ムル爲メ本訴ニ及ヒタリト謂フニアリテ尙被告ノ抗辯ニ對シ被告カ未成年者ナルコトハ認ムルモ本件催告及通知ハ其法定代理人ニ於テ知悉シ居リタルヲ以テ被告ノ抗辯ハ理由ナシト陳述シ立證トシテ甲第一號證乃至第五號證甲第六號證ノ一、二、三ヲ提出シ證人鈴木峰吉ノ喚問ヲ求メタリ。

被告訴訟代理人ハ原告ノ請求ヲ棄却ストノ判決ヲ求ムト申立テ答辯トシテ原告會社ノ創立ニ關スル事實及被告カ原告會社ノ創立以來ノ百株ノ株主タルコトハ之ヲ認ムルモ其餘ノ原告主張事實ハ不知ナリ假ニ被告カ原告主張ノ如キ催告並ニ失權豫告ノ通知ヲ受ケタリトスルモ被告ハ未成年者ナルヲ以テ其催告並ニ通知ハ之ヲ以テ未成年者タル

被告ニ對抗スルコトヲ得サルモノナリ故ニ本訴請求ハ失當ナリト陳述シ甲第一乃至三號證ハ何レモ不知其餘ノ甲各號證ハ成立ヲ認ムト述ヘタリ。

【理由】原告會社カ其主張ノ如ク創立總會ヲ終結シテ成立シ大正六年十一月五日其設立登記ヲ了シタルコト及被告カ原告會社ノ創立以來ノ百株ノ株主タルコトハ當事者間爭ナキ所ナリ而シテ證人鈴木峰吉ノ證言ニ依リ真正ニ成立シタリト認ムヘキ甲第二、三號證ニヨレハ原告會社カ大正九年九月六日ノ株主總會ノ決議ニ基キ同年九月七日迄ニ一株ニ付キ金七圓五十錢ノ割合ニテ其持株百株分合計金七百五十圓ノ第三回拂込ミテ爲スヘキ旨ノ催告ヲ發シタル事實明白ニシテ其後更ニ被告ニ對シ同年十二月十五日附ヲ以テ同年同月三十日迄ニ其拂込ヲ爲スヘク若シ其期間内ニ拂込ヲ爲ササルトキハ株主タルノ權利ヲ喪失スヘキ旨ノ通知ヲ發シ其旨同年十二月十一、十二日ノ國民新聞中外商業新報ニ廣告シタル事實ハ成立ニ爭ナキ甲第四號證及第六號證ノ一、二ニヨリ之ヲ認ムルニ充分ナリ而シテ右拂込ノ催告並ニ失權豫告ノ通知カ何レモ株主名簿ニ記載シタル被告ノ住所ニ宛郵便ニ付セラレタルコトハ前記證人ノ證言ニ依リ推知シ得ヘク本件當事者地方ニ於ケル郵便通信カ通常發信ノ翌日即チ拂込ノ催告ニ付テハ大正九年九月八日失權豫告ノ通知ニ付テハ同年十二月十六日被告ニ到達シタルモノト看做ササルヲ得ス然ラハ右催告及通知ハ何レモ二週間ノ猶豫期間ヲ存シ適法ニシテ被告ハ右失權通知期間ノ經過ニヨリ株主タル權利ヲ喪失シタルモノト謂ハサルヲ得ス而モ被告カ未成年者ニ

年者ニシテ本件催告及通知カ未成年者タル被告自身ニ對シ直接ニ爲サレタルコトハ原告ノ爭ハサル所ナルモ會社ノ株主ニ對スル通知又ハ催告ハ株主名簿ニ記載シタル株主ノ住所又ハ其者カ會社ニ通知シタル住所ニ宛ツルヲ以テ足ルコトハ商法第七十二條ノ二ノ規定スル所ニシテ本件催告及通知カ株主名簿ニ記載シタル被告ノ住所ニ宛テ發セラレタルコト右認定ノ如クナル以上ハ特ニ其株主名簿ニ被告ノ法定代理人ノ氏名住所ノ記載アリトノ事實立證セラレサル限り本件催告及通知ハ前示商法ノ規定ニ適合スルノミナラス未成年者ニ對スル催告及通知ハ通常其法定代理人ニ於テ受領セラルルモノト推定スヘキカ故ニ本件催告及通知ハ適法ニシテ被告ノ此點ニ關スル抗辯ハ其理由ナキモノトス然リ而シテ原告會社カ大正十年二月二十一、二十二日ノ兩日前示新聞紙ニ失權株主タル被告ノ氏名住所及株券ノ番號等ヲ公告シタルコトハ甲第六號證ノ三ニヨリ明カニシテ同年四月七日執達吏ヲシテ失權株式百株ヲ競賣セシメタル結果一株金二十錢即チ百株ニ付キ金二十圓ノ賣得金ヲ得タルニ過キサルトハ甲第五號證ニヨリ明瞭ナレハ被告ハ前示百株ノ拂込滯納金七百五十圓ヨリ右賣得金ヲ控除シタル殘金七百三十圓及之ニ對スル拂込催告期間満了ノ翌日タル大正九年九月二十八日以降完済ニ至ル迄前示證人ノ證言ニヨリ成立ヲ認メ得ヘキ甲第一號證ニ明カナル定款所定ノ日歩四錢ノ割合ニ於ケル金額ヲ原告會社ニ辨濟スヘキ義務アルモノトス仍テ原告ノ請求ヲ正當ナリトシ訴訟費用ノ負擔ニ付キ民事訴訟法第七十二條第一項假執行ノ宣言ニ付キ同法第五百三條第一號ヲ適用シ主文ノ如ク判決ス。

### 第十一章 株式讓渡人に對する滯納金不足額請求の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、給付の訴。
- 2 當事者 原告は株式會社、被告は右會社の株式讓渡人。
- 3 管轄 民訴一二條。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金一萬八千四百三十圓四十錢(民訴二二條一項)
- 6 貼用印紙 30圓+3圓×3=39圓(民訴印紙法二條二編四章其一5參照)
- 7 商法一五一條一五二條一五三條一五三條ノ二參照。

大正十一年(ワ)第二五五八號第二五七三號株式滯納金不足額請求事件 (東京地方裁判所第二民事部大正十一年十一月十日判決)

原告

内外水産株式會社  
右法律上代理人取締役  
東 一 安

被告

高橋千鶴子  
右法律上代理人親権者

被告

高橋りう  
高橋毅  
佐藤正孝

【主文】 當裁判所カ大正十一年六月一日言渡シタル調席判決ヲ維持ス。  
此判決ハ原告ニ於テ執行前保證トシテ被告千鶴子ニ對シ金二千二百五十圓被告毅ニ對シ金二百五十圓被告正孝ニ對シ金二千六百圓又ハ之ニ相當スル有價證券ヲ供託スルトキハ假ニ執行スルコトヲ得。

【事實】 被告等ハ主文記載ノ調席判決ニ對スル故障ノ申立ヲ爲シタリ。  
原告訴訟代理人ハ原告ニ對シ被告千鶴子ハ金三千七百四十五圓並ニ大正十一年一月十一日ヨリ本件判決執行濟ニ至ル迄内金二千九百九十六圓ニ對シ百圓ニ付キ日歩四錢内金七百四十九圓ニ對シ年五分ノ割合ニ依ル損害金及金一圓二十錢ヲ被告毅ハ金七百四十九圓並ニ之ニ對スル大正十一年一月十一日ヨリ本件判決執行濟ニ至ル迄年五分ノ割合ニ依ル損害金ヲ被告正孝ハ金一萬三千九百三十一圓四十錢並ニ大正十一年一月十一日ヨリ本件判決執行濟ニ至ル迄内金八千九百八十八圓ニ對シ百圓ニ付キ日歩四錢内金四千九百四十三圓四十錢ニ對シ年五分ノ割合ニ依ル損害金及金一圓二十錢ヲ支拂フヘシ訴訟費用ハ被告等ノ負擔トストノ判決並ニ保證ニヨル假執行ノ宣言ヲ求メ其請求原因トシ

テ陳述シタル事實ノ要旨ハ原告會社ハ資本金五百萬圓一株ノ金額五十圓第一回株金一株ニ付キ金十二圓五十錢拂込濟ニテ大正八年五月十六日設立セラレタル株式會社ナリシトコロ大正九年三月二十六日資本金五十萬圓一株ノ金額五十圓一株ニ付キ金十八圓七十五錢拂込濟ノ輸出水産株式會社ト合併シ資本金五百五十萬圓株式總數十一萬株ノ株式會社ト爲リ商號ヲ内外水産株式會社ト改稱シタリ而シテ被告等ハ何レモ元原告會社ノ株主ニシテ被告千鶴子ハ元株式會社山神組ノ株式五百株被告千鶴子ハ同上株式百株被告正孝ハ同上株式千八百六十株ヲ各有シ居タルトコロ被告千鶴子ハ内百株ヲ大正九年十二月四日訴外山野鶴松ニ被告千鶴子ハ右持株全部ヲ同年十二月八日訴外山野鶴松ニ被告正孝ハ内五十株ヲ大正八年九月二十七日訴外樋口喜三郎ニ内百十株ヲ大正九年十月二十日訴外島海千代慶ニ内五百株ヲ大正九年十一月十日訴外植村郁ニ各讓渡シタリ原告會社ハ大正九年十一月十八日定款ノ規定ニ從ヒ重役會ヲ開催シ第二回株金トシテ元株式會社山神組株式一株ニ付キ金七圓五十錢宛ヲ徵收スヘキ旨決議シタルニヨリ同年十二月八日當時原告會社ノ株主タリシ被告千鶴子正孝及訴外山野鶴松樋口喜三郎島海千代慶植村郁ニ對シ大正十年一月十日迄ニ第二回株金一株ニ付キ金七圓五十錢宛ヲ拂込ムヘキ旨催告シタリ然ルニ何レモ應セサルニヨリ更ニ大正十年一月二十八日附ニテ右各株主ニ對シ同年二月十五日迄ニ右拂込ヲ爲スヘク若シ同期日マテニ拂込ヲ爲ササルトキハ株主タル權利ヲ喪失スヘキ旨通知シ同時ニ中外商業新報ニ其旨公告シタルモ右株主ハ何レモ拂込ヲ爲サスシテ遂ニ失權シタルヲ以テ原告會社ハ大正十年三月十七日

八兩日ニ中外商業新報ニ失權公告ヲ爲シ尙大正十年四月五日被告ニ對シ讓渡人トシテ夫々前記讓渡株式ニ付キ同年四月二十五日迄ニ滯納金ノ拂込ヲ爲スヘキ旨催告シタルモ被告等何レモ拂込ヲ爲サス依テ原告會社ハ同年四月二十七日被告千鶴子ノ失權株式四百株ヲ同年五月三日被告正孝ノ失權株式千二百株ヲ同年六月九日訴外喜三郎ノ失權株式四百株ヲ同年五月三日被告正孝ノ失權株式千二百株ヲ同年六月九日訴外喜三郎ノ失權株式五十株訴外千代慶ノ失權株式百十株訴外郁ノ失權株式五百株訴外鶴松ノ失權株式二百株ヲ各競賣シ被告千鶴子ノ分ニ付キ金四圓被告正孝ノ分ニ付キ金十二圓訴外喜三郎ノ分ニ付キ金五十圓訴外千代慶ノ分ニ付キ金一圓十錢訴外郁ノ分ニ付キ金二千九百九十六圓被告正孝ノ分ニ付キ金八千九百八十八圓訴外喜三郎ノ分ニ付キ金三百七十四圓五十錢訴外千代慶ノ分ニ付キ金八百二十三圓九十八錢訴外郁ノ分ニ付キ金三千七百四十五圓訴外鶴松ノ分ニ付キ金千四百九十八圓ノ不足ヲ生シ競賣費用トシテ被告千鶴子正孝ノ分ニ付キ各一圓二十錢ヲ支出シタリ依テ原告會社ハ大正十年六月十三日訴外喜三郎千代慶郁鶴松ニ對シ何レモ從前ノ株主トシテ夫々前記不足金ノ辨濟ヲ求メタルモ何レモ之ニ應セス尙原告會社ノ定款ニヨレハ株金拂込ヲ怠リタル株主ハ拂込期日ノ翌日ヨリ拂込ヲ爲スニ至ル迄百圓ニ付キ日歩四錢ノ割合ニ依ル遲滯利息並ニ懈怠ニヨリ生シタル費用賠償ノ義務アリ而シテ被告千鶴子ノ前記失權株式四百株讓渡株式百株ハ何レモ元訴外高橋正ノ持株ナリシ處訴外正ハ大正八年九月十七日死亡シ被告千鶴子



カ其家督相續ヲ爲シタル結果同被告ニ於テ右株式ヲ取得スルニ至リタルモノニシテ未  
 タ株式名義書換ノ手續ヲ了セザリシモノナリ從テ被告千鶴子ニ對スル前記株金拂込ノ  
 催告竝ニ失權手續競賣手續ハスヘテ株式名簿ノ記載ニ基キ訴外正ノ名義ニ於テ之ヲ爲  
 シタリト云フニ在リテ被告ノ抗辯事實ヲ否認シ立證トシテ甲第一、二號證第三、四號證ノ  
 各一、二第五乃至十一號證ヲ提出シ證人池田可夫小佐井豊喜ノ各證言ヲ援用シタリ。  
 被告千鶴子及毅兩名訴訟代理人竝ニ被告正孝訴訟代理人ハ何レモ原告ノ請求ヲ棄却ス  
 トノ判決ヲ求メ被告千鶴子及毅兩名代理人ハ答辯トシテ原告會社カ原告主張ノ如キ組  
 織ニシテ被告毅及訴外正カ夫々原告主張ノ如クモト原告會社ノ株主ナリシコト被告千  
 鶴子カ大正八年九月十七日訴外正ノ死亡ニヨリ其家督相續ヲ爲シ訴外正ノ株主權ヲ繼  
 承シ未タ株式名義書換ノ手續ヲ了セサルコト竝ニ原告主張ノ株式讓渡ノ事實ハ何レモ  
 之ヲ認ムルモ其他ノ原告主張事實ハスヘテ之ヲ爭フト述ヘ被告正孝代理人ハ答辯トシ  
 テ原告會社カ原告主張ノ如キ組織ニシテ被告正孝カ原告主張ノ如ク原告會社ノ株主ナ  
 ルコト竝ニ原告主張ノ株式讓渡ノ事實ハ何レモ之ヲ認ムルモ其餘ノ原告主張事實ハ之  
 ナ爭フト述ヘ各代理人何レモ抗辯トシテ原告主張ノ重役會ノ決議ニ干與シタル小原元  
 美加瀬和三郎清水清次玉置鎌三郎東一安高山襄坪荒井惣太郎ハ何レモ原告會社ノ取締  
 役又ハ監査役ニ非ス從テ右決議ハ無効ナルカ故ニ原告ノ本訴請求ハ失當ナリト述ヘ被  
 告千鶴子及毅兩名代理人ハ甲第一號證第四號證ノ三第五、七、八、十、十一號證ノ各成立ヲ認  
 メ第二號證ヲ否認シ第三、四號證ノ各一、二、第六、九號證ハ不知ナリト答ヘ被告正孝代理人

ハ甲第三號證ノ一ヲ否認シタル外爾餘ノ甲號各證ノ認否ニ付キテハ被告千鶴子及毅兩  
 名代理人ト同一ノ陳述ヲ爲シタリ。

【理由】 故障ハ適法ナリ

原告會社カ原告主張ノ如キ組織ニシテ被告毅、正孝及訴外高橋正カ原告主張ノ如ク原告  
 會社ノ株主ナルコト被告千鶴子カ訴外正ノ死亡ニヨリ其家督相續ヲ爲シ訴外正ノ株主  
 權ヲ繼承シタルモ株式名義書換ノ手續ヲ完了セサルコト竝ニ原告主張ノ株式讓渡ノ事  
 實ハ夫々當該被告ノ認ムル所ナリ而シテ證人池田可夫小佐井豊喜ノ各證言竝ニ成立ニ  
 爭ヒナキ甲第一、五、七、八、十號證第四號證ノ三右各證人ノ證言ニヨリ當裁判所カ眞正ニ成  
 立シタリト認ムル甲第二、三、四、六、九號證ヲ綜合スルトキハ拂込決議及催告失權手續競賣  
 手續ニ關スル原告主張事實ハスヘテ之ヲ認メ得ヘク損害金ノ定メカ原告主張ノ如クナ  
 ルコトハ亦甲第一號證ニヨリ明カナリトス被告等ハ原告主張ノ重役會ノ決議ニ干與シ  
 タル小原元美加瀬和三郎清水清次玉置鎌三郎東一安高山襄坪荒井惣太郎カ何レモ原告  
 會社ノ取締役又ハ監査役ナルコト明カナルヲ以テ右主張ハ理由ナシ。  
 仍テ原告ノ本訴請求ヲ認容シ訴訟費用ハ民事訴訟法第七十二條ニヨリ全部被告等ヲシ  
 テ負擔セシムヘキモノトス然レハ爰ニ言渡スヘキ判決ハ曩ニ言渡シタル闕席判決ト符  
 合スルヲ以テ同法第二百六十一條ニヨリ之ヲ維持シ假執行ノ宣言ニ付キ同法第五百三  
 條ヲ適用シ主文ノ如ク判決シタリ。

### 第十二章 株式名義抹消手續及び株券引渡並に株式名義回復手續請求の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、給付の訴。
- 2 當事者 原告は未成年者であつて株式會社の株主にして自己名義の株券を擔保として訴外某に差入れたるも後日親權者が右行爲を取消したるにより右株券の返還を求むる者、被告甲は右株券を右某より讓渡を受けたる者にして被告乙は甲より讓渡を受け現に其名義人たる者。
- 3 管轄 民訴總則の一般規定に依る。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 株券の價額を標準とすべきならんも今は不明(民訴二二條一項)
- 6 貼用印紙 從て不明。
- 7 民法八八六條參照。

大正九年(ワ)第三五〇〇號株式名義抹消並ニ引渡請求事件 (東京地方裁判所第二民事部 大正十一年五月十一日判決)

原告

大島龜之助 右法律上代理人親權者

被告

大島カト 馬淵其井 柏木繁太郎

【全文】 被告馬淵其井ハ被告名義ノ日本製氷株式會社株式第一種株式乙十株券第一八六三號同第一八六四號ニ對シ被告名義ノ抹消手續ヲ爲シ右株券ヲ原告ニ引渡スヘシ。被告柏木繁太郎ハ前記株式名義中被告名義ノ抹消手續ヲ爲シ右株式ヲ原告名義ニ回復スル手續ヲ爲スヘシ。訴訟費用ハ被告ノ負擔トス。

【事實】 原告訴訟代理人ハ主文記載ノ如キ判決ヲ求メ其請求ノ原因トシテ陳述シタル事實ノ要旨ハ原告ハ大正九年七月十日訴外清水常彦ニ宛テ金額四千圓ノ約束手形一通ヲ振出シ右手形債權ノ擔保トシテ原告名義ノ日東製氷株式會社株式百株ニ白紙委任狀ヲ添ヘ之ヲ同人ニ交付シタリ而シテ原告ハ未成年者ナルヲ以テ其行爲ヲ爲スニ付キテハ親權者タル母大島カトノ同意ヲ得タルモ右親權者大島カトカ右同意ヲ爲スニ付キテハ親族會ノ同意ヲ得サリシモノナルヲ以テ原告ノ親權者大島カトハ大正十年一月十八日右訴外清水常彦ニ對シ原告ノ右行爲ヲ取消スヘキ旨ノ意思表示ヲ爲シタリ然ルニ是ヨリ先右清水常彦ハ本件株式ヲ被告柏木繁太郎ニ讓與シ右被告ハ之カ名義書換ノ上更

リ之ヲ被告馬淵其井ニ讓渡シ同被告モ亦之カ名義書換ノ手續ヲ了シ現ニ株券ノ所持人ナルヲ以テ本訴ニ及ヒタリト云フニ在リテ立證トシテ甲第一、二號證ヲ提出シ證人福澤義太郎、白旗松之助ノ喚問ヲ求メタリ。

被告等訴訟代理人ハ何レモ原告ノ請求ヲ棄却ストノ判決ヲ求メ被告馬淵代理人ハ答辯トシテ同被告カ原告主張ノ株式ヲ白紙委任狀附ニテ取得シタルコト竝ニ名義書換ノ手續ヲ了シ現ニ株券ヲ占有セルコトハ何レモ之ヲ認ムルモ其餘ノ事實ハスヘテ之ヲ争フト述ヘ被告柏木代理人ハ答辯トシテ同被告カ原告主張ノ株式ヲ取得シ自己名義ニ書換トシテ(一)原告ハ未成年者タリシニ拘ラス株券竝ニ株主名簿ニ親権者ノ氏名ヲ表示セス單ニ未成年者タル原告自身ノ名義ノミヲ表示セルハ是レ能力者タルコトヲ信セシムル爲メ詐術ヲ用ヒタルモノナリ(二)原告カ訴外清水常彦トノ間ニ爲シタル本件行爲ハ民法ニ所謂借財ニ該當セサルモノナルヲ以テ親族會ノ同意ヲ必要トスルモノニ非ス(三)被告等ハ何レモ善意且無過失ニ本件株券ヲ取得シタルモノニシテ白紙委任狀附記名株券ハ動産ト同一ニ取扱ハルルノ慣習アルヲ以テ被告等ハ民法第九十二條ニヨリ何レモ株主タル權利ヲ取得シタルモノナリ從テ親権者ニ於テ取消ノ意思表示ヲ爲スモ何等其效力ナキモノナリト陳述シ證人大島辯次郎ノ證言ヲ援用シ甲第一、二號證ハ何レモ不知甲第三號證第四號證ノ一、二ハ成立ヲ認ムト答ヘタリ。

【註中】 按スルニ證人福澤義太郎、白旗松之助ノ證言竝ニ同證言ニヨリ當裁判所カ真正

ニ成立シタリト認ムル甲第一號證成立ニ争ナキ甲第四號證ノ一、二ヲ綜合スルトキハ原告カ未成年者ナルコト竝ニ同人カ親権者タル母ノ同意ヲ得タル上大正九年七月十日訴外清水常彦ニ宛テ原告主張ノ約束手形一通ヲ振出し右債權ノ擔保トシテ白紙委任狀添附ノ上原告主張ノ記名株式ヲ右訴外人ニ交付シタル處右親権者ノ同意ハ親族會ノ同意ヲ經サリシモノナルヲ以テ右親権者ニ於テ右訴外人ニ對シ原告ノ右行爲取消ノ意思表示ヲ爲シタルコトヲ認ムルニ足ル而シテ被告柏木繁太郎カ右株式ノ讓渡ヲ受ケ名義書換ノ手續ヲ了シタルコトハ同被告ノ認ムルトコロニシテ被告柏木繁太郎カ右株式ヲ被告馬淵其井ニ讓渡シ同シク名義書換ノ手續ヲ了シ被告馬淵其井ニ於テ右株券ヲ占有セル事實ハ同被告ノ認ムルトコロナリ被告等ハ何レモ原告ノ未成年者ナルニ拘ラス株券竝ニ株主名簿ニ單ニ未成年者タル原告ノ名義ヲ表示セルニ止マリ親族會ノ氏名ヲ表示セサルハ能力者タルコトヲ信セシムル爲メ詐術ヲ用ヒタルニ他ナラスト抗爭スレトモ民法第二十條ニ詐術ヲ用ヒタルトキトハ積極的ニ詐欺手段ヲ用ヒタルコトヲ謂フモノナルヲ以テ假ニ被告等主張ノ如キ行爲アリタリトスルモ如斯行爲ハ同條ニ所謂詐術ト稱スヘキモノニ該當セサルヲ以テ被告等ノ右主張ハ理由ナシ次ニ被告等ハ原告カ訴外清水常彦ト爲シタル本件行爲ハ民法第八百八十六條ニ所謂借財ニ該當セサルヲ以テ親族會ノ同意ヲ要セスト抗爭スレト同條ニ所謂借財トハ單ニ金錢ヲ借り入ルル場合ニ限ラルルノ趣旨ニ非スシテ債務ヲ負擔スルスヘテノ場合ヲ包含スルモノト解スヘキモノナルヲ以テ手形振出ノ如キ手形金額支拂ノ義務ヲ負擔スル行爲ハ勿論借財ニ該當スル

第十二章

株式名義抹消、續及び株券引渡竝に株式名義抹消手續及び株式名義回復手續請求の訴

モノト謂ハサルヘカラス唯原告ノ右擔保權設定行爲ハ被告所論ノ如ク借財ニ該當スルモノニハ非スト雖モ同條第三號ニ所謂動産ニ關スル權利ノ喪失ヲ目的トスル行爲中ニ包含セラルヘキモノト解スルヲ相當トスルヲ以テ親族會ノ同意ヲ要スル行爲ナルコト論ナシ從テ此點ニ關スル被告等ノ主張亦理由ナシ最後ニ被告等ハ白紙委任狀附記名株券ハ動産ト同一ニ取扱ハルル慣習アリテ被告等ハ善意且無過失ニ本件株券ヲ取得シタルモノナルヲ以テ民法第九十二條ニヨリ株主タル權利ヲ取得シタルモノナリト抗爭スレトモ記名株式ハ假令白紙委任狀ヲ添附シタル場合ト雖モ動産ニ非サルコトハ論ナキカ故ニ動産特有ノ規定タル民法第九十二條ノ適用ヲ受ケヘキ限リニ非ス從テ假ニ被告カ順次善意無過失平穩公然ニ本件株式ノ占有ヲ取得シタリトスルモ其株主權ヲ取得スヘキモノニ非サルコト論ヲ俟タス被告等ノ主張亦其理由ナシ依ツテ原告ノ本件請求ヲ正當ナリトシテ認容シ訴訟費用ノ負擔ニ付キ民事訴訟法第七十二條第一項ヲ適用シテ主文ノ如ク判決シタリ。

### 第十三章 株主總會決議無效の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、確定の訴。
- 2 當事者 本件の原告の一人は被告會社の取締役一人は監査役他の一人は株主、被告は右株式會社(商法一六三條參照)

- 3 管轄 株式會社本店の所在地の地方裁判所の管轄に專屬す(商法一六三條三項、九九條ノ三ノ一項)
- 4 訴提起の時期 決議の日より一ヶ月内に之を提起するを要する(商法一六三條ノ二ノ一項)
- 5 訴訟物の價額 金百圓(民訴印紙法三條一項)
- 6 貼用印紙 金三圓五十錢(同法二條)
- 7 商法一五六條一六三條以下參照。

株主總會決議無效事件 (東京地方裁判所第二民事部大正六年四月十四日判決)

原告 久保覺太郎  
 被告 日本凍氷株式會社  
 右法律上代理人 外三名  
 小池守  
 山中治郎吉  
 渡邊壽太郎

【主文】 大正六年二月二十日被告會社本店ニ於テ開會シタル被告會社臨時株式總會ニ於テ爲シタル取締役賀山金三郎、同久保覺太郎、同市川義雄、同牧島馬太郎、同柴山又四郎ノ解任決議取締役荒木甚藏、同小池守、同山中治郎吉、同渡邊壽太郎、同大木末吉ノ選任決議及

検査役高畑正隆、同細谷廣造、同城正隆ノ選任決議ハ何レモ之ヲ無効トス。  
訴訟費用ハ被告ノ負擔トス。

【事實】原告訴訟代理人ハ主文ト同趣旨ノ判決ヲ求ムル旨一定ノ申立ヲ爲シ請求ノ原因トシテ陳述シタル事實ノ要旨ハ原告久保覺太郎、市川義雄ハ被告會社ノ取締役原告多良寛ハ被告會社ノ監査役原告藤井約造ハ被告會社ノ株主ナリ被告會社ノ監査役ノ一人ナル山田兼次郎ハ各株主ニ對シ大正六年二月六日第二回株金拂込中止ノ件検査役選任ノ件ニ付キ同月二十日午後十時被告會社本店ニ於テ臨時株主總會ヲ開會スル旨ノ招集ノ通知ヲ發シ尙翌日商法第六十七條ニ依ル解任ノ件取締役補缺選舉ノ件ニ付キテモ前示總會ニ於テ議決スヘキ旨ノ追加ノ招集通知ヲ發シ其會日タル同月二十日被告會社本店ニ於テ右臨時株主總會ヲ開始シ取締役賀田金三郎、同久保覺太郎、同市川義雄、同牧島馬太郎、同柴山又四郎ヲ解任スル旨荒木甚藏、小池守、山中治郎吉、渡邊壽太郎、大木末吉ヲ取締役ニ選任スル旨高畑正隆、細谷廣造、城正隆ヲ検査役ニ選任スル旨ノ決議ヲ爲シタリ而シテ原告藤井約造三ハ右總會ニ出席セザリシモノナリ然レトモ右株主總會ノ招集通知ハ商法第五十六條ニ定ムル期間ヲ遵守セサル違法ノモノニシテ從テ右總會ニ於テ決議シタル前示決議ハ全部無効タルヲ免レサルヲ以テ本訴ニ及ヒタリト云フニアリテ立證トシテ甲第一號證ノ一乃至八ヲ提出シタリ。

被告訴訟代理人ハ原告等ノ請求ヲ棄却スル旨ノ判決ヲ求メ答辯トシテ追加ノ招集通知ヲ發シタルハ大正六年二月六日ニシテ七日ニアラス且二月六日ハ會日タル二月二十日

ヨリ週ル二週間前ナルヲ以テ右通知ハ毫モ違法ニアラスト答辯スル外其餘ノ原告ノ主張事實全部ヲ認メ立證トシテ證人榎山傳之助ノ證言ヲ援用シ甲號證ノ成立ヲ認メタリ。

【理由】原告久保覺太郎、市川義雄ハ被告會社ノ取締役被告多良寛ハ被告會社ノ監査役原告藤井約造三ハ被告會社ノ株主ナル事實ハ當事者間ニ爭ヒナシ被告會社ノ監査役山田兼次郎カ大正六年二月六日原告主張ノ如ク第二回株式拂込中止ノ件検査役選任ノ件ニ付キ同月二十日午前十時被告會社本店ニ於テ臨時株主總會ヲ開會スヘキ旨ノ招集ノ通知ヲ各株主ニ宛テ發シタル事實ハ當事者間ニ爭ヒナク證人榎山傳之助ノ證言ニ依レハ右監査役山田兼太郎カ商法第六十七條ニ依ル解任ノ件取締役補缺選舉ノ件ニ付キテモ亦前示總會ニ於テ議決スヘキ旨ノ追加ノ招集ヲ各株主ニ對シテ發シタル日モ亦大正六年二月六日ナル事實ヲ認ムルニ足ル甲第一號證ノ五乃至八ヲ以テハ右認定ヲ覆スニ足ラス而シテ大正六年二月二十日ノ右總會ニ於テ原告主張ノ如キ決議ヲ爲シタル事實竝ニ右總會ニ原告藤井約造三カ出席セザリシ事實モ亦當事者間ニ爭ヒナキトコロナリ依テ右總會招集ノ通知カ商法第五十六條第一項ノ期間ヲ遵守シタルモノナルヤ否ヤヲ按スルニ商法第五十六條第一項ノ會日ヨリ二週間前ト云フハ會日ヲ除キ其前日ヨリ週リテ二週間即チ十四日ノ滿了シタル其前ト云フノ意義ニ外ナラス而シテ本件總會ハ大正六年二月二十日ニ開カレタルモノナルヲ以テ右招集ノ通知ハ其前日タル大正六年二月十九日ヨリ週リテ二週間ノ滿了シタル日以前即チ二月六日ノ午前零時遅クトモ二月五日中午ニ發セサルニ於テハ商法第五十六條第一項ノ規定ニ反スルモノナリト云ハ



【主文】 原告ノ請求ハ之ヲ棄却ス。  
訴訟費用ハ原告等ノ負擔トス。

【事實】 原告等訴訟代理人ハ一定ノ申立トシテ大正八年四月十三日東京市麴町區有樂町一丁目一番地生命保險協會ニ於テ行ハレタル株式會社東洋信託保證取引所五十株以上ノ一部株主協議會ニ於テ選定シタル協議員三名中一部ノ者ノ推薦ニ依リ被告戸水寛人、山本久顯、肥田景之、伊藤政重、兼松照、桂二郎ハ取締役ニ被告鈴木寅彦、佐々木文一ハ監査役ニ指名選定セラレタル行爲ノ無効ナルコトヲ確認ス訴訟費用ハ被告等ノ負擔トストノ判決ヲ求メ其請求ノ原因トシテ株式會社東洋信託保證取引所ハ大正六年一月二十八日北米合衆國デラウエア州ノ會社法ニ據リ同州ニ於テ設立セラレ其設立ノ登記ヲ了シ原告等ハ同會社ノ株主ナリ而シテ同州ノ會社法ニ於テハ設立登記後直ニ株主總會ヲ召集シテ法律及定款ノ規定ニ依リ取締役監査役ノ選舉ヲ行ハサルヘカラサルニ同會社ハ其設立登記ノ後滿二ケ年ヲ經過スルモ其手續ヲ爲サズ大正八年四月十三日ニ至リ株主中五十株以上ヲ有スルモノノ一部有志ノ株主集會ヲ前掲保險協會ニ開キテ會社進行上ノ協議員ナルモノヲ選定シ越ヘテ同年六月六日右協議員ノ一部ノ者及山本久顯ノ指名ヲ以テ被告戸水寛人、山本久顯、肥田景之、伊藤政重、兼松照、桂二郎ヲ同會社ノ取締役ニ被告鈴木寅彦、佐々木文一ヲ其監査役ニ選定シ各株主ニ對シ其旨ノ通知ヲ爲シタリ然レトモ前示ノ如ク右會社設立ノ準據法タル北米合衆國デラウエア州ノ會社法ニ於テハ取締役監査役ノ選任ハ株主總會ノ決議ヲ以テ之ヲ爲スヘキモノニシテ一部有志ノ株主集會ノ

決議ニ依リ一定ノ協議員ヲ選任シ該協議員カ更ニ取締役監査役ヲ選定スルカ如キハ明カニ同州ノ法規ノ認メサルトコロナルヲ以テ該一部株主集會ノ決議ハ法律上當然無効ニシテ從テ被告等ヲ取締役監査役ニ選定スル行爲モ亦無効ナリ然ルニ被告等ハ自ラ同會社ノ取締役ナリトシテ會社財産ノ全部ヲ占有シ拂込金額ノ大部分ヲ費消シテ會社ノ業務ヲ危殆ナラシメ以テ株主タル原告等ノ正當ノ利益ヲ侵害スルモノナリ仍テ原告等ハ右取締役監査役選定行爲ノ基礎タル前掲一部株主集會ノ決議ノ無効ナルコトノ確認ヲ求ムル爲メ本訴提起ニ及ヒタリト陳述シタリ。  
被告等訴訟代理人ハ原告ノ請求ヲ棄却ストノ判決ヲ求メ答辯トシテ本件會社カ原告主張ノ如ク大正六年一月二十八日北米合衆國デラウエア州ノ會社法ニ據リ同州ニ於テ設立セラレ原告等カ其株主ナルコト大正八年四月十三日一部有志ノ株主集會ヲ開キ同集會ニ於テ會社進行上ノ協議員ヲ選定シ該協議員等カ被告等ヲ取締役監査役ニ指名選定シタルコトハ之ヲ認ムルモ其他ノ原告主張ノ事實ハ之ヲ否認スト述ヘ且抗辯トシテ會社機關ノ選定行爲ノ效力ノ確定ヲ求ムル訴ハ會社ヲ被告トシテ提起スヘキモノナルニ原告等カ被告等ニ對シテ本訴ヲ提起シタルハ訴訟ニ於ケル正當ナル當事者ヲ缺クモノニシテ本訴ハ此點ニ於テ理由ナシ假ニ被告等ヲ以テ正當ナル當事者ナリト爲スモ本件判決ノ效力ハ本訴ノ當事者ニアラサル會社ニ及ハス從テ假令原告等カ本件ニ於テ勝訴ハ本件確認ノ訴提起ニ付キ法律上ノ利益ヲ有セサルモノニシテ此點ニ於テモ亦本訴ハ

失當ナルヲ免レスト陳述シタリ。

【理由】按スルニ原告等ハ本訴ニ於テ株式會社東洋信託保證取引所ハ北米合衆國デ  
 ウエア州會社法ニ準據シテ設立セラレタルニ拘ラス其設立登記ノ後同法ニ從ヒテ適法  
 ナル株主總會ノ決議ニ因リ取締役監査役ノ選任ヲ行ハス五十株以上ヲ有セル一部有志  
 ノ株主總會ノ決議ニ因リ一定ノ協議員ヲ選定シ該協議員ノ指名ニ依リテ被告等ヲ取締  
 役又ハ監査役ニ選定シタルハ同州會社法ノ規定ニ違反シタル無効ノ選任行爲ナリト爲  
 シ該一部株主總會ハ同會社ノ意思決定ノ機關トシテ適法ニ成立セルモノニアラス從テ  
 該集會ニ於ケル決議ハ無効ニシテ株主タル原告等ヲ羈束スルノ效力ナキコトヲ主張シ  
 延イテ右決議ニ基キテ選任セラレタル被告等ハ同會社ノ適法ナル取締役又ハ監査役ニ  
 アラサルコトヲ主張スルモノナリ而シテ原告等ハ被告等ハ右決議ニ基キ自ラ取締役又  
 ハ監査役ナリトシテ擅ニ會社ノ事務ヲ行ヒ之カ爲メニ株主タル原告等ノ法律上ノ地位  
 ヲ著シク危殆ナラシムルカ故ニ原告等ニ對シ該決議ノ無効ナルコトノ確認ヲ求ムル爲  
 本訴ヲ提起シタリトナス仍テ先ツ本件確認訴訟ニ於テ被告等ハ果シテ正當ナル當事者  
 ナリヤ否ニ付キ按スルニ凡ソ確認訴訟ニ於ケル正當ナル被告ハ原告カ果シテ何人ニ對  
 シテ其法律關係ノ存否ヲ確定スルニ付キ法律上ノ利益ヲ有スルヤニ依リテ定マルモノ  
 ニシテ或人カ或法律關係ノ存否ヲ争ヒタルカ爲メニ原告ノ法律上ノ地位ヲ不安ナラシ  
 ムルニ於テハ原告ハ其者ニ對シテ該法律關係ノ存否ヲ確定スルニ付キ法律上ノ利益ヲ  
 有スルモノト謂フヘク換言スレハ其争ニ因リテ原告ニ確認判決ヲ受クヘキ法律上ノ利

益ヲ生セシメタル者ハ即チ確認訴訟ノ正當ナル被告ナリト爲ササルヘカラス今本件ニ  
 於テ被告等カ個人タル資格ニ於テ前掲決議ノ有效ナルコトヲ主張シタリトスルモ該決  
 議ノ株主ナル原告等ヲ羈束スル效力ニ對シテハ些ノ消長ヲ來スコトナク被告等カ取締  
 役又ハ監査役トシテ即チ會社ノ機關トシテ該決議ノ有效ナルコトヲ主張スルニ於テ始  
 メテ原告等ノ法律上ノ地位ヲ不安ナラシムルモノト謂フヘク從テ原告等ハ右會社ニ對  
 シテハ該決議ノ無効ナルコトヲ確定スルニ付キ法律上ノ利益ヲ有スルモ個人タル被告  
 等ニ對シテハ之ヲ確定スヘキ何等ノ法律上ノ利益ヲ有セサルモノト謂フヘク即チ本件  
 確認訴訟ニ於ケル正當ナル被告ハ株式會社東洋信託保證取引所ニシテ被告等ハ其正當  
 ナル當事者タル適格ヲ有セサルモノト爲ササルヘカラス然ラハ被告等ニ對シテ提起シ  
 タル原告等ノ本訴ハ既ニ此點ニ於テ失當ナルヲ免レス仍テ其餘ノ争點ニ付キ判斷スル  
 ヲ須ヒスシテ本訴請求ハ之ヲ棄却スヘク訴訟費用ノ負擔ニ付キ民事訴訟法第二百三十  
 一條第二項第七十二條ヲ適用シ主文ノ如ク判決シタリ。

### 第十五章 株主名簿閲覧請求の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟 給付の訴。
- 2 當事者 原告は株式會社の株主、被告は右會社。
- 3 管轄 民訴總則の規定に従ふ。



- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金百圓(民訴印紙法三條一項)
- 6 貼用印紙 金三圓五十錢(同法二條)
- 7 本訴請求原因に付ては商法一七一條參照。

大正十二年(ハ)第四四五號株主名簿閲覧請求事件 (東京區裁判所大正十二年七月二十六日判決)

原告	大井一哲
同	杉原鏡太郎
同	中平義次
被告	日米信託株式會社

右法律上代理人取締役

金子元三郎

【主文】 當裁判所カ大正十二年六月五日日本件ニ付キ言渡シタル闕席判決ヲ維持ス。故障申立後ノ訴訟費用モ被告ノ負擔トス。

此判決ハ原告ニ於テ保證トシテ金壹百圓宛ヲ供託スルトキハ假ニ執行スルコトヲ得。

【事實】 被告ハ主文掲記ノ闕席判決ニ對シ故障ノ申立ヲ爲シタリ。

原告訴訟代理人ハ被告會社ハ原告等ニ對シ營業時間内ニ於テ被告會社ノ株主名簿ヲ閱覽セシメ且原告等カ右名簿ヲ謄寫スルコトヲ認容スヘシ訴訟費用ハ被告ノ負擔トストノ判決竝ニ保證ヲ條件トスル假執行ノ宣言ヲ求ムル旨申立テ其請求ノ原因トシテ原告等ハ被告會社ノ株主ナルトコロ同會社ノ株主名簿閲覧ノ必要アリテ大正十二年五月一日ヨリ同月十一日マテノ間再三被告會社ニ出頭シ株主名簿ノ閲覧ヲ求メタルモ之ヲ拒絕セラレタルヲ以テ本訴ニ及ヒタリト陳述シ立證トシテ甲第一號證ヲ提出シテ、乙第一、三、七號證ノ成立ヲ認メ其他ノ各乙號證ハ不知ト述ヘタリ。

被告訴訟代理人ハ原告等ノ請求ヲ棄却ストノ判決ヲ求メ答辯トシテ原告等カ株主ニシテ同人等ヨリ株主名簿閲覧ノ要求アリタル事實ハ之ヲ認ムルモ被告會社ハ原告等ノ閲覧要求ヲ理由ナク拒絕シタルモノニアラス被告會社ハ現在七千ノ株主ヲ有シ且前期ノ株主總會ニ於テ減資ヲ決議シタル爲メ各株主ノ株數ニ異動ヲ生シタルノナラス株主ニモ亦大異動ヲ生シ株主名簿ノ加除訂正ヲ要シ又新株券發行ニ伴ヒ株券書換ノ請求續出シ原告等ノ右閲覧申出ノ際ハ執務上必要ノ爲メ該名簿ヲ長時間手放スコト不可能ナル狀況ニ有之依テ原告等ニ對シ其閲覧スヘキ必要ナル部分ノ申出アルニ於テハ執務上遺漏ヲ爲シ當該部分ヲ閲覧セシムヘキ旨ヲ答ヘタルニ原告等ハ株主名簿全部ノ閲覧ヲ要求スルニ付テハ被告會社ノ定款竝ニ内規ノ定ムルトコロニヨリ取締役會長ノ意見ニ基キ執行委員會ニ諮リタル上決定スヘキ事項ナルヲ以テ該手續ヲ經タル上回答スヘキ旨ヲ答ヘ置キタルモノナリ尙株主ハ株主名簿ノ閲覧權アルモ之ヲ謄寫スルノ權利ナシ且

原告等ハ被告會社ヨリ株主名簿閲覧ノ請求ヲ拒絕セラレテ始メテ訴ヲ提起シ得ヘク然ルニ以上述フルカ如ク被告會社ニ於テハ原告等ノ要求ヲ拒絕シタルモノニアラサルヲ以テ本訴ハ不合法ナリト述ヘ立證トシテ乙第一乃至七號證ヲ提出シ證人朝倉傳次郎ノ喚問ヲ求メ甲第一號證ノ成立ヲ認メタリ。

當裁判所ハ職權ヲ以テ原告大井一哲ヲ訊問シタリ。

【理由】 故障ハ適法ナリ。

原告等カ被告會社ノ株主ニシテ大正十二年五月中被告會社ニ對シ株主名簿ノ閲覧ヲ求メタル事實ハ被告ノ認ムルトコロナリ然リ而シテ原告本人大井一哲ノ供述ニ依レハ原告等ハ被告會社ニ對シ株主名簿ノ閲覧ヲ求メタルモノニアラスト抗爭スルモ被告ハ原告等ヘシ被告ハ原告等ノ要求ヲ理由ナク退ケタルモノニアラスト抗爭スルモ被告ハ原告等ノ要求ヲ退ケタル理由トシテ述ヘタル事實全部ヲ假リニ眞實ナリトスルモ斯ノ如キ理由ヲ以テハ未タ原告等ノ株主名簿閲覧ノ要求ヲ拒ムヘキ正當ノ理由ト認メ難シ又原告等カ任意ニ之ヲ謄寫スルカ如キハ株主ニ對シ株主名簿ノ閲覧請求權ヲ認メタル立法ノ精神ニ鑑ミ正當ト謂フヘシサレハ他ノ爭點ノ判斷ヲ俟ツマテモナク被告ハ原告等ニ對シ其營業時間内ニ於テ被告會社ノ株主名簿ヲ閲覧セシメ且原告等カ之ヲ謄寫スルコトヲ認容スヘキ義務アルモノトス仍テ原告等ノ本訴請求ヲ正當ト認メ民事訴訟法第七十二條第一項第二百六十一條前段第五百三條第一號ノ規定ヲ適用シ主文ノ如ク判決ス。

### 第十六章 賣掛代金請求の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、給付の訴。
- 2 當事者 原告は機械の賣主、被告は其の買主で共に商人。
- 3 管轄 民訴總則の規定に従ふ。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金四千七百七十圓(民訴二二條一項)
- 6 貼用印紙 金三十圓(民訴印紙法二條)
- 7 假執行の宣言に付民訴一九六條(舊民訴五〇條一項)

大正六年(ワ)第九二五號賣掛代金請求事件 (東京地方裁判所第二民事部大正七年四月六日判決)

原告 被告

葛原平  
ロルンス、エンド、コンパニー合名會社

右法律上代理人代表社員

エー、エル、マンレイ

【主文】 被告ハ原告ニ對シ金四千七百七十四及之ニ對スル大正六年十月八日ヨリ本件判決執行濟ニ至ルマテ年六分ノ割合ニ依ル損害金ヲ支拂フヘシ。

訴訟費用ハ被告ノ負擔トス。

此判決ハ原告ニ於テ執行前保證トシテ金一千五百圓又ハ之ニ相當スル有價證券ヲ供託スルトキハ假ニ之ヲ執行スルコトヲ得

【事實】 原告訴訟代理人ハ主文第一、二項ト同旨ノ判決並ニ保證ヲ條件トスル假執行ノ宣言ヲ求ムト申立テ其請求ノ原因トシテ原告及被告ハ何レモ商人ニシテ原告ハ明治四十四年二月二十一日米國レミントン機械會社ノ製作ニ係ル製氷機械一臺(附屬品共)ヲ代金八千六百七十四ヲ以テ被告會社ニ賣渡シ被告會社ハ更ニ之ヲ訴外三崎製氷株式會社ニ轉賣セリ而シテ被告會社ヨリ原告ニ對スル代金支拂ノ方法ハ契約證書署名ノ際ニ金九百圓三崎(訴外三崎製氷株式會社所在地)ニ機械到着ノ際金三千圓ヲ支拂ヒ殘額ハ試驗及満足ナル試驗轉ノ後三月目ニ且被告會社カ訴外三崎製氷株式會社ヨリ其代金額ノ支拂ヲ受ケタルトキ支拂フヘキ約ニシテ右代金中金三千九百圓ハ前後二回ニ原告既ニ之ヲ受領シ殘額金四千七百七十圓ニ付テハ大正元年九月四日既ニ機械ノ試驗及満足ナル試驗轉ヲ了シタルニ拘ラス被告會社ハ期限尙ホ到來セサルノ故ヲ以テ其支拂ヲ爲サス然ルニ被告會社ハ一面ニ於テ訴外三崎製氷株式會社ヨリ既ニ金五千五百八十圓ノ辨濟ヲ受ケ其殘額ニ付テハ訴求ノ末勝訴ノ判決ヲ得強制執行ヲ爲シ曩ニ賣渡シタル製氷機械並ニ其附屬品一切ヲ差押ヘ大正六年二月二十八日之ヲ賣賣ニ付シ賣得金二千三百八

十三圓五十錢ノ内ヨリ賣賣費用金七圓九十四錢ヲ差引キ殘額二千三百七十四圓五十六錢ハ辨濟トシテ被告會社之ヲ受領シ隨テ被告會社カ辨濟ヲ受ケタル金額ハ合計金七千九百五十四圓五十六錢ニ達セリ然ルニ訴外三崎製氷株式會社ハ大正五年一月十五日任意解散ノ決議ヲ爲シ爾來引續キ清算中ニシテ其財産ハ全部任意賣却又ハ強制賣賣ニ付セラレ大正六年二月二十八日以後無資産ノ狀態ニ陷レルヲ以テ被告會社カ同會社ヨリ現在以上ニ辨濟ヲ受クルコト能ハサルノ事實ハ右三月二十八日ヲ以テ確定セリ被告會社ハ右ノ如ク訴外三崎製氷株式會社ヨリ本件機械代金ニ付キ既ニ大部分ノ辨濟ヲ受ケ其未タ辨濟ヲ受ケサル小部分ノ殘額ニ付テハ最早辨濟ヲ受クルコト能ハサルノ事實確定セルヲ以テ法律上期限ナルモノノ性質ニ鑑ミ本件賣掛代金四千七百七十圓ノ支拂期限ハ大正六年二月二十八日ヲ以テ到來シタルモノト見ルヲ相當トス仍テ右金額ト之レニ對スル本件訴狀送達ノ翌日以後年六分ノ利率ニ依ル損害金ノ支拂トヲ求ムル爲メ本訴ニ及ヒタル旨演述シ被告ノ主張ニ對シ被告會社カ訴外三崎製氷株式會社ヨリ受領シタル金七千九百五十四圓五十六錢中ニハ機械代金ノ外汽罐其他ノ代金ヲ含ミ機械代金ト其他ノ代金トノ割合カ被告主張ノ如クナルコト並ニ被告會社對三崎製氷株式會社ノ訴訟事件ニ付キ被告會社カ金二千七百七十四圓六十三錢ノ訴訟費用ヲ要シタルコトハ之ヲ爭ハスト陳述シ立證トシテ甲第一號證甲第十二號證一乃至五甲第十三號證一乃至三ヲ提出シ橫濱地方裁判所大正二年(一)第一一六號賣掛代金請求事件訴訟記録ノ取寄ヲ求メ同記録中訴狀ヲ甲第二號證橫濱地方裁判所判決ヲ甲第三號證東京控訴院民事第三部

判決ヲ甲第四號證商業登記簿謄本ヲ甲第五號證人香山角太郎訊問調書ヲ甲第六號證人小池通次郎訊問調書ヲ甲第七號證原告(本件被告)提出準備書面ヲ甲第八號證原告前同提出證據書寫ヲ甲第九號證人宮川長五郎訊問調書ヲ甲第十號證鑑定人星野市造鑑定書ヲ甲第十一號證トシテ提出シ證人内村達次郎、赤坂司、河村尊雄ノ各證言ヲ採用シ乙號證ノ成立ヲ認メ乙第一號證ノ一、二及第三號證ノ一ヲ其利益ニ採用シタリ。

被告訴訟代理人ハ原告ノ請求ヲ棄却ストノ判決ヲ求ムト申立テ答辯トシテ原告及被告カ何レモ商人ナルコト竝ニ被告會社カ明治四十四年二月二十一日原告ヨリ米國レミントン會社製造ノ製氷機(五噸)一臺ヲ附屬品ト共ニ代金八千六百七十圓ニテ買受ケ契約ヲ爲シタル事實ハ之ヲ認ム右賣買契約ハ原告ト被告會社ト協議ノ上其機械ヲ被告會社ヨリ訴外三崎製氷株式會社ヘ賣込ムコトヲ目的トシテ成立シタルモノニシテ被告會社ヨリ原告ニ對スル前示代金ノ支拂方法ハ契約證書署名ト同時ニ内金九百圓及目的物ノ三崎ニ到着ノ際金三千圓ヲ支拂ヒ殘額金四千七百七十圓ハ賣込先ナル三崎製氷株式會社ヨリ被告會社ニ於テ代金全額ノ支拂ヲ受ケタル上ハ該製氷機ノ試験及満足ナル試運轉ヲ了シタルヨリ三ヶ月後ニ於テ支拂フヘキ旨特約ヲ爲シ訴外三崎製氷會社トノ間ニ於ケル代金支拂ノ方法モ右ニ準シテ特約シタリ而シテ被告會社カ訴外三崎製氷株式會社ヘ賣込シタル右製氷機竝ニ汽罐一臺其他附屬品ノ總代金一萬四千七百五十圓ノ内明治四十四年二月中契約ト同時ニ金一千二百五十圓又目的物ノ三崎ニ到着ノ際金四千三百三十圓ノ支拂ヲ受ケタルニ因リ其都度前述ノ約旨ニ從ヒ原告ニ對スル全部ノ代金ヲ兩

度ニ金三千九百圓ノ支拂ヲ爲シタルモ其殘額ハ前記ノ如ク被告會社カ訴外三崎製氷株式會社ヨリ殘額全部ノ支拂ヲ受ケタル場合ニ於テノミ支拂ヲ爲ス責任アルニ止マル然ルニ訴外三崎製氷株式會社ハ其引渡ヲ受ケタル前示製氷機械カ製氷能力ニ缺クルトコロアリ約旨ニ反ストノ理由ヲ以テ被告會社ニ對スル殘代金九千七百七十圓ヲ支拂ハサリシニ因リ止ムヲ得ス原告ハ右會社ニ對シテ大正二年四月中之カ支拂請求ノ訴訟ヲ提起シタル結果控訴及兩度ノ上告ヲ經テ大正六年一月ニ至リ漸ク被告會社勝訴ノ判決確定シタルヲ以テ之ニ基キ強制執行ヲ爲シタルモ請求債權額金壹萬一千四百六十二圓五十錢ニ對シ僅ニ金二千三百七十四圓五十六錢ノ辨濟ヲ得タルノミニシテ其餘ハ債務者無資産ノ爲全ク支拂ヲ受ケルコト能ハサルモノナリ右ノ次第ニシテ被告會社カ三崎製氷株式會社ヨリ支拂ヲ受ケタル金額ハ合計七千九百九十四圓五十六錢トナルモ此内ニハ機械代金ノ外汽罐其他ノ代金ヲ含ミ右金額中ヨリ訴訟事件ニ要シタル總費額金二千七百六十三圓九十錢ヲ控除スルトキハ實收額金五千八百八十三圓九十錢ニ過キス原告トノ約旨ニ依リ被告ハ原告ニ對シテ本件請求ノ債務ヲ負擔セサルノミナラス右實收額ヲ原告ノ債權額ニ割當ルトキハ金二千九百九十三圓三十二錢トナルニモ拘ラス被告ハ既ニ金三千九百圓ヲ支拂ヒタルカ故ニ金九百圓餘ハ支拂過剩トナレリ尙原告ヨリ引渡ヲ受ケタル本件機械ノ試験及満足ナル試運轉ヲ了シタルコトハ本訴ニ於テハ之ヲ爭フ旨陳述シ立證トシテ乙第一號證ノ一、二第二號證ノ一乃至七ヲ提出シ取寄記録中ノ上告審判決ヲ乙第三號證ノ一東京控訴院民事第一部判決ヲ同號證ノ二證人吉川澄三訊問調書ヲ同

號證ノ三原告(本件被告)提出證據書狀寫ヲ同號證ノ四トシテ提出シ甲號各證ノ成立ヲ認メ甲第一第四第十號證及同第十三號證ノ三並證人赤坂東司ノ證言ヲ利益ニ援用シタリ。

【理由】本件當事者間ニ原告主張ノ如キ目的物ニ付キ其主張ノ如キ代金額ノ定メニテ賣買契約成立シ被告會社ハ更ニ之ヲ汽鐘其他ノ附屬品ト共ニ訴外三崎製氷株式會社ニ賣渡シタルコト並ニ本件賣買代金中三千九百圓ノ支拂アリタル事ハ當事者間ニ爭ナキ事實ナリ而シテ其殘代金四千七百七十圓ノ支拂ニ付テハ本件契約證書タル甲第一號證ニ據レハ被告會社カ訴外三崎製氷株式會社ヨリ金額ノ支拂ヲ受ケタル上ハ機械ノ試験及満足ナル試運轉ヲ經タル後三ヶ月日 (Three months after test and satisfactory run providing receive full payment) ニ支拂フヘキ約定ナリシコト明カナリ依テ右機械ノ試験及満足ナル試運轉ヲ經タリヤ否ヤ及被告會社カ訴外三崎製氷株式會社ヨリ其代金ノ支拂ヲ受ケタリヤ否ヤヲ案スルニ乙第三號證ノ三證人吉川潛三訊問調書ニ據レハ原告カ本件賣買契約ニ基キ引渡シタル機械ハ「レミント」會社ノ製作ニ係ル新規機械ニシテ本件契約ニ適合シ大正元年八月中三崎製氷株式會社ニ於テ試験及満足ナル試運轉ヲ終リタルコトヲ認ムヘク然ルニ被告會社カ未タ訴外三崎製氷株式會社ヨリ代金全額ノ支拂ヲ受ケス同會社ハ目下清算中ニシテ其資産ナク殘代金ノ支拂ヲ受ケ能ハサルコトノ確實ナルコトハ當事者間ニ爭ナキ事實ナリ被告ハ前示甲第一號證契約書ノ殘代金支拂ニ關スル條項ハ一ノ條件ヲ定メタルモノニシテ被告會社ノ訴外三崎製氷株式會社ヨリ殘代金全部ノ支拂ヲ受ケタル場合ニ於テノミ支拂ヲ爲スヘキ責アルニ止マルト主張スレトモ甲第十一號證

(鑑定人星野市造鑑定書)ニ據レハ本件契約代金ハ其當時ニ於ケル機械ノ價額ニ比シ毫モ高價ニアラサルコトヲ知り得ルノミナラス本件契約ニ際シ當事者カ機械ノ能力及三崎製氷株式會社ノ支拂能力ニ付キ疑惑ヲ懷キタル形跡ナキニ徴スレハ右甲第一號證ノ條項ハ之ヲ以テ本件殘代金支拂義務ノ發生スルヤ否ヤヲ其所定ノ如キ到來スルコトノ不確定ナル事實ノ發生ニ繫ラシメタル條件ヲ約シタルモノト解スルヨリ寧ろ其所定ノ事項ヲ以テ其到來スル時間ハ不確定ナルモノモ其到來スルコトハ確的ノ事實ナリトシ其事實ノ發生シタルトキ本件殘代金ヲ支拂フヘキ旨ノ期限ヲ定メタルモノト認ムルヲ相當トス被告ノ提出援用ニ係ル各證據ニ付テハ逐次説明スルマテモナク以上確定ノ資料ニ供シタル各證據ニ對スル右認定ヲ覆スニ足ラス而シテ如斯性質上到來スルヤ否ヤ不確定ナル事實ヲ當事者カ到來スルコト確定ノ事實ナリトシ其事實ノ發生ノ不能ナルコトカ確實トナリタルトキニ於テモ亦期限到來スルモノト爲スヲ以テ事理ニ適スルカ故ニ被告會社カ訴外三崎製氷株式會社ヨリ殘代金ノ支拂ヲ受ケ能ハサルコトノ確定シタル以上ハ本件殘代金支拂ノ期限既ニ到來シタルモノト謂ハサルヘカラス而シテ本件當事者雙方カ商人ナルコトハ爭ナキ點ナルヲ以テ本件賣買ハ當事者雙方ノ爲メ商行爲ト認ムヘキカ故ニ本件殘代金及之ニ對スル本件訴狀送達ノ翌日以後ノ年六分ノ商事法定利率ニ依ル損害金ノ支拂ヲ求ムル原告ノ本訴請求ハ全部理由アルモノト認ム依テ訴訟費用ノ負擔ニ付キ民事訴訟法第七十二條第一項假執行宣言ニ付キ同法第五百三條第一號ヲ適用シ主文ノ如ク判決シタリ。

### 第十七章 賣買契約履行請求並に履行不能の場合に於ける損害金請求の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、給付の訴。
- 2 當事者 原告は物の買主、被告は賣主。
- 3 管轄 民訴總則の規定に従ふ。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 四萬一千四百七十五圓(民訴二二條一項)
- 6 貼用印紙 30圓+3圓×37=141圓(民訴印紙法二條二編四章其一5參照)

大正五年(ワ)第一〇七號契約履行請求事件 (大阪地方裁判所第三民事部大正六年五月三十日判決)

原告

大阪アルカリ株式會社

右法律上代理人取締役

藤江章夫

被告

合名會社吉川久七商店

右法律上代理人代表社員

吉川久七

【主文】 被告ハ原告ヨリ壹萬參千八百貳拾五圓ヲ受取リ外國製グッド、グレー硫酸安母尼亞(窒素二十度以上)一百噸ヲ原告ニ引渡スヘシ。  
原告其餘ノ請求ハ之ヲ棄却ス。  
訴訟費用ハ之ヲ五分シ其四ヲ原告ノ負擔トシ其一ヲ被告ノ負擔トス。  
本判決ハ原告ニ於テ保證トシテ金四千五百圓ヲ供託スルトキハ原告勝訴ノ部分ニ限り假ニ執行スルコトヲ得。

【事實】 原告訴訟代理人ハ被告ハ原告ニ對シ金四萬一千四百七十五圓ト引換ニ外國製グッド、グレー硫酸安母尼亞(窒素二十度以上)三百噸ヲ引渡スヘシ若シ之カ引渡ヲ爲サス若クハ爲シ能ハサルトキハ損害金壹萬九千四百貳拾五圓及之ニ對スル本件訴狀送達ノ翌日ヨリ判決執行濟ニ至ルマテノ年六分ノ利息ヲ支拂フヘシ訴訟費用ハ被告ノ負擔トストノ判決並ニ保證ヲ條件トスル假執行ノ宣言ヲ求ムル旨一定ノ申立ヲ爲シ其請求ノ原因タル事實トシテ原告ハ大正三年三月上旬被告ニ對シ甲第壹號證ノ通知書記載ノ如ク外國製グッド、グレー安母尼亞(窒素二十度以上)五百噸ヲ一噸ノ代金百三十八圓二十五錢替ニテ買受クヘキニ付キ外國ヨリ輸入ノ上賣渡サンコトヲ申込ミ被告ハ之ヲ承諾シタリ而シテ右物件ハ大正三年四、五、六、七、八月ノ五回ニ積出シ神戸港著船ノ上本船ニテ受渡ヲ爲スヘク代金ハ入船當日ヨリ六十日サイドノ約束手形ニテ支拂ヲ爲スヘキコトヲ

契約シタリ然ルニ右四、五月積出ノ分二百噸ハ既ニ其引渡ヲ受ケ代金ハ前示ノ如キ約束手形ヲ以テ支拂チ了シタルモ六月以後積出ノ分三百噸ハ被告ニ於テ右約旨ニ基ク引渡義務ヲ履行セサルニ依リ大正三年三月二十四日十日ノ期間ヲ定メテ之カ履行ヲ催告シタルモ被告ハ故ナク之ニ應セス爾來其義務ヲ履行セサルニ付キ本訴請求ニ及ヒタリ尙前記入船當日ノ意味ハ入船ノ何日ナリヤ被告ノ通知ヲ待ツニアラサレハ之ヲ知ルチ得サルヲ以テ引渡通知ノ日ト解スルチ至當トスヘク原告ハ引渡通知ノ日ヨリ六十日サイドノ約束手形ヲ提供スレハ本訴請求ノ物件ノ引渡ヲ求メ得ヘキ次第ナルモ特ニ期間ノ利益ヲ拋棄シテ現金引換ニ被告ノ引渡義務ノ履行ヲ求ムルモノナリ而シテ右物件ノ本訴提起當時ノ時價ハ一噸金二百三圓以上ニ騰貴セルヲ以テ被告ニ於テ該物件ノ引渡ヲ爲サス又爲シ能ハサルトキハ原告ハ前記約定代金トノ差額一噸ニ付キ六十七圓七十五錢三百噸合計金一萬九千四百二十五圓ノ損害ヲ被ル次第ナルニ依リ之カ賠償ヲ併セ請求スル旨陳述シ被告ノ答辯ニ對シ(一)大正三年八月十一日被告主張ノ如ク同年六月積出ノ分百噸ノ入船通知アリシコトハ之ヲ認ム然レトモ本件契約ニ於ケル代金支拂方法カ被告主張ノ如ク現金日歩引又ハ六十日サイドノ約束手形若クハ爲替手形ニテ爲ス約ナルコトハ否認ス原告問ニ於テハ從來六十日サイドノ約束手形ニテ取引シ來タレルモノニシテ六十日サイドトハ買主タル原告ニ與ヘラレタル期限ノ利益ニシテ賣主タル被告ニ於テ溢ニ之ヲ奪フコトヲ得サルモノナルカ故ニ現金引換ニ前記ノ百噸ヲ引取ルヘキ旨ノ同年八月十一日被告ノ催告ハ不適法ナリ當時ニ於ケル原告ノ財産狀態カ被告

主張ノ如クナリシコトハ之ヲ認メス(二)本件契約カ暗黙ニ合意解約セラレタルモノナリトノ被告ノ主張ハ全然之ヲ否認ス被告ハ同年七月八月積出ノ分ニ對シテハ入船ノ通知スラ之ヲ爲ササリシモノナリ(三)甲第一號證末尾記載ノ約款ハ原告カ引取義務ニ違背シタル場合ニ於テ被告カ商法ノ規定ニ依ラスシテ任意物件ヲ他ニ賣却シ得ヘク原告ハ再ヒ其物ノ引渡ヲ請求シ得サルノ趣旨ニ過キス而モ原告ニ毫モ引取義務違背ノ事實ナシ(四)大正四年三月二十四日原告カ爲シタル催告ニ對シ同年四月一日被告ヨリ被告主張ノ如キ催告アリタルコトハ之ヲ認ム然レトモ此催告モ亦前記ノ如ク代金引換ニ物件ヲ引取ルヘキ旨ノ催告ニシテ約旨ニ反スルノミナラス催告期間短キニ失シ不適法ナリ從テ此催告ニ應シテ物件ヲ引取ラサルカ爲メ契約ヲ有效ニ解除セラレタリトノ被告ノ主張ハ不當ナリ又被告主張ノ如ク右催告當時物件ノ引渡準備アリタル事實ハ之ヲ認メス又本船渡ノ約定アルトキハ買主ハ賣主ヨリ入船通知ヲ受クルト共ニ解船ヲ以テ船側ヨリ物件ヲ引取り同時ニ代金ノ支拂ヲ爲スヲ本件ノ如キ取引ニ於ケル一般慣習トスルコトハ認ムルモ被告主張ノ如キ習慣ノ存在スルコトハ否認ス(五)同年八月積出ノ分百噸ハ汽船ペンモーア號ニ積載シテ運送シ來リタルコト又該物件ノ引渡義務不能ニ歸シタリトノ事實ハ之ヲ認メス尤モ本訴物件ノ運送ノ途中ニ於テ不可抗力ニ因リテ生シタル一切ノ損害ハ被告共責ニ任セサルコトハ甲第一號證記載ノ約款通ナリト述ヘ立證トシテ甲第一、二號證第三、四號證ノ各一、二第五乃至第九號證第十第十一號證ノ各一、二ヲ提出シ乙第一、二號證乙第三號ノ一、二、乙第六號證ノ一、乙第十一、十二、十七、十八號證ノ成立ヲ認メ乙第

六號證ノ二、乙第十三號證ヲ否認シ其餘ノ乙號證ニ對シ不知ヲ以テ答ヘ乙第二、第十七、第十八號證ヲ利益ニ授用シタリ。

被告訴訟代理人ハ原告ノ請求ハ之ヲ棄却ス訴訟費用ハ原告ノ負擔トストノ判決ヲ求ムト申立テ答辯トシテ被告カ原告ト甲第一號證記載ノ如キ硫酸安母尼亞ノ賣買契約ヲ締結シタルコト(但同號證記載ノ入船當日ヨリ六十日サイドハ原告主張ノ如ク引渡シ通知ノ日ヨリ六十日サイドノ意ニアラス)右約旨ニ基キ原告主張ノ大正三年四月及五月積出ノ分二百噸ノ引渡ヲ了セルコト本訴提起當時ニ於ケル本訴物件ノ價格カ原告ノ主張ノ如クナルコトハ之ヲ認ム然レトモ(一)同年六月積出ノ分百噸ハ同年八月十日頃入船シタルヲ以テ被告ハ電話及同月十一日附書面ヲ以テ原告ニ其旨ヲ通知シ且同月十五日マテニ代金引換ニ物件ヲ引取ルヘキコトヲ催告シ若シ之ヲ履行セサルトキハ契約ハ當然解除セララルヘキ旨ヲ通知シタルニ拘ハラヌ原告ニ於テ右期間内ニ之カ履行ヲ爲ササルニ依リ木件契約ハ全部解除セラレタルモノナリ而シテ原告被告間ニ於テ從來六十日サイドノ手形ヲ以テ取引ヲ爲シ來リタル事實アルモ甲第一號證ニハ代金受取方法トシテ入船當日ヨリ六十日サイドト記載シアルハ現金日歩引若クハ入船當日ヨリ六十日サイドノ約束手形又ハ爲替手形ノ意ニシテ現金取引ト手形取引トハ賣主ニ選擇權アルモノナリ而シテ現金ヲ要求スル場合ニハ六十日間ノ日歩ヲ控除スヘキ約旨ナリ假ニ入船當日ヨリ六十日サイドトアルハ單ニ手形取引ノ趣意ナリトスルモ本件ノ如ク本國ヨリ輸入ノ上物件ヲ引渡スヘキ約款ニ於テハ物件到着ノ際買主カ支拂ヲ停止シタルカ又ハ支拂停

止ト同一ノ狀態ニアルコト明カナル場合ニハ賣主ハ現金引換ニアラサレハ物件ヲ引渡サス又買主モ其引渡ヲ請求セサル商取引上ノ慣例アリ然ルニ大正三年八月十日頃被告ハ原告ニ對シ商取引上五萬五千餘圓ノ手形債權ヲ有シタリシ處原告ハ經濟界不振ノ爲メ又原告ノ取引銀行タリシ北濱銀行破綻ノ爲メ甚シク窮乏ニ陥リ右手形ノ支拂期限ニ至ルモ之カ支拂ヲ爲サス不渡處分ヲ受ケントスルニ至リシモ被告ノ懇願ヲ容レ數回手形ノ繼續ヲ承諾シタルニ依リ僅ニ不渡處分ヲ免カレ得タル營業狀態ナリシカ故ニ被告カ現金引換ニ物件ノ引取方ヲ催告シタルハ正當ナリ(二)假ニ右契約解除カ適法ニアラストスルモ原告ハ前記入船ノ通知ヲ受ケタルニ拘ハラヌ前記五萬五千餘圓ノ債務ヲ完済シタル大正四年三月二十四日ニ至ルマテ被告ニ對シ何等ノ申出テヲ爲サス而シテ本件安母尼亞ハ時日ノ經過ト共ニ甚シク其量ヲ減シ又硫酸ノ作用ニ因リテ其包裝ヲ腐蝕シ多大ノ損害ヲ生スルモノナリ本件ハ不特定物ノ賣買ナリト雖モ既ニ本國ヨリ輸入ノ上引渡ノ準備ヲ爲シ之ヲ原告ニ通知セル上ハ物件ハ特定スルカ故ニ其物ニ生シタル損害ハ原告ノ負擔ニ歸スヘキモノナルヲ以テ當時原告ニ之ヲ引取ルノ意思アリ又前示被告ノ爲シタル催告ニ異議アリシトセハ原告ハ被告ニ交渉ノ上速ニ物件ノ引渡ヲ求メ此ノ如キ損害ヲ避クヘキヲ普通トスルニ拘ハラヌ被告ノ右催告後八ヶ月間ノ久シキニ亘リ何等ノ申出テヲ爲ササリシハ原告ニ於テ被告ノ該催告ヲ暗黙ニ承諾シタルモノニシテ本件契約ハ合意解約セラレタルモノナリ但シ大正三年七月、八月積出シ分ニ付キ原告ニ對シ入船通知ヲ爲ササリシコトハ之ヲ認ム(三)假ニ右合意解約ノ事實ナシトスルモ甲第一



號證末尾記載ノ約款ニ受渡シ期日ニ荷物御引取無之時ハ當店ニ於テ之ヲ隨意ニ處分致シトアル處分ハ原告カ受渡期日ニ物件ヲ引取ラサルトキハ被告ハ契約ヲ解除シ得ヘキコトヲ意味スルカ故ニ大正三年六月發出ノ分百噸ハ原告ニ於テ入船通知ノ受アナカラ之ヲ引取ラサリシモノナレハ前記被告ノナシタル契約解除ノ通知ハ有效ナリ假令然ラストスルモ右處分ノ意味ハ被告ニ於テ商法ノ規定ニ因ラスシテ物件ヲ賣却シ得ル權利ヲ認メタルモノニシテ此ノ場合ニハ該物件ヲ特定物同様ニ看做シ原告ニ於テ再ヒ之カ引渡ヲ請求シ得サルモノナリ然ルニ右百噸ハ原告ニ於テ引取ラサルカ爲メ既ニ之ヲ他ニ賣却シタルニ依リ最早被告ニ之カ引渡義務ナキモノナリ(四)尙假ニ本件契約ハ大正四年三月二十四日迄存続シタリトスルモ原告ハ同日被告ニ對シ向十日間内ニ物件ノ引渡ヲ催告シ若シ引渡ササルトキハ契約ヲ解除スヘキ旨通知シタルニ依リ被告ハ契約ノ存否ハ暫ク措キ爭ヲ避クル爲メ同年三月末訴外米井商店ヨリ約旨ニ適合スル物件二百噸ヲ買入レ同年四月一日之カ引渡準備ヲ整ヘタルト同時ニ原告ニ對シ同月二日午前十一時神戸市高濱所在東京倉庫及同市兵庫所在森六郎商店倉庫ニ代金ヲ持參シ物件ヲ引取ルヘク同時刻ニ之ヲ履行セサルトキハ將來一切ノ關係無キコトヲ通知シタリ然ルニ原告ハ之カ履行ヲ爲ササルニ因リ本件契約ハ全然解除セラレタルモノナリ而シテ原告ハ期間ヲ定メテ引渡ヲ求メタルモノナルカ故ニ其期間内ニ何時ニテモ代金ヲ支拂ヒ物品ヲ引取ルノ準備アリシモノト見ルヘク被告ノ催告書ハ右四月一日午後三時過ぎ速達郵便ヲ以テ發送シタルモノナレハ同日夕刻頃マテニハ原告ニ到着シタルヘキニ依リ該催

告ハ毫モ違法ノ點ナキノミナラス原告ハ入船通知ヲ受ケタル後自己ノ債務ノ履行ヲ提供セスシテ六十日經過シタルモノナルカ故ニ假令本件契約ニ於ケル代金支拂方法カ六十日サイドノ手形ヲ以テスル約旨ナリトスルモ物件ノ取引ニ際シ現金ノ支拂ヲ要スルコト明カナルニ依リ被告カ右催告ノ際現金ノ請求ヲ求メタルハ正當ナリ尙本件物件ノ受渡方法ハ本船渡ノ契約ニシテ買主カ賣主ヨリ入船通知ヲ受ケタルトキハ直ニ本船ヨリ引取り之ト同時ニ代金ヲ賣主ニ交付スヘキモノナリ若シ買主カ本船ヨリ引取ラサルトキハ賣主ハ波止場ニ荷揚ヲ爲シタル上受渡ヲ爲スコトヲ得ヘク買主カ尙引取ヲ遅延スル場合ニハ賣主ハ物件ヲ保管スル爲メ附近ノ倉庫ニ寄託シ倉庫ニ於テ受渡ヲ爲スコトヲ得ヘキ商習慣アリ本件契約モ亦此趣旨ニ於テ爲サレタルモノナルカ故ニ前記倉庫ニ於テ受渡ヲ爲スヘキ旨ノ被告ノ催告亦不當ニアラス(五大正三年八月發出ノ分百噸ハ汽船ハンモリア號ニテ運送中同汽船ハ獨逸巡洋艦エムデン號ニ擊沈セラレタルニ依リ履行不能ニ歸シ被告ハ之カ引渡義務ナキモノナリ以上ノ次第ナルヲ以テ本訴請求ニ應シ難シト陳述シ立證トシテ乙第一號第二號第三乃至第十號證ノ各一、二第十一乃至第十九號證ノ一、二第二十一號證ヲ提出シ證人中島鐵造住野庄三郎福森憲一ノ訊問ヲ求メ鑑定ノ申出ヲ爲シ甲各號證ノ成立ヲ認メタリ、

【理由】大正三年三月上旬被告カ原告ニ對シ成立ニ爭ヒナキ甲第一號證ノ記載ノ如ク外國製グッドグレ一硫酸亞母尼亞(窒素二十度以上)五百噸ヲ外國ヨリ輸入ノ上一噸代金百三十八圓二十五錢替ニテ賣渡スヘク該物件ハ同年四、五、六、七、八月ノ五回ニ百噸宛ヲ積

出シ神戸港著船ノ上本船ニテ代金引換ニ之ヲ引渡スヘキ旨ノ契約ヲ締結シタルコト右  
四、五月積出ノ分二百噸ハ既ニ其契約ノ履行ヲ了シタルコトハ當事者間ニ争ヒナキ事實  
ニ屬ス。

第一、大正三年一月十一日被告カ原告ニ對シ右六月積出ノ分百噸入荷シタルニ依リ同月  
十五日迄神戸港ニ於テ現金引換ニ引取ルヘク若シ之ヲ履行セサルトキハ契約ハ當然解  
除サレタルモノト承諾セラレタキ旨ノ通知ヲ發シタルトコロ原告カ此通知ニ應シ該物  
件ヲ引取ラサリシコトハ當事者間ニ争ヒナキトコロニシテ原告ハ右通知ハ約旨ニ反シ  
不當ナリト主張シ被告ハ原告ノ右不履行ニ依リ本件契約ハ全部解除セラレタルモノナ  
リト抗爭スルニ依リ之ヲ按スルニ(イ)被告ハ甲第一號證ニ代金受取方法トシテ入船當日  
ヨリ六十日サイドト記載シアルハ現金日歩引若クハ入船當日ヨリ六十日サイドノ約束  
手形又ハ爲替手形ノ意ニシテ現金引取ト手形引取トハ賣主タル被告ニ其選擇權アルモ  
ノナリト主張スレトモ成立ニ争ヒナキ甲第七號證乙第三號證ノ一ニ依レハ本件以前當  
事者間ニ於テ代金受取方法ニ付キ現金日歩引若クハ神戸入港本船ニテ引渡當日ヨリ六  
十日サイド付キ約束手形又ハ爲替手形ト明記シテ取引セル事實明カナルカ故ニ單ニ入  
船當日ヨリ六十日サイドト記載セルノミニテ他ニ何等ノ記載ナキ甲第一號證ニ於テモ  
亦被告主張ノ如キ意味ヲ有スルモノナリトセハ容易ニ首肯シ難ク乙第七乃至第十號證  
ノ各一、二ハ何レモ被告ト訴外人間ノ取引ニ關スルモノナルカ故ニ之ヲ以テ直ニ當事者  
間ノ取引モ亦之ト同一ナリト爲スコトヲ得サルヲ以テ結局原告主張ノ如ク右ハ入船當

日ヨリ六十日サイドノ手形取引ノ意ナリト認定スルノ外ナキモノナリトス假ニ被告主  
張ノ如ク右ハ現金日歩引カ又ハ入船當日ヨリ六十日サイドノ手形取引ノ意味ナリトス  
ルモ這ハ寧ろ賣主タル原告ノ爲メニ認メタルモノニシテ之ヲ買主ノ利益ニ解シ原告ニ  
現金取引ト手形取引トノ選擇權アルモノト認ムルヲ相當トスルカ故ニ現金引換ニ物件  
ヲ引取ルヘシトノ被告ノ前記催告ハ約旨ニ反スル不當ノモノニシテ原告カ之ニ應セサ  
リシトテ毫モ原告ニ不履行ノ責ナキモノト謂フヘシ(ロ)被告ハ假ニ右ハ入船當日ヨリ六  
十日サイドノ手形取引ノ趣旨ナリトスルモ買主カ支拂停止ノ状態ニアルカ如キ場合ニ  
ハ賣主ハ現金引換ニアラサレハ物件ノ引渡ヲ爲スヲ要セサル商習慣アリテ原告ハ當時  
支拂停止ニ願ヘル營業状態ナリシカ故ニ被告カ現金引換ニ物件ノ取引ヲ催告シタリシ  
ハ正當ナリト主張スレトモ斯カル商習慣ノ有無ハ暫ク之ヲ措キ乙第十一第十二號證ニ  
依リテハ當時ニ於ケル原告ノ營業状態カ被告主張ノ如ク危險ニ陥リタリトハ到底之ヲ  
認メ難シ此點ニ關シ被告ハ證人正原兼松ノ訊問ヲ申請シタレトモ其申請書ニ記載セル  
訊問事項ニ付キ之ヲ見ルニ假令其結果ヲ得タルモノトスルモ之ニ依リ原告カ本訴物件  
百噸ノ代金ヲ支拂ヒ得サルモノト爲シ得サルコト明カナルノミナラス成立ニ争ヒナキ  
甲第六號證ニ依レハ原告ノ營業状態カ被告主張ノ如キモノニ非サリシ事實ヲ推認シ得  
ルカ故ニ前記證人申請ハ其必要ナキモノト認メ却下シタリ然ラハ則チ右百噸ニ付キ被  
告ニ之カ引渡準備アリタルト否トヲ問ハス前記催告ニ基キ本件契約カ全部解除セラレ  
タルモノト爲ス被告ノ抗辯ハ理由ナシ。

第二、次ニ被告ハ縦シヤ右解除カ適法ナラストスルモ原告ハ前記ノ如ク入船ノ通知ヲ受ケタルニ拘ハラズ大正四年三月十四日ニ至ルマテ約八ヶ月間ニ亘リ被告ニ對シ何等其引渡ヲ求メサリシハ原告ニ於テ前示催告ヲ暗黙ニ承諾シタルモノニシテ本件契約ハ合意上全部解除セラレタルモノナリト主張スレトモ物件ノ引取遅延ノ爲メ生シタル損害ハ買主自ラ之ヲ負擔スヘキハ勿論ナルモ買主ハ物件取引ノ義務ナキモノナルカ故ニ原告カ本訴物件ノ引取ヲ遅延シタル一事ヲ指シ之ヲ以テ原告カ被告ノ催告ヲ暗黙ニ承認シ本件契約ハ合意上全部解除セラレタルモノト爲スコトヲ得サルヤ多言ヲ要セス依テ本抗辯ハ取ルニ足ラス。

第三、被告ハ假ニ右合意解約ノ事實ナシトスルモ大正三年六月積出シノ分百噸ハ原告ニ於テ入船通知ヲ受ケナカラ之ヲ引取ラサリシヲ以テ被告ハ甲第一號證末尾記載ノ約款ニ依リ最早之カ引取義務ナシト抗爭スルニ因リ之ヲ按スルニ同號證記載ノ處分ナル語ノ意義ニ付テハ當事者間ニ争ノ存スル處ナルモ該處分ハ引取義務ノ違反ヲ前提トスルコト同號證記載自體ニ依リ固ヨリ明カニシテ前述ノ如ク原告ニ毫モ引取義務違反ノ事實ナキカ故ニ本抗辯モ亦之ヲ採用スルコトヲ得ス。

第四、大正四年三月二十四日原告カ被告ニ對シ本訴引渡未了物件三百噸ヲ向十日間内ニ引渡スヘク之ヲ履行セサルトキハ契約ヲ解除スヘキ旨ヲ催告シ之ニ對シ同年四月一日本訴物件ノ内大正三年六月、七月積出ノ分二百噸ヲ引渡スヘキニ付キ同月二日午前十一時神戸市高濱東京倉庫及同市兵庫森六郎商店神戸支店濱へ現金持參ノ上引取ラレ度之ヲ

履行セサルトキハ契約ヲ解除スヘキ旨ノ通知ヲ爲シタルコトハ當事者間ニ争ナキ事實ナリイ被告ハ右被告ノ催告ニ從ヒ原告ニ於テ該物件ヲ引取ラサリシニ依リ本件契約ハ全然解除セラレタリト主張スレトモ右七月積出ノ分百噸ニ付テハ當サニ被告カ原告ニ對シ入船ノ通知ヲ爲ササリシコト被告ノ認メテ争ハサル所ニシテ被告ヨリ入船通知ナキ限り原告ハ入船ノ事實ヲ知り得サルカ故ニ引渡ヲ爲スヘキ通知ヲ以テ入船通知ト看做スチ相當トスルノミナラス既ニ説述セルカ如ク本件契約ニ於ケル代金受取方法ハ入船當日ヨリ六十日サイドノ手形取引ト解スヘキモノナルニ依リ被告カ現金引換ニ該物件ヲ引取ルヘキ旨催告シタルハ約旨ニ反スル不當ノモノナルヲ以テ被告ニ於テ之カ引渡準備アリタルト否トヲ問ハス此催告ニ基キ原告カ物件ヲ引取ラサルヲ理由トシ契約ヲ解除スヘキモノニアラス而シテ原告ハ入船當日ヨリ六十日サイドノ手形取引ノ利益ヲ拋棄シテ現金引換ニ本訴請求ヲ爲スモノナルヲ以テ入船當日ヨリトハ原告主張ノ如ク引渡通知ノ日ヨリノ意義ニ解スヘキヤ否ヤノ争點ニ付キ判斷スル迄モナク右七月積出シノ分百噸ニ對スル原告ノ請求ハ正當ニシテ之ヲ認容スヘキモノナリトス(ロ)然レトモ六月積出ノ分百噸ニ付テハ成立ニ争ナキ甲第二號證ニ依リ明カナルカ如ク原告ハ大正三年八月十一日被告ヨリ入船通知ヲ受ケタルニ拘ハラズ其後自己ノ責務タル入船當日ヨリ六十日サイドノ約束手形ヲ被告ニ提供シテ之カ引渡ヲ求メタル形跡ノ見ルヘキモノナク而モ大正四年四月一日被告ヨリ右ノ如キ催告ヲ受ケタル當時ハ右入船通知後既ニ六十日ヲ經過セルコト明瞭ナルニ依リ該物件ノ引渡ニ際シ現金ノ支拂ヲ要スルコ

ト當然ノ事理ニシテ被告カ現金引換ニ物件ノ引取ヲ催告シタルハ毫モ不當ノ廉ナキモノトス而シテ證人中島鐵造福森憲一ノ證言ニ依リ真正ニ成立シタリト認ムル乙第十九號證第二十號證ノ一、二第二十一號證ヲ綜合スレハ被告ハ原告ノ右催告ニ依リ大正四年三月二十九日訴外米井商店ヨリ本訴物件ニ適合スル硫酸安母尼亞二百噸ヲ買入レ内百噸ハ同市兵庫森六郎商店神戸支店濱ニ於テ之カ引渡準備ヲ整ヘ居リタルニ拘ハラス原告ハ被告カ指定シタル同年四月二日午前十一時ヲ過クルモ遂ニ同所ニ來リテ之ヲ引取ラサリシコトヲ認ムルニ十分ナルヲ以テ原告ハ此不履行ニ因リ右六月積出ノ分百噸ニ付キ被告ヨリ適法ニ契約ヲ解除セラレタルモノニシテ被告ハ最早之カ引渡義務ナキモノナリトス原告ハ右被告ノ催告ハ催告期間短キニ失シ不適法ナリト主張スレトモ原告ハ自ラ期間ヲ定メテ本訴物件ノ引渡ヲ求メタルモノナルカ故ニ其期間内ニハ何時ニテモ代金ヲ支拂ヒ物件ヲ引取り得ヘキ準備アリタルモノト看做スヲ相當トスヘク成立ニ争ナキ乙第三號證ノ一ノ郵便物受領書竝ニ其日附印ニ依レハ被告ノ右催告書ハ大正四年四月一日午後三時ヨリ四時マテノ間ニ速達郵便ヲ以テ大阪市淀屋橋郵便局ヨリ原告ニ送達サレタルコト明白ニシテ更ニ同號證ノ郵便物配達證明書ニ依レハ遅クトモ該催告書ハ同日夕刻マテニ原告ニ到達シタルモノト認メ得ヘキヲ以テ翌二日午前十一時神戸市ノ前記倉庫ニ於テ物件ヲ引渡スヘキ旨ノ催告ハ取引上相當ノ期間ナリト謂フヲ妨ケサルモノトス又原告ハ本訴物件ノ引渡場所ハ前記倉庫ニアラスト主張スレトモ本訴物件ノ受渡方法ハ本船渡ノ約定ニシテ買主カ賣主ヨリ入船通知ヲ受ケタル時ハ直ニ本

船ノ船側ヨリ解船ヲ以テ之ヲ引取リ之ト同時ニ代金ノ支拂ヲ爲スヘキ慣習アルコトハ當事者間ニ争ナク鑑定人岩井豐治ノ供述ニ依レハ本船ハ一定ノ時日到來スレハ出帆スヘキモノナルニ依リ本船出帆以前ニ於テ買主カ物件ヲ引取ラサルトキハ止ムヲ得ス賣主ニ於テ買主ノ費用ヲ以テ解船ニ引取り置ク慣習アルコトヲ認ムルニ足ル而シテ此ノ如キ場合ニ於テ被告主張ノ如ク賣主ハ物件ヲ波止場ニ荷揚シタル上受渡ヲ爲スコトヲ得ヘク買主カ尙引取ヲ遅延スルトキハ賣主ハ物件ヲ保管スル爲メ附近ノ倉庫ニ之ヲ寄託シ該倉庫ニ於テ受渡シテ爲スコトヲ得ヘキ慣習ノ存在スルコトハ同鑑定人ノ供述ニ依リテハ之ヲ認メ難シト雖モ斯ノ如キ場合ニ於テ更ニ賣主カ物件ヲ買主方ニ持參シタル上其引渡ヲ爲スカ如キ慣習ノナキコトモ亦同鑑定人ノ供述ニ依リ明白ナルカ故ニ賣主カ被告主張ノ如キ處置ヲ採ルコトハ斯ル取引ノ實情ニ顧ミ洵ニ相當ノ處置ト謂フヘシ本件ニ於テ原告カ大正三年八月十一日入船通知ヲ受ケナカラ爾來大正四年三月二十四日ニ至ルマテ之カ引取方ノ申出テスラ爲ササリシモノナルヲ以テ被告カ前記倉庫ニ於テ引渡準備ヲ爲シタルハ實ニ止ムヲ得サルニ出テタル處置ニシテ毫モ不當ノ點ナキモノトス依テ契約上ノ引渡場所ハ本船ナルカ故ニ該倉庫ニ於テ物件ヲ引取ルヘキ義務ナシトノ原告ノ抗辯ハ其理由ナシ。

第五、真正ニ成立シタリト認ムル乙第十四第十五第四號證ヲ綜合スルトキハ被告ハ大正三年三月上旬原告ト木件契約ヲ締結スルヤ直ニグラスゴ市アレキサンダークロス商會ト本訴物件五百噸ノ賣買契約ヲ爲シ同商會ハ本年八月積出ノ分百噸ノ物件ヲ汽船

ソモアア號ニ積載シテ運送シタルコトヲ認ムヘク此事實ハ證人住野庄三郎ノ證言及同證言ニ依リ真正ニ成立シタリト認ムル乙第五號證ヲ綜合考覈スレハ右ベンモア號ハ倫敦ヨリ日本ニ航行中大正三年十月印度洋ニ於テ獨逸巡洋艦エムデン號ノ爲メ其積荷ト共ニ撃沈セラレタルコトヲ認ムルニ十分ナリ而シテ本訴物件ノ輸送ノ途中ニ於テ不可抗力ニ因リテ生シタル一切ノ損害ハ被告其責ニ任セサルコト甲第一號證記載ノ約款通ナルコトハ原告ノ認ムル所ニシテ右ノ如キ場合ハ正ニ不可抗力ニ因ル損害ニ該當スルコト論ナキカ故ニ被告ハ之カ爲メ右物件ノ履行不能ニ歸シ之テ原告ニ引渡スヘキ義務ナキモノトス終ニ原告ハ被告カ本訴物件ヲ引渡スコトヲ得サル場合ニ關シ豫備的ニ履行ニ代ルヘキ損害賠償ノ請求ヲ爲スニ依リ其當否ヲ按スルニ凡ソ債務者カ其債務ノ本旨ニ從ヒタル履行ヲ爲ササルトキハ債務者ノ遲滯後ニ於ケル給付不能ヲ生スル場合ニア目的ヲ達スルコト能ハサル場合又ハ債務者ノ遲滯ノ爲メニ給付不能ヲ生スル場合ニアラサル限り契約ヲ解除スルコト無クシテ直ニ履行ニ代ハルヘキ全部ノ損害賠償ヲ請求スルコトヲ得サルモノトス然ルニ本件ハ債務者ノ遲滯ノ爲メニ給付不能ヲ生シタルコト主張スルモノニアラス又債務者ノ遲滯後ニ於ケル給付不能亦契約ヲ爲シタル目的ヲ達スルモノナリト爲シ契約ノ存續スルコトヲ前提トシテ本訴請求ヲ爲スモノナルニ拘ハラス更ニ契約ヲ解除スルニアラサレハ之カ請求ヲ爲スコトヲ得サル履行ニ代ハルヘキ全部ノ損害賠償ヲ求ムルハ其自體ニ於テ被告カ代金引換ニ物件ヲ引渡スヘシトノ勝訴ノ判決ヲ受クルモ若シ原告ニ於テ代金債務ニ付キ不履行ノ事實アラハ之ヲ理由トシ

テ該契約ヲ解除シ物件引渡シ義務ヲ免ルルコトヲ得ルヤ勿論ナルノミナラス假ニ右ノ如キ判決ノ執行不能ヲ生シタル場合アリトスルモ執行不能ト債務者ノ責ニ歸スヘキ理由ニ因ル給付不能トハ全然別個ノ觀念ニシテ執行不能ノ事實アレハトテ直ニ右ノ如キ給付不能ノ状態ニアリト爲スヲ得サルカ故ニ契約履行ノ判決確定後債務者ノ債務不履行ヲ理由トシテ契約ヲ解除スルカ又ハ右ノ如キ給付不能ノ状態ヲ生シタルトキニアラサレハ原告カ本訴ニ於テ豫備的ニ爲スカ如キ請求ヲ爲シ得サル筋合ナリトス勿論何等反對給付ヲ伴ハサル契約履行ノ訴ニ於テハ相手方ノ給付義務ハ判決ニヨリ全然確定スルモノナルヲ以テ豫メ未來ノ履行ニ代ハルヘキモノノ請求ヲ許スヘキ理由アリト雖モ本件ノ如キ雙務契約履行ノ訴ニ於テ若シ此ノ如キ請求ヲ豫メ之ヲ許ストキハ相手方ハ不當ニ其權利ヲ侵害セラルルノ虞アルモノト謂フヘク要スルニ原告主張ノ如キ損害賠償請求權ハ未タ發生セス又之カ發生ヲ豫期シ得サルモノナルニ依リ之ニ對シ本訴ノ如キ豫備的請求ヲ爲ス申立ハ許容スヘキモノニアラス。

叙上ノ理由ニ依リ本年七月積出ノ分百噸ニ對スル契約履行ノ請求ニ限り之ヲ正當トシ爾餘ノ請求ハ失當トシテ棄却スヘキモノト認メ訴訟費用ニ付キ民事訴訟法第七十三條第一項假執行ノ宣言ニ付キ同法第五百三條第一號ヲ適用シテ主文ノ如ク判決シタリ。

### 第十八章 賣買契約履行並に代金請求の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、給付の訴。
- 2 當事者 原告は硝酸の賣主、被告は買主。
- 3 管轄 民訴總則の規定に従ふ。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金二萬五千三百三十八圓四十錢(民訴二二)
- 6 貼用印紙30圓+3圓×21=93圓(民訴印紙法二條二、編四章其1-5參照)
- 7 假執行の宣言に付民訴一九六條。

大正五年(ワ)第四〇五號賣買契約履行並に代金請求事件 (大阪地方裁判所第四民事部大正六年六月十八日判決)

原告 被告

前田 丑松  
茂野 榮次郎

【主文】 被告ハ大阪市難波驛ニ於テ原告ヨリ白色四十一度硝酸百四十磅入六百七十箱ヲ受領スルト同時ニ金二萬五千三百三十八圓四十錢ヲ原告ニ支拂フヘシ。

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス。  
此判決ハ原告ニ於テ執行前ノ保證トシテ金八千圓ヲ供託スルトキハ假ニ之ヲ執行スルコトヲ得。

【事實】 原告訴訟代理人ハ主文第一、二項記載ト同趣旨ノ判決並ニ保證ヲ條件トスル假執行ノ宣言ヲ求ムト申立テ其請求原因トシテ陳述シタル事實ノ要旨ハ本件當事者雙方ハ商人ナル處被告ハ大正五年二月十日原告方ニ來リ白色四十一度硝酸百四十磅入五百箱ヲ容器付百磅ニ付金二十六圓八十錢替ニテ大正五年三月一日ヨリ同年四月末日迄ノ間大阪市難波驛ニテ受渡ヲ爲ス約定ヲ以テ原告ヨリ買受クルコトヲ約シタリ然ルニ當時硝酸ノ時價日々昂騰シ居タル爲被告ハ右五百箱ノ外更ニ五百箱ヲ買受ケ度ク四、五日中ニ確答スルヲ以テ其間ニ時價昂騰スルトモ右同一代價ニテ賣渡シ吳レ度シト申シタルニ付キ原告ハ之ヲ承諾シ置キタル處同月十四日ヲ過クルモ被告ヨリ何等ノ申出ナカリシニ依リ原告ハ同月十五日被告ニ對シ五百箱注文ノ話合ハ之ヲ取消ス旨ヲ端書ヲ以テ通知シタルニ右端書ト行違ニ被告ハ原告方ニ來リ該五百箱ヲ買受クル旨ヲ申シタルニ依リ原告ハ之ヲ諾シ曩ノ五百箱ト合併シテ一千箱ノ賣買ト爲シ大正五年三月一日ヨリ同年六月末日迄ノ間ニ毎月二百五十箱宛大阪市難波驛ニテ代金引替ニ受渡ヲ爲ス分ノ代金ニ充當スル答ニテ契約信認金トシテ金三百圓ヲ受領シタリ然ルニ同年三月中及四月中ノ兩度ニ八十箱ノ受渡アリタルノミニシテ其餘ノ受渡ヲ爲サス原告ハ右約定ノ受渡ニ應スル數量ノ目的ヲ絶エス準備シ居リテ毎月被告ニ對シ之カ引取ヲ求メタルモ

被告ハ賣買目的物ノ時價暴落セル爲メ契約ヲ無視シテ引取ヲ爲ササルニ依リ原告ハ止ムナク同年六月六日内容證明郵便ヲ以テ被告ニ對シ三月四月五月中ニ受渡ヲ爲スヘキ七百五十箱ノ内既ニ受渡ヲ終リタル八十箱ヲ除キタル残り分六百七十箱ハ何時ニテモ引渡スヘキ準備ヲ爲シアル旨ヲ通知シ之カ引取ヲ求メタリ而シテ右六百七十箱ハ契約上同年五月末日迄ニ受渡ヲ爲スヘキモノニシテ其代金支拂ノ債務ニ付テモ既ニ期間到來シ居ルヲ以テ原告ハ被告ニ對シ物品引換ニ其代金二萬五千三百三十八圓四十錢ノ支拂ヲ求ムル爲メ本訴ニ及ヒタリト云フニ在リテ立證トシテ甲第一號證、同第一號證、同第三號證ノ一、二、同第四號證同第五號證ヲ提出シ證人小島善十郎、同山本松之助ノ各證言ヲ援用シ乙各號證ノ成立ヲ認メタリ。

被告訴訟代理人ハ原告ノ請求ハ之ヲ棄却ス、訴訟費用ハ原告ノ負擔トストノ判決ヲ求ムト申立テ其答辯トシテ(一)被告ハ大正五年二月十日原告主張ノ如キ最初ノ賣買契約ヲ爲シ同月十二日上阪ノ際原告方ニ立寄りタル際原告ハ被告ニ對シ尙硝酸五百箱ノ買増ヲ勸メタリ然レトモ被告ハ斯ク多量ノ買受ヲ爲スコトハ經濟上可能ナリヤ否ヤ計リ難キニ付キ資本主等ノ意見ヲ徵シタル上更ニ來ル十四日迄ニ確答ヲ爲ス旨ヲ告ケタルニ原告ハ然ラハ後ノ買増分ノ五百箱ト曩ニ賣買契約ヲ締結シタル五百箱トヲ合セ一千箱トシタル契約書案ヲ差入レ置キ吳レ度ク就テハ若シ來ル十四日迄ニ右資本主ノ意見ヲ徵シタル上増注文ヲ爲スヘキ旨ノ回答ヲ被告ヨリ原告ニ爲ササルトキハ前記一千箱ノ契約書案ハ無効トシ反古ト爲スヘク若シ増注文ヲ爲スコトニ被告ノ意思確定セハ該趣旨

ノ回答ヲ爲シ同時ニ曩ノ五百箱ノ賣買契約書案ヲ有效ナラシムヘキ旨ヲ約シテ立歸レリ被告ハ歸宅後直ニ資本主等ノ意見ヲ徵セントシタルモ資本主等ノ中ニ差支アリテ闕席シタルモノアリシ爲メ容易ニ議經ラス出席者ノ意見モ一致セザリシカ大體ハ増注文否定ニ傾キ居タルヲ以テ原告ニ對シ返事ヲ爲ササリシ處原告ハ同月十五日端書ヲ以テ前注文ノ豫定ハ之ヲ取消ス旨ノ意思表示ヲ爲シ來リタリ被告ハ他ニ用件アリタルヲ以テ同日午後上阪歸途原告方ニ立寄り前日ノ増注文ノ話ハ事止ミトナリタル爲メ返事ヲ出ササリシコトヲ附言シ千箱ノ賣買契約書案ノ破毀ヲ求メ置キタリ尙同日原告ヨリ先注文ノ代金ノ内入金ヲ求メラレタルニ依リ被告ハ原告ノ感情ヲ害セザランカ爲メ懸金ヲ取集メ所持シ居タル金圓中ノ三百圓ヲ右代金ノ内入トシテ原告ニ交付シ置キタルモノナリ然ルニ原告ハ右千箱ノ賣買契約書案ヲ破毀スヘキ旨明言シ置キ乍ラ之ヲ保存シ置キ硝酸ノ時價暴落セルニ依リ却テ該契約書案ヲ有效ノモノナリト詐言シ本訴ヲ提起シタルモノナリ(二)本件ニ於テ被告主張ノ如ク五百箱ノ賣買契約アリタリトスルモ將タ又原告ノ主張ノ如ク千箱ノ賣買契約アリタリトスルモ何レニシテモ大正五年三月中ニ二百五十箱ヲ同年四月中ニ二百五十箱ヲ引渡スヘキ契約ナルニ引渡第一期期限ノ三月末日迄ニ僅ニ四十箱宛二回合計八十箱ノ引渡ヲ爲シタルモノニシテ百七十箱ノ引渡不足トナリ第一期期限ニ於テ既ニ原告ハ其履行ヲ爲ササルモノナリ然ルニ被告ハ同三月末日迄ニ所定ノ二百五十箱ヲ引受クルニ非サレハ契約ヲ爲シタル目的ヲ達スルコト能ハサルモノナルヲ以テ本訴賣買契約ハ商法第二百八十七條ニ依リ當然解除セラレタル

モノナリ又同年四月末日迄ニ引渡ヲ受クヘキ二百五十箱ニ付テモ僅ニ五十箱ノ準備アリシニ過キス其餘ノ二百箱ハ原告ニ於テ引渡ノ準備ヲモ爲ササリシモノニシテ原告ニ義務ノ不履行アリタルモ被告ハ之カ履行ヲ求メタルコトナク却テ甲第三號證ノ一、二ノ如ク體能キ契約解除ノ意思表示ヲ爲シタルモノナレハ右賣買契約ハ其效ヲ失ヘルモノナリ(三)假ニ賣買契約存続スルトスルモ原告ハ未タ自ラ完全ナル履行ヲ爲サス之カ履行ヲ提供シタルコトナキヲ以テ之カ履行ノ提供アル迄被告ハ代金ノ支拂ヲ拒ムモノナリ(四)本訴賣買契約カ原告主張ノ如ク硝酸千箱ノ賣買契約ナリトスルモ原告ハ前叙述以外ノ賣買目的物ニ付キ引渡ノ用意ヲ爲シタルコトナク又被告ハ賣買ノ目的物ヲ大阪市附近ニ於テ轉賣スル目的ヲ以テ本件ノ契約ヲ爲シ右目的ニ適合セシムル爲メ大阪市難波驛ニ於テ引渡ヲ受クルコトヲ約シタルモノナルヲ以テ原告ハ目的物ヲ引渡ノ約定場所タル難波驛ニ存置スルニ非サレハ未タ以テ履行ノ準備ヲ爲シタリト云フテ得ス而シテ原告ハ右ノ如ク履行ノ準備ヲ爲サス之カ通知ヲ爲シタルコトモ無ク之ヲ以テ原告ハ完全ナル履行ノ提供ヲ爲ササルモノナリ然ルニ原告ハ自ラ完全ナル履行ノ提供ヲ爲サスシテ被告ニ對シ代金ノ支拂ヲ求ムルハ失當ナリ(五)本件賣買契約ノ履行トシテ原告ヨリ被告ニ引渡シタル合計八十箱ノ硝酸ハ之ヲ検査セシニ白色ニ非スシテ黄色ナリ又四十一度ニ非スシテ三十九度ナリ加フルニ多量ノ硫酸ヲ混入シアリテ斯クノ如キモノハ契約ノ目的ヲ達セス所謂目的物ニ隠レタル瑕疵アルモノニシテ最初ノ四十箱ハ同年三月上旬引渡ヲ受ケ同月中旬口頭ニテ瑕疵ノ通知ヲ爲シ後ノ四十箱ハ同年四月上旬引渡ヲ

受ケ同月中旬口頭ニテ瑕疵通知ヲ爲シ後ノ四十箱ハ同年四月上旬引渡ヲ受ケ同月中旬口頭ニテ瑕疵ノ通知ヲ爲シタルニ付キ民法第五百七十條第五百六十六條ニ則リ買主タル被告ハ原告ニ對シ本訴ニ於テ被告主張ノ賣買契約解除ノ意思表示ヲ爲スモノナリ(六)被告ハ大正五年三月八日硝酸四十箱分金一千五百八十圓ヲ原告ニ支拂ヒ又同四十箱分ニ付キ原告振出ノ爲替手形金一千五百八十圓ヲ大正五年四月十一日支拂ヒ尙其餘ノ四百二十箱ノ代金ノ内入トシテ前記三百圓ヲ支拂ヒタルカ故ニ假ニ原告ニ本訴債權アリトスルモ該辨濟額ニ付キ消滅シタルモノナリ以上ノ次第ナルヲ以テ原告ノ本訴請求ニ應スルコト能ハス而シテ當事者雙方商人ナルコトハ認ムル旨陳述シ立證トシテ乙第一號證乃至第四號證、乙第五號證ノ一、二、乙第六號證ヲ提出シ、證人湯川善藏、今津楠次郎、楠見新太郎、松岡良助ノ各證言ヲ採用シ甲第一號證中買約書ノ買ノ字荷受期日ノ受ノ字買約仕候ノ買ノ字二月十五ノ字ヲ否認ス其餘ノ部分ハ成立ヲ認ム甲第二號證甲第三號各證ハ成立ヲ認ム甲第四號甲第五號證ハ不知ナル旨述ヘタリ。

**【理由】** 原告ハ本件當事者間ニ硝酸千箱ノ賣買契約成立シタル旨主張シ被告ハ硝酸五百箱ノミノ賣買契約締結セラレタル旨抗辯スルニ依リ此點ヲ按スルニ成立ニ爭ナキ乙第一號證並ニ證人小島善十郎ノ證言ニ依リ全部真正ニ成立シタリト認ムル甲第一號證ヲ證人小島善十郎山本松之助ノ各證言ニ參酌スルトキハ被告ハ大正五年二月十日原告方ニ至リ白色四十一度硝酸百四十磅入五百箱ヲ容器付ニテ百磅ニ付金二十六圓八十錢替同年三月一日ヨリ同年四月末日迄ノ間ニ大阪市難波驛ニテ受渡ヲ爲ス約旨ノ下ニ原



告ヨリ買受ケタル處當時硝酸ノ時價益々昂騰シ居タルヲ以テ被告ハ更ニ五百箱ヲ買受ケント欲シ四五日中ニ確實タル申出ヲ爲スニ依リ右ノ五百箱ノ外同一代價ニテ更ニ五百箱ヲ賣渡シ吳レ度キ旨原告ニ申込ミ原告ハ之ヲ承諾シ被告ヨリ確實ナル申出ノ來ルヲ俟チ居タルモ其後被告ヨリ何等ノ申出無キニ依リ原告ハ増注文ノ五百箱ニ關スル契約ハ被告ニ於テ之ヲ締結スル意思ナキモノト思惟シ法律關係ヲ明ニスル爲メ同月十五日被告ニ對シ五百箱ノ増注文ハ契約成立ニ至ラザリシモノナル旨端書ヲ以テ通知シタルニ右端書ト行違ヒニ被告ハ原告方ニ來リ前記増注文ニ係ル五百箱ヲ買受クル旨申出テ原告モ之ヲ承諾シ曩ノ五百箱ト合セ千箱ノ賣買契約ト爲シ大正五年三月一日ヨリ同年六月末日迄ノ間ニ白色四十一度硝酸百四十磅ヲ入千箱ヲ百磅ニ付キ代金二十六圓八十錢替ニテ大阪市難波驛ニ於テ代金引換ニテ受渡ヲ爲ス旨ノ賣買契約ヲ爲シ同日金三百圓ヲ被告ヨリ原告ニ交付シタル事實ヲ認メ得ヘク乙第六號證及證人湯川善藏今津楠次郎楠見新太郎ノ各證言ハ右認定ヲ覆スニ足ラス即チ本件當事者間ニ於テ大正五年二月十五日硝酸千箱ノ賣買契約ノ成立シタルコト明カニシテ被告ノ第一ノ抗辯ハ理由ナシ被告ハ第二ノ抗辯トシテ本訴賣買契約ハ商法第二百七十八條ニ依リ當然解除セラレタルモノナル旨主張スレトモ同條ニ依リ契約ノ解除ヲ爲シタルモノト看做サルニハ賣買ノ性質又ハ當事者ノ意思表示ニ依リ一定ノ日時又ハ一定ノ期間内ニ履行ヲ爲スニ非サレハ契約ヲ爲シタル目的ヲ達スルコト能ハサル場合ナルコトヲ要ス然ルニ當事者間ニ於テ本件賣買ヲ爲スニ際シカカル意思表示ヲ爲シタルコトハ被告ノ主張セサル所ナ

ルノミナラス之ヲ認ムヘキ何等ノ證據アルコトナシ本件硝酸ノ賣買ヲ以テ賣買ノ性質上特定期賣買ニ屬スルモノト認ムルヲ得サルヲ以テ本訴賣買契約ハ商法第二百八十七條ニ依リ解除シタルモノト看做サルヘキモノニ非ス被告ハ又同年四月中原告ヨリ引渡ヲ爲スヘキ硝酸二百五十箱ニ付テハ原告ハ其引渡ノ義務ヲ履行セサルノミナラス同二百箱ハ履行ノ準備ヲ爲サザリシヲ以テ被告ハ甲第三號證ノ一、二ノ書面ニ依リ契約ノ解除ノ意思表示ヲ爲シタル旨主張スレトモ甲第三號證ノ一、二ニ依ルモ何等解除ノ意思ヲ爲シタルト雖モ商事賣買ニ於テモ特定期間賣買ニアラサル限りハ債務者カ期間ニ其債務ヲ履行セサルトキハ相手方ハ相當ノ期間ヲ定メテ履行ヲ催告シ其期間内履行ナキトキニ於テ契約ノ解除ヲ爲シ得ルモノニシテ本件賣買カ特定期賣買ニアラサルコト前段認定スル所ナルカ故ニ被告ニ於テ本訴ノ賣買契約ヲ解除セント欲セハ相當ノ期間ヲ定メテ履行ヲ催告セサルヘカラサルモノナルニ拘ラス履行ノ催告ヲ爲シタルコトハ被告ノ主張セサル所ナルノミナラス却テ被告ハ履行ノ催告ヲ爲サザリシコトヲ主張スルモノナルカ故ニ假令被告ニ於テ契約解除ノ意思ヲ表示スルモ何等解除ノ效果ヲ發生スルモノニ非ス結局第二ノ抗辯モ亦理由ナシ被告ハ第三ノ抗辯トシテ同時履行ノ抗辯ヲ爲スモ原告ハ本訴ニ於テ被告ニ對シ單純ニ賣買代金ノ支拂ヲ求ムルモノニ非スシテ賣買ノ目的物ト引替ニ賣買代金ノ支拂ヲ請求スルモノナルカ故ニ此抗辯モ亦理由ナシ被告ハ第四ノ抗辯トシテ本件賣買ノ目的物ハ難波驛ニ於テ引渡シヲ受クルコトヲ約シタ

ルモノニシテ原告ハ前記八十箱ノ引渡シヲ爲シタルノミニシテ其餘ノ目的物ヲ引渡場  
 所タル難波驛ニ存置セサルカ故ニ被告ニ對シ代金ノ支拂ヲ請求スルコトヲ得サル旨主  
 張スレトモ本件賣買契約ノ約旨ニ依レハ賣買代金ハ大阪市難波驛ニ於テ賣買ノ目的物  
 ト引替ニ支拂フヘキモノナルコト前段認定ノ如クナルヲ以テ原告ハ代金支拂ノ時ニ難  
 波驛ニ於テ代金ト引替ニ賣買ノ目的物ノ引渡ヲ爲スコトヲ要スルニ止マリ其以前ニ於  
 テ之ヲ難波驛ニ存置スコトヲ要スルモノニアラス而シテ原告ハ被告ニ對シ難波驛ニ於  
 テ賣買ノ目的物ノ引渡ト同時ニ賣買代金ノ支拂ヲ請求スルモノニシテ畢竟同時履行ノ  
 趣旨ニ於テ本訴賣買契約ノ履行ヲ求ムルモノニ外ナラサルヲ以テ賣買目的物カ未ダ引  
 渡場所ニ存置セラレサル事實ニ據テ以テ原告ノ本訴請求ヲ拒否スル事由ト爲ステ得ス  
 從テ此抗辯モ謂レナシ被告ハ第五ノ抗辯トシテ被告ハ大正五年三月上旬原告ヨリ硝酸  
 四十箱ノ引渡ヲ受ケ之ヲ検査セシニ白色ニ非スシテ黄色ヲ呈シ又四十一度ニ非スシテ  
 三十九度ナリシカ尙多量ノ硫酸混入シアリテ所謂目的物ニ隠レタル瑕疵アルモノニシ  
 テ如斯硝酸ハ契約ヲ爲シタル目的ヲ達スルコト能ハサルヲ以テ同月中旬口頭ニテ原告  
 ニ對シ瑕疵ノ通知ヲ爲シ又同年四月上旬引渡ヲ受ケタル硝酸四十箱モ亦之ヲ檢シタル  
 ニ同様ノ隠レタル瑕疵アリテ契約ヲ爲シタル目的ヲ達スルコト能ハサリシモノナリシ  
 テ以テ同月中旬原告ニ對シ口頭ニテ瑕疵ノ通知ヲ爲シタルヲ以テ被告ハ本訴ニ於テ賣  
 買契約解除ノ意思表示ヲ爲シ之ヲ以テ抗辯トナス旨主張スレトモ被告カ其主張ノ時期  
 ニ検査ヲ爲シ且瑕疵ノ通知ヲ爲シタルコトヲ認ムヘキ證左存スルコトナシ却テ證人山

本松之助ハ原告ヨリ送付シタル硝酸ハ二十日間程被告居宅倉庫ニ置カレタルモ其後新  
 築工場附近ノ露天ニ積置キアリタリ被告ノ染料製造工場ハ大正五年二月十一日ヨリ建  
 築ニ著手シ同年五月十七日竣功シ同月十八日縣廳ノ許可ヲ受ケ同日ヨリ仕事ヲ爲シタ  
 ルカ原告ヨリ送付セシ硝酸ハ同年五月十八日ノ朝始メテ検査ヲ爲シタル旨證言シ被告  
 ノ申請シタル證人今井楠次郎モ亦原告ヨリ送付シタル硝酸ヲ試験シタルハ現ニ縣廳ヨ  
 リ許可ヲ受ケ居タルトキト思フカ大正五年五月頃ナリト思フ旨證言シ此等ノ證言ハ信  
 ヲ措クニ足ルカ故ニ被告ハ原告ヨリ大正五年三月上旬各四十箱ノ硝酸ノ引渡ヲ受ケ乍  
 ラ同年五月十八日頃迄其検査ヲ爲ササリシコト明カナリ證人湯川善藏ノ右検査ノ日ハ  
 同年四月頃ナリト思フ旨ノ證言ハ措信セス而シテ被告ノ主張ニ依レハ原告ノ送付シタ  
 ル硝酸ハ數十箱ノ内ノ一部ニ瑕疵アリタリト云フニアラスシテ全部ノ硝酸ニ一様ノ瑕  
 疵アリト云フニ在ルカ故ニ被告主張ノ瑕疵アリトスルモ其瑕疵ハ送付ノ硝酸ノ一箱又  
 ハ一瓶ニ付検査ヲ爲サハ直ニ全部ノ硝酸ノ瑕疵ヲ發見シ得ヘキコト理論上當然ニシテ  
 且硝酸ノ色合ハ肉眼ヲ以テ看識シ得ヘク其度數ハ比重計器ヲ藥品中ニ挿入セハ直ニ之  
 ヲ計ルコトヲ得又不純物ノ混否ハ藥品ヲ分析スレハ容易ニ之ヲ知ルコトヲ得而シテ被  
 告ハ染料製造及他ニ轉賣ノ目的ヲ以テ本訴物品ヲ買受ケタルコトヲ主張スルモノナル  
 カ故ニ被告ニ對シテハ前記程度ノ検査義務アルコト素ヨリ當然ニシテ被告ニ取リテハ  
 容易ナル検査ナリト謂フヘク從テ被告主張ノ瑕疵ハ商法第二百八十八條第一項後段ニ  
 所謂直ニ發見スルコト能ハサル瑕疵ニ該當セサルコト明カナリ既ニ右瑕疵カ直ニ發見

スルコト能ハサル瑕疵ニ非サル以上ハ本訴ノ賣買カ商人間ノ賣買ナルコト當事者間ニ  
 争ナキ所ナルヲ以テ被告ハ賣買ノ目的物ヲ受取リタル後遲滞ナク之ヲ検査シ瑕疵アル  
 コトヲ發見シタルトキハ直ニ原告ニ對シ其通知ヲ爲スニアラサレハ之ニ因リ契約ノ解  
 除ヲナスコトヲ得サルコトハ商法第二百八十八條ノ規定スル所ニシテ被告ハ大正三年  
 三月上旬及同年四月上旬原告ヨリ賣買ノ目的物ノ引渡ヲ受ケ乍ラ遲滞ナク之ヲ検査  
 爲サス數日間之ヲ放置シ同年五月十八日頃ニ至リ始メテ之ヲ検査ヲ爲シタルモノナル  
 ヲ以テ假ニ目的物ニ瑕疵アリトノ被告ノ主張ヲ眞實ナリトスルモ被告ハ瑕疵ヲ原因ト  
 シテ契約解除ノ意思ヲ表示スルモ何等解除ノ效果ヲ生セサルコト更ニ多言ヲ要セス從  
 テ第五ノ抗辯モ理由ナシ被告ハ第六ノ抗辯トシテ被告ハ大正五年三月八日及同年四月  
 十一日ノ兩度ニ各數日前原告ヨリ引渡ヲ受ケタル硝酸八十箱ノ代金合計三千百六十圓  
 ヲ支拂ヒタル故此支拂金額ハ本訴賣買代金中ヨリ控除セラルヘキモノナル旨主張スレ  
 トモ原告ハ硝酸一千箱ノ賣買代金中ヨリ右履行ヲ了ヘタル八十箱ノ代金ト本訴提起當  
 時未タ履行期ニアラサリシ二百五十箱ノ代金トヲ控除シタル金額ヲ本訴ニ於テ請求ス  
 ルモノナルヲ以テ右三千百六十圓ヲ重ネテ本訴賣買代金中ヨリ控除シテ計算ヲ爲スヘ  
 キモノニ非ス被告ハ又大正五年二月十五日被告ヨリ原告ニ交付シタル三百圓ハ賣買代  
 金ノ内入金ナルヲ以テ之ヲ控除計算スヘキ旨主張シ原告ハ右三百圓ハ契約信認金ナル  
 ヲ以テ最後ニ引渡サレタル物品ノ代金中ニ充當スヘキモノナル旨主張シ右金員ノ性質  
 ニ付キ當事者間ニ争ノ存スル所ニシテ右金員ノ請取書タルコトニ争ナキ乙第三號證ニ

ハ單純ナル受領文言ノ記載アルニ止マリ何等此金員ノ性質ヲ知ルニ足ル記載ナク他ニ  
 此争點ヲ直接ニ決スヘキ證據ナシト雖モ右三百圓ノ授受アリシ後本件硝酸八十箱ノ引  
 渡アリテ其代金中ニ右三百圓ヲ算入セス之ヲ除外シ別途ノ金員ヲ以テ其數量ニ對スル  
 代金ノ支拂ヲ爲シ居ル事實ニ徴スルトキハ右三百圓ハ賣買代金ノ内入金ニ非サルコト  
 明カナルヲ以テ此金員ノ性質ハ原告ノ主張ニ據ルノ外ナク從テ金員ハ契約信認金トシ  
 テ授受セラレタルモノト認ムヘク信認金ナル以上ハ最後ニ引渡サレタル目的物ノ代金  
 中ニ充當セララルヘキモノナルコト其性質上明カナル所ナリ而シテ前記契約ノ一千箱ノ  
 硝酸中最後ニ引渡サルヘキ同年六月分二百五十箱ノ代金ニ付テハ本訴ニ於テ原告ノ請  
 求セサル所ニシテ且同二百五十箱ノ代金ノ未タ支拂ハレサルコトハ當事者間ニ争ナク  
 又代金支拂義務ノ消滅シ居ラサルコトハ前數段ノ說示ノ結果是非明カナルヲ以テ右三  
 百圓ハ本訴請求以外ノ同年六月分ノ二百五十箱ノ代金數千圓中ニ辨濟トシテ充當セラ  
 ルヘキモノナリト云フカ故ニ右三百圓ヲ本訴代金中ヨリ控除計算スヘキモノナリトノ  
 主張ハ採用スルコトヲ得ス結局第六ノ抗辯モ亦理由ナシ而シテ本訴ニ於テ當事者雙方  
 ニ約定ノ期日ニ契約ノ履行ヲ爲ササリシモノアルモ被告ハ之ヲ原因トシテ法定ノ手續  
 ヲ盡シテ契約ノ解除ヲ爲ササリシコト前段說示スル所ニシテ他ニ本訴賣買契約ノ存續  
 ヲ否定スヘキ事由ノ見ルヘキモノナキヲ以テ既ニ分割履行ノ各履行期日ヲ經過セル今  
 日ニ於テ各履行期ニ於ケル給付ヲ併セテ一時ニ請求スルヲ妨ケス果シテ然ラハ本訴賣  
 買契約ノ履行ヲ物品引換ニ求ムル原告ノ請求ハ至當ニシテ其請求ハ一部之ヲ認容スヘ

キモノトス依テ訴訟費用ニ付テハ民事訴訟法第七十二條第一項假執行ノ宣言ニ付テハ同法第五百三條第一項ヲ適用シ主文ノ如ク判決ス

### 第十九章 賣買契約解除に因る代金返還並に債務不履行

に因り被りたる損害賠償請求の訴

#### 第一 賣買契約に因る代金返還請求の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、給付の訴。
- 2 當事者 原告は買主、被告は賣主。
- 3 管轄 民訴總則の規定に従ふ。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金千四百圓(民訴二二條一項)

#### 第二 債務不履行に因り被りたる損害賠償請求の訴

- 1 訴の性質 2 當事者 3 管轄 4 訴提起の時期に付第一の夫々の説明を援用する。
- 5 訴訟物の價額 金千圓(民訴二二條一項)

6 以上第一第二の訴訟物の價額の合算額は金二千四百圓仍て貼用印紙は二十五圓(民訴二二條一項)

大正九年(ワ)第一四一〇號賣買契約解除ニ因ル返還及損害ノ賠償請求事件 (東京地方裁判所第二民事部大正十年四月七日判決)

原告

下野製紙株式会社

右法律上代理人支配人

松吉文平

小倉貿易株式会社

右法律上代理人取締役

小倉久兵衛

被告

【主文】 被告ハ原告ニ對シ金貳千四百圓及内金壹千四百圓ニ對スル大正九年二月二十三日ヨリ本件判決執行済ニ至ル迄年六分ノ利息ヲ支拂フヘシ。

訴訟費用ハ被告ノ負擔トス。

此判決ハ原告ニ於テ執行前保證トシテ金八百圓若クハ之ニ相當スル有價證券ヲ供託スルトキハ假ニ執行スルコトヲ得。

【事實】 原告訴訟代理人ハ主文第一、二項記載ノ如キ判決並ニ保證ニ因ル假執行ノ宣言ヲ求ムル旨申立テ其請求ノ原因トシテ演述シタル事實ノ要旨ハ原告ハ大正八年十二月八日被告トノ間ニマニラ麻中屑和二百斤入六十捆ヲ一捆ニ付キ代金三十五圓ノ割ニテ

#### 第十九章

賣買契約解除に因る代金返還並に債務不履行に因り被りたる損害賠償請求の訴

引渡場所ヲ東京府南千住字千住南九百番地原告會社南千住工場構内ト定メ買受クヘキ旨ノ賣買契約ヲ締結シ内二十梱ハ同年同月十八日右原告會社工場ニ於テ引渡ヲ受ケ代金七百圓ヲ支拂ヒタリ然ルニ殘四十梱ニ付テハ被告ヨリ大正九年一月六日出荷シタル旨ノ通知アリタルヲ以テ原告ハ同年同月二十二日爲替金千四百圓ヲ支拂ヒタルモ被告ハ約旨ニ從テ引渡ヲ爲サス依テ原告ハ爾來屢々履行ノ催告ヲ爲シタルモ被告ハ之ニ應セザル旨回答シテ履行ヲ爲ササルニ依リ遂ニ同年六月十九日被告ニ對シ右四十梱ノ部分ニ對スル本件賣買契約解除ノ意思表示ヲ爲シタリ而シテ右目的物ノ大正九年二月中ノ時價ハ一梱金六十圓ナリシヲ以テ本件契約價值トノ差額一梱ニ付キ金二十五圓四十梱ニ付キ千圓ハ被告ノ債務不履行ニヨリ原告ノ被リタル損害ナリトス依テ之カ賠償ヲ求メ併セテ彙ニ支拂ヒタル代金千四百圓並ニ受領ノ時以後ノ利息ノ支拂ヲ求ムル爲メ本訴ニ及ヒタリト云フニアリテ被告ノ主張ニ對シ貨物引換證ノ交付ヲ受ケタルコトハ之ヲ認ムルモ右引換證ハ運送品ノ種類重量又ハ容積及荷造ノ種類運賃ノ記載ヲ缺キタル無効ノ引換證ニ過キス大正九年一月三十日被告ヨリ本件目的物引渡ノ提供ヲ受ケ原告ニ於テ之カ受領ヲ拒絕シタル事實ハ之ヲ否認スト陳述シ立證トシテ甲第一號證ノ一、二、三、三號證ノ各、一、二、三、第四號證ノ一乃至四、第五號證ノ一、二、三ヲ提出シ乙號證ノ成立ヲ認メタリ。

被告訴訟代理人ハ請求棄却ノ判決ヲ求メ答辯トシテ原告主張ノ如キ内容ノ賣買契約ノ

成立シタル事實代金受領ノ事實原告主張ノ如キ請求催告ノアリタル事實原告主張ノ如キ契約解除ノ意思表示ノアリタル事實ハ執レモ之ヲ認ム然レトモ被告ハ大正九年一月二十二日原告ニ對シ本件目的物四十梱ノ貨物引換證ヲ交付シ債務ノ履行ヲ終リタルモノナリ假ニ然ラストスルモ被告ハ大正九年一月三十日原告會社南千住工場ニ於テ原告ニ對シ本件目的物ヲ提供シテ其受領ヲ求メタルニ原告ハ之カ受領ヲ拒絕シタルモノニシテ其後汽車煤煙ノ爲メ右目的物ノ一部燒失ニ歸シ翌三十一日被告ハ同シク右原告會社工場ニ於テ原告ニ對シ殘部ヲ提供シテ其受領ヲ求メタルニ原告ハ再ヒ之カ受領ヲ拒絕シ其後右殘部モ亦燒失ニ歸シタルモノニシテ右大正九年一月二十日危險ハ原告ニ移轉シ爾後被告ハ何等不履行ノ責ヲ負フヘキモノニアラスト陳述シ立證トシテ證人城戸爲吉ノ證言ヲ援用シ乙第一號ノ一、二ヲ提出シ甲各號證ノ成立ヲ認メタリ。

【理由】 本件當事者間ニ大正八年十二月八日マニラ麻中層和二百斤入六十梱ニ付キ代金一梱ニ付キ金三十五圓引渡場所原告會社南千住工場構内ト定メタル賣買契約カ成立シ其後内二十梱ノ部分ニ付キ履行ノ完了シタル事實ハ當事者間ニ爭ナキトコロナリ大正九年一月二十二日被告カ原告ニ對シ右マニラ麻中層和十梱ノ貨物引換證ヲ交付シタル事實ハ原告ノ認ムルトコロナリト雖モ成立ニ爭ナキ甲第二號證ノ三右貨物引換證ヲ査閱スルニ本件貨物引換證ハ運送品ノ種類重量又ハ容積荷造ノ種類及運賃ノ記載ヲ缺キ貨物引換證トシテノ要件ヲ具備セザル無効ノ證券ナル事明カナリトス從テ之カ交付ニヨリテハ何等ノ效果ヲ生スヘキ限ニアラス假リニ右貨物引換證カ要件ヲ具備シタル有效

ナル證券ナリトスルモ本件當事者間ノ賣買契約ニ於テハ被告ニ於テ原告會社南千住工場ニ目的物ヲ搬入シテ原告ニ引渡スヘキ旨ヲ約シタル趣旨ナルコト前段確定シタルトコロニヨリテ明カナルヲ以テ此ノ如キ場合ニ於テ單ニ貨物引換證ヲ交付シタルノミニテハ被告ハ義務ノ履行ヲ完了シタルモノナリト云フヲ得サルコト當然ナルヲ以テ此點ニ關スル被告ノ主張ハ其理由ナシ證人城戸爲吉並ニ乙第一號證ノ一、二ニ依ルニ被告ハ原告ニ引渡スヘキマニラ麻四十捆ヲ鐵道便ニ託シテ大正九年一月二十九日ノ夜右貨物ノ内三十四捆ハ隅田川驛ニ到着シ被告ヨリ其取扱ノ委託ヲ受ケタル内國通運株式會社隅田川支店ハ翌三十日午前十時頃迄ノ間ニ荷卸ヲ爲シ原告ニ對シテ之カ通知ヲ爲シ原告會社南千住工場ニ搬入スルノ準備ヲ爲シ之カ交渉中同日午後二時頃右マニラ麻ハ火災ニ罹リ翌三十一日再ヒ原告ニ交渉中更ニ再ヒ火災ニ罹リ全部燒失シタル事實ヲ認ムルヲ得ルモ右目的物ヲ原告會社南千住工場構内ニ搬入スルノ準備ヲ爲シテ之カ交渉ヲ爲シタリト云フカ如キ事實ノミニテハ被告カ物ノ給付ヲ爲スニ必要ナル行爲ヲ完了シタルモノナリト云フヲ得サルヘク從テ未タ目的物ノ確定ヲ生セシテ其後被告ノ責ニ歸スヘカラサル事由ニヨリテ目的物ノ滅失ヲ生シタル事實アリトスルモ其滅失ハ原告ノ負擔ニ歸スヘキ限ニアラサルコト當然ナリトス依テ此點ニ關スル被告ノ主張モ亦理由ナシ原告カ其後被告ニ對シ其債務ノ履行ヲ請求シタルモ被告ハ之ニ應セザリシカ爲メ原告ハ大正九年五月十四日、五日ノ期間ヲ定メテ被告ニ對シ履行ノ催告ヲ爲シタル事實ハ被告ノ認ムルトコロニシテ右五日ノ期間ハ當裁判所ノ相當ナル期間ナリト解ヘル

トコロナリ而シテ被告ハ之ニ應セザリシカ爲メ原告ハ遂ニ同年六月十九日被告ニ對シテ右四十捆ノ部分ニ對スル本件賣買契約解除ノ意思表示ヲ爲シタルコトモ亦被告ノ認ムルトコロナルヲ以テ右ノ部分ノ本件賣買契約ハ右原告ノ解除ノ意思表示ニ依リテ解除ノ效果ヲ生シタルモノナリトス被告カ大正九年一月二十二日原告ヨリ本件四十捆ノ代金トシテ金千四百圓ヲ受領シタル事實ハ被告ノ認ムルトコロナルヲ以テ被告ハ契約解除ニ因ル原狀回復ノ義務ノ履行トシテ右金千四百圓ヲ原告ニ返還シ併セテ右受領ノ時タル大正九年一月二十二日以降ノ利息ヲ支拂フヘキ義務アルモノナルコト當然ナリトス而シテ本件賣買ハ株式會社タル當事者雙方ノ營業ノ爲メニ爲シタルモノト推定サレ從テ商行為ナリト解スヘキモノナルヲ以テ右賣買カ解除セラレタル結果生シタル債務ニ付キテハ商法第二百七十六條ノ趣旨ニ從ヒ法定利率ハ年六分ナリト解スルヲ相當トスルヲ以テ右利率ハ年六分ナリトス本件賣買ノ目的タルマニラ麻ノ大正九年二月中ニ於ケル時價カ一捆金六十圓ナリシコト被告ノ明カニ争ハス又辯論ノ全趣旨ニ依ルモ争ハントスル意思顯ハレサルヲ以テ之ヲ自白シタルモノト看做ス從テ契約價值一捆金三十五圓ト右大正九年二月中ノ時價トノ差額一捆ニ付キ金二十五圓四十捆ニ付キ金千圓ハ被告ノ債務不履行ノ結果原告ノ被リタル損害ナルコト明カナルヲ以テ被告ハ原告ニ對シ之カ賠償ヲ爲スヘキ義務アルコト亦當然ナリトス上來説示ノ如クナルヲ以テ原告ノ本件請求ヲ全部理由アリト認メ民事訴訟法第七十二條第一項第五百三條第一號ニ則リ主文ノ如ク判決シタリ。

### 第二十章 營業權工場建物敷地權動産實用新案權商標權讓渡金返還請求の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、給付の訴。
- 2 當事者 原告は營業權等の讓受人、被告は其の讓渡人。
- 3 管轄 民訴總則の規定に従ふ。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金五千三百七十一圓五十錢(民訴二二條一項)
- 6 貼用印紙 30圓 + 3圓 = 33圓(民訴印紙法二條二編四章其一一五參照)
- 7 假執行の宣言に付民訴一九六條。

大正五年(ワ)第八四九號讓渡金返還請求事件 (東京地方裁判所第二民事部大正六年三月十二日判決)

原告

中央護謨株式會社

右法律上代理人取締役

佐竹源造

被告

小原忠次郎

被告

岩 清 治

【主文】 被告兩名ハ連帶シテ原告ニ對シ金二千七百圓及之ニ對スル大正五年六月十七日ヨリ本件判決執行濟ニ至ル迄年六分ノ損害金ヲ支拂フヘシ。

原告其餘ノ請求ハ之ヲ棄却ス。

訴訟費用ハ之ヲ二分シ其一分ハ原告ノ負擔トシ其餘ハ被告兩名ノ負擔トス。

此判決ハ原告勝訴ノ部分ニ限り執行前原告ニ於テ保證トシテ金八百圓又ハ之ニ相當スル有價證券ヲ供託スルトキハ假ニ執行スルコトヲ得。

【事實】 原告訴訟代理人ハ被告兩名ハ連帶シテ原告ニ對シ金五千三百七十一圓五十錢及金二千六百七十七圓五十錢ニ對スル大正五年六月四日ヨリ内金二千七百圓ニ對スル大正五年六月十七日ヨリ本件判決執行濟ニ至ルマテ年六分ノ損害金ヲ支拂フヘシ訴訟費用ハ被告ノ負擔トストノ判決及保證ヲ條件トスル假執行ノ宣言ヲ求ムル旨申立テ其請求原因トシテ陳述シタル事實ノ要旨ハ被告兩名ハ大正四年六月一日其經營ニ係ル北東護謨製造所ノ事業一切工場建物敷地權並ニ機械器具什器ヲ代金一萬九千五百五十二圓三十錢ニテ原告ヘ讓渡スルト共ニ大和ゴム輪登錄實用新案權ヲ代金一千六百圓之カ實施ニ専用ノ塗粉乾臺四百二十七臺ヲ代金二百十三圓五十錢色輪用木型二寸ヨリ一尺迄三千個ヲ代金六百圓乾臺二百臺ヲ代金四十圓色輪用紋型三個ヲ代金十八圓十印登錄商標權ヲ代金二千七百圓ニテ原告ヘ讓渡シ原告ハ同日右代金全部ヲ被告等ニ支拂ヒタリ而シテ原告ハ右實用新案權ハ尙ホ相當ノ期間存續スルモノナリト信シテ諸權利ノ讓

渡契約ヲ爲シタルモノナリ然ルニ右實用新案權ハ該契約ノ日ヨリ僅カニ一ヶ月餘ヲ經タル大正四年七月十日其存續期間ノ滿了ニ依リ消滅シタルヲ以テ原告ハ該契約ヲ爲スニ付キ其要素ニ錯誤アリタルモノニシテ其契約ハ當然無効ナリ從テ右實用新案權カ相當期間存續スルコトヲ前提トシテ爲シタルカ實施ニ專用ノ前記塗鞠臺外三點ノ物品ノ讓渡契約モ亦要素ノ錯誤ニヨリ無効ナルヲ以テ原告ハ大正五年五月三十一日被告等ニ對シ曩ニ支拂ヒタル右實用新案權及物品ノ代金合計二千六百七十一圓五十錢ヲ同年六月三日正午迄ニ原告ニ返還スヘキ旨ノ催告書ハ被告忠次郎へ同年五月三十一日被告濟治へ同年六月一日各到著シタリ然ルニ被告等ハ之カ返還ヲ爲サス又原告ハ被告等ニ對シ前記ノ如ク十印登錄商標權ノ代金ヲ支拂ヒタルニ拘ハラヌ被告ハ原告ニ對スル右權利移轉ノ履行ヲ爲ササルヲ以テ原告ハ大正五年五月三十一日被告兩名ニ對シ同年六月三日正午迄ニ右手續ヲ履行スヘキ旨ノ催告書ヲ爲シ併セテ若シ右期間内ニ履行セサルトキハ該讓渡契約ヲ解除スヘキ旨ノ通知ヲ爲シ此催告書ハ被告忠次郎ニ對シテハ同年五月三十一日被告濟治ニ對シテハ同年六月一日各到著シタリ然ルニ被告等ハ其履行ヲ爲ササルヲ以テ前記商標權ノ讓渡契約ハ大正五年六月三日解除セラレタルモノナリ仍テ原告ハ大正五年六月七日被告ニ對シ右商標權ノ代金二千七百圓ノ支拂ヲ求メタルニ被告等ハ尙ホ之ニ應セス而シテ原告ハ商會社ニシテ被告等ハ前記讓渡契約當時商人ナリシヲ以テ被告等ハ連帶シテ原告ニ對シ右代金合計金五千三百七十一圓五十錢ヲ返還スル義務アルモノナリ故ニ本訴ニ及ヒタリト謂フニアリテ被告等ノ抗

辯ニ對シ本件實用新案權ノ存在ハ原告會社設立ニ關スル有力ナル事由ノ一ニシテ加之被告忠次郎ハ原告會社ノ株式五十株ヲ引受ケ且原告會社ノ技師トナリ又被告濟治ハ原告會社ノ株式三百株ヲ引受ケ且原告會社ノ監查役タリシヲ以テ斯ル密接ナル關係ヲ原告會社トノ間ニ有スルモノカ讓渡後直ニ消滅スルカ如キ權利ヲ無斷ニテ原告會社ニ讓渡スルカ如キハ何人モ想像シ得サル所ナルヲ以テ原告ハ被告等ヲ深ク信シ存續期間ニ付キ何等取調ヲ爲サスシテ之ヲ讓受ケタルモノナリ故ニ原告ハ該權利ノ存續期間ニ付キ取調ヲ爲ササリシハ相當ノ理由アルモノニシテ決シテ重大ナル過失アリト謂フヘカラス假リニ被告等主張ノ如ク右錯誤カ原告ノ重大ナル過失ニ基クモノナリトスルモ被告等ハ原告カ實用新案權ノ存續期間ニ付キ錯誤ニ陷リ居リタルコトヲ知リ且詐欺ヲ以テ本件讓渡契約ヲ締結シタルモノナルヲ以テ被告等ハ原告ニ對シ其過失ヲ主張スルコトヲ得サルモノナル旨陳述シ立證トシテ證人細田武治栗本鐵次ノ喚問ヲ申請シ甲第一、第二號證第三號證ノ一、二、甲第四號證第五號證ノ一、二、第六號證第七號證ノ一乃至第六第八第九第十號證第十一號證ノ一、二、三ヲ提出シ乙第五號證ノ二第六號證ニ對シテ不知ノ陳述ヲ爲シ其他ノ甲號各證ノ成立ヲ認メ乙第一第七號證證人梅田種彦ノ證言ヲ援用シタリ。

被告訴訟代理人ハ原告ノ請求棄却ノ判決ヲ求ムル旨申立テ答辯トシテ當事者間ニ本件讓渡契約ノ成立シタルコト原告ハ商人ニシテ被告等モ亦該讓渡契約締結當時商人ナリシ事實及原告主張ノ本件登錄商標權ノ讓渡契約解除ノ意思表示アリタル事實ハ之ヲ認



ムルモ右契約ハ被告忠次郎ノ獨特ノ技能ヲ主要ノ目的トシタル一個ノ契約ニシテ各種ノ權利及物品ニ付キ個々ニ締結セラレタル數個ノ契約ニアラス而シテ本件商標登録權ニ付キテハ被告等ハ原告ニ其權利移轉ノ手續ニ必要ナル書類ヲ交付シタリ但シ被告等ハ右商標權ノ名義變更ヲ爲スニ必要ナル讓渡人ノ讓渡當時ニ於ケル營業證明書ハ原告ニ交付セサリシト雖モ右ハ原告會社ノ行爲ニヨリ所轄區役所ヨリ該證明書ノ下附ヲ受クルコト能ハサリシニ因ルモノナリ即チ原告會社事務員ヨリ區役所ニ對シ被告忠次郎ノ廢業届書ヲ出シタル爲メ區役所ニ於テハ營業證明書ヲ下附セサリシ次第ニシテ尙ホ警視廳ノ被告忠次郎ニ對スル機械類ノ使用認可書持參セハ區役所ニ於テハ營業證明書ヲ下附スヘシトノ事ナリシモ原告ニ於テ之ヲ廢業シタリトノコトニテ被告ノ拂戻ノ請求ニ應セサル爲メ結局該證明書ノ下附ヲ受クルニ由ナカリシモノナレハ原告ノ責ニ歸スヘキ事由ニヨリテ其交付ヲ爲スコトヲ得サリシモノニシテ被告ニ於テ原告ニ對スル前記必要書類交付ノ義務不履行ノ責任無シ且原告ノ解除ノ通知ハ不合法ナリ又實用新案權ノ讓渡契約ニ付キ原告カ要素ノ錯誤ニ陥リタリトノ原告主張ノ事實ハ之ヲ否認ス假ニ原告ニ於テ右要素ノ錯誤アリタリトスルモ右ハ原告ノ重大ナル過失ニ因ルモノナラチ以テ原告ハ該契約ノ無効ヲ主張スルコトヲ得ス尙ホ本件讓渡契約ノ締結カ被告ノ詐欺ニ基クモノナリトノ原告主張ノ事實ハ之ヲ否認スル旨陳述シ立證トシテ證人中村敬三郎梅田種彦後藤伸三郎ノ喚問ヲ申請シ乙第一號證第二乃至第五號證ノ各一、二第六號證ヲ提出シ書類ノ取寄ヲ申請シテ之ヲ乙第七號證トシテ提出シ甲第七號證ノ一乃至

六ヲ否認シ其他ノ甲號各證ノ成立ヲ認メタリ。

【理由】原告及被告兩名間ニ本件讓渡契約ノ成立シタルコトハ當事者間ニ争ヒナキトコロナリ而シテ證人細田武治ノ證言ヲ成立ニ争ヒナキ甲第一號證ニ對照シテ考覈スルニ右讓渡契約ハ一個ノ權利及物品ニ付キ包括的ニ締結セラレタル一個ノ契約ニアラスシテ原告主張ノ如ク各種ノ權利又ハ物品ニ付キ各別ニ締結セラレタル數個ノ讓渡契約ナルコトヲ認メ得ヘシ依テ先ツ本件實用新案權及塗翰乾臺色翰用木型乾臺色翰用紋型ノ各讓渡契約ハ要素ノ錯誤ニヨリ無効ナリヤ否ヤノ點ニ付キ按スルニ本件讓渡契約締結當時ニ於テ實用新案權ノ存續期間カ僅カニ一ヶ月餘ヲ存スルニ過キサリシコトハ當事者間ニ争ヒナキ事實ニシテ原告カ該事實ヲ知ラスシテ尙相當ノ存續期間ヲ有スルモノト信シテ本件實用新案權ノ讓渡契約ヲ爲シタルコトハ證人細田武治及栗本鐵治ノ各證言ニヨリテ之ヲ認メ得ヘシ而シテ實用新案權ノ目的ハ其登録ヲ受ケタル物品ヲ製作販賣擴布又ハ使用スル權利ヲ一定ノ存續期間所有スルニアリテ其期間ノ長短ハ直接ニ其權利ノ價值ニ重大ナル關係ヲ有スルモノナルヲ以テ若シ原告ニ於テ右權利ノ存續期間カ一ヶ月餘ニ過キサリシ事實ヲ知リタランニハ該契約ヲ爲ササリシモノト認ムヘク右權利ノ讓渡契約ハ要素ニ錯誤アリタルモノト認定ス然リト雖モ前段ニ揭示シタル如ク存續期間ノ長短ハ實用新案權ノ價值ニ重大ナル關係ヲ有スルヲ以テ苟クモ實用新案權ノ有價讓渡ヲ受ケントスルニ當リテハ何人ト雖モ須ク其存續期間ノ長短ニ付キ之ヲ顧念スヘキモノナリ然ルニ原告ハ其主張自體ニヨリ明カナルカ如ク其存續期間ニ付キ

何等ノ思慮ヲ用ヒスシテ漫然該權利ヲ讓受ケタルモノナルヲ以テ右期間ニ關スル前示ノ錯誤ニ付キ原告ニ於テ重大ナル過失アリタルモノト謂ハサルヘカラス從テ原告ハ被告等ニ對シ前記ノ要素ノ錯誤ニヨル右契約ノ無効ヲ對抗シ得サルモノトス此ノ點ニ關スル被告ノ抗辯ハ其理由アリ原告カ右要素ノ錯誤ニ陷リ居リタルコトハ被告等ニ於テ知リ居リタルモノニシテ且詐欺ニ因リ原告ヲシテ讓渡契約ヲ爲サレタルモノナル旨主張スレトモ之ヲ認ムヘキ證左ナキヲ以テ原告ノ該主張ハ之ヲ認容シ難シ從テ又前記ノ塗翰乾毫外三點ノ物品ノ本件讓渡契約カ假令原告主張ノ如ク右實用新案權ノ存續期間ニ付テノ原告ノ錯誤ニ因リ無効ナリトスルモ該權利ノ讓渡契約ニ付キ前ニ論述シタルト同一ノ理由ニ依リ原告ハ被告等ニ對シ該物品ノ各讓渡契約ノ無効ヲ對抗シ得サルモノトス此點ニ關スル被告ノ抗辯モ亦理由アリ次ニ本件商標權ノ讓渡契約解除ノ意思表示ノ效力ニ付キ按スルニ原告ニ對スル右商標權轉移登錄手續カ被告等ノ義務ニ屬スル右手續ニ必要ナル被告忠次郎ノ營業證明書ノ交付ヲ被告等カ原告ニ對シテ爲ササル爲メ未タ履行セラレサルコトハ當事者間ニ爭ナキ所ニシテ成立ニ爭ヒナキ甲第三號證ノ一ニ依レハ原告カ大正五年五月三十一日被告兩名ニ對シ同月六日正午迄ニ右手續ヲ履行スヘキ旨ノ催告ヲ爲シ而シテ右期間内ニ履行セサルトキハ該讓渡契約ヲ解除スヘキ旨ノ通知ヲ爲シ此催告書ハ被告忠次郎ニ對シテハ同日被告清治ニ對シテハ翌六月一日各到著シタルコトヲ認メ得ルヲ以テ右解除ハ有效ニ爲サレタルモノト認ム被告ハ原告カ被告忠次郎ノ廢業届ヲ所轄區役所ニ提出シ又警視廳ノ同被告ノ機械類使用認可書

被告ニ返戻セサル爲メ前記ノ營業證明書ノ下附ヲ受ケル能ハサルニ至リタルモノナルヲ以テ右證明書交付ノ義務不履行ハ原告ノ責ニ歸スヘキ事由ニヨリテ生シタルモノニシテ被告ハ其責ニ任スヘキモノニアラス從テ右不履行ヲ原因トスル本件解除ノ意思表示ハ無効ナル旨抗辯スレトモ明治四十二年勅令第二百九十六號第四條ニハ商標權轉移ノ登録ヲ申請スル場合ニ於テハ營業ト共ニスルコトヲ證明スル書面ヲ申請書ニ添附スヘシト規定シ商標權轉移ノ登録ニハ移轉當時ニ於ケル讓渡人ノ營業證明書ヲ添附スルヲ以テ足ルヲ以テ假ニ被告主張ノ如ク原告カ被告忠次郎ノ廢業届出ヲ爲シタリトスルモ其届出カ本件讓渡契約締結以後ニ爲サレタルモノナルコト成立ニ爭ヒナキ乙第七號證ニヨリ明カナルヲ以テ被告主張ノ前記ノ各事由ハ被告カ右證明書ノ下附ヲ受ケルニ付キ何等ノ妨ケナク前段ニ認定シタル被告等ノ義務不履行ニ付キ毫モ影響ヲ及ホサス仍テ被告等ノ右抗辯ハ採用セス然リ而シテ原告カ商人ニシテ被告等モ亦本件讓渡契約締結ノ當時商人ナリシコトハ當事者間ニ爭ヒナキ所ニシテ右契約當時被告カ原告ヨリ原告主張ノ代金ヲ受領シタル事實ハ成立ニ爭ナキ甲第一號證ニ依リ之ヲ認メ得ヘク本件訴狀カ大正五年六月十五日被告等ニ送達セラレタルコトハ記録添附ノ送達證書ニ依リ明カナルヲ以テ被告兩名ハ連帶シテ原告ニ對シ右商標權ノ讓渡代金二千七百圓及之ニ對スル大正五年六月十七日ヨリ本訴判決執行濟ニ至ル迄年六分ノ損害金ヲ支拂フヘキ義務アルモノトス此部分ノ原告ノ請求ハ正當ナリ然リト雖モ右原告ノ其餘ノ請求ハ裁上ノ理由ニヨリ不當ナルヲ以テ之ヲ排斥シ訴訟費用ニ付テハ民事訴訟法第七十二條

第一項第七十三條第一項假執行ノ宣言ニ付テハ同法第五百三條第一號ニ則リ主文ノ如ク判決ス。

### 第二十一章

粟代金返還及得べかりし利益を得られざりしによる損害賠償請求の本訴竝に粟代金殘額及立替金請求の反訴

#### 第一 粟代金返還請求の本訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、給付の訴。
  - 2 當事者 原告は粟の買主、被告は其の賣主。
  - 3 管轄 民訴總則の規定に従ふ。
  - 4 訴提起の時期 特規なし。
  - 5 訴訟物の價額 金一萬五千二百九十四圓九十六錢(民訴二二條一項)
- 第二 損害賠償請求の本訴
- 1 訴の性質乃至 4 訴提起の時期に付ては前訴の説明を援用する。

5 訴訟物の價額 金二千三百三十一圓(民訴二二條一項)

第一第二の訴の訴訟物の價額の合算額は金一萬七千六百二十五圓九十六錢(民訴二二條一項)

6 貼用印紙 30圓+3圓×13=67圓(民訴印紙法二條二編四章其一5參照)

#### 第三 粟代金殘額請求の反訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、給付の訴。
- 2 當事者 原告は本訴の被告で粟の賣主、被告は本訴の原告で粟の買主。
- 3 管轄 本訴の繫屬する裁判所但其の目的たる請求が他の裁判所の管轄に專屬せざるとき及本訴の目的たる請求又は防禦の方法と牽連するときに限る(民訴二二條三九條)
- 4 訴提起の時期 本訴の繫屬する裁判所に於て本訴の口頭辯論の終結に至る迄(民訴二二條三九條)
- 5 訴訟物の價額 金二千百五十五圓九十七錢(民訴二二條一項)
- 6 貼用印紙 金二十五圓(民訴印紙法二條四條參照)
- 7 假執行の宣言に付民訴一九六條

大正九年(民)一八六一號粟代金返還及損害賠償請求ノ本訴竝ニ粟代金殘額及立替金請求

第二十一章 粟代金返還及得べかりし利益を得られざりしによる損害賠償請求の本訴竝に粟代金殘額及立替金請求の反訴 三四一

反訴事件 (京城地方法院第二民事部大正十年五月十三日判決)

原告 高村 甚一  
被告 田中 重太郎

【主文】原告ノ本訴ノ請求及假執行宣言ヲ求ムル申立ハ之ヲ却下ス。

被告ノ反訴ニ付キ原告ハ被告ニ對シ金二千五百五十四圓九十七錢及之ニ對スル大正九年五月八日ヨリ本件判決執行濟ニ至ル迄年六分ノ割合ニ依ル利息ヲ支拂フヘシ。

本訴及反訴ノ訴訟費用ハ全部原告ノ負擔トス。

反訴請求ニ關スル部分ハ被告ニ於テ金五百圓又ハ之ニ相當スル有價證券ヲ供託スルトキハ假ニ執行スルコトヲ得。

【事實】原告代理人ハ本訴ニ付キ被告ハ原告ニ對シ金一萬七千六百二十五圓九十六錢及之ニ對スル大正九年五月一日ヨリ本件執行ニ至ル迄年六分ノ利息ヲ支拂フヘシ訴訟費用ハ被告ノ負擔トストノ判決並ニ保證ヲ條件トスル假執行ノ宣言ヲ求メ反訴ニ付キ請求棄却ノ判決ヲ求メ本訴請求ノ原因及反訴ニ對スル答辯トシテ原告ハ大正九年三月十五日被告ヨリ海城産粟三車(一車二百五十九袋積合計七百七十七袋)ヲ同年四月十日迄ニ仁川沖渡トシ一袋ニ付キ代金二十一圓八十六錢ニテ買受クル約ヲ爲シ同年四月中代金ノ内一萬五千二百九十四圓九十六錢ヲ被告ニ支拂ヒタリ其後被告ヨリ賣買ノ目的物トシテ粟三車ヲ送付シタルニ付キ原告ノ代理人ハ同年四月十七日二車翌五月三日一車ヲ仁川沖ニテ受領シ之ヲ京城其他ノ轉賣先ニ送付シタルニ該品ハ見本品トハ異ナリ品

質劣惡ニシテ全ク海城産ノモノニ非サルカ爲メ各轉賣先ニ於テ之カ受領ヲ拒絕セラレタリ仍テ原告ハ同年五月五日被告ニ對シ其旨ノ通知ヲ發シ且約定品ノ引渡ヲ爲スヘキ旨ノ催告ヲ爲シタルニ被告ハ右ハ仁川沖迄輸送中誤テ他品ト取替リタルモノナルヘク被告ニ於テハ約定品ヲ送付シタルモノナレハ何等ノ責任ナシト稱シテ請求ニ應セス因テ原告ハ大正九年五月二十五日附書面ヲ以テ被告ニ對シ六月十五日迄ニ約旨ニ從ヒ債務ノ履行ヲ爲シ同時ニ先ニ送付セシ粟ヲ引取ルヘキ旨ノ通告ヲ發シタルモ被告ハ之ニ應セサルニヨリ已ムヲ得同年六月二十二日被告ニ對シ本件賣買契約解除ノ意思表示ヲ爲シ且先ニ支拂ヒタル代金ノ返還ヲ求メタルモ之カ支拂ヒヲ爲サス尙被告ニ於テ若シ約旨ヲ履行セシナランニハ原告ハ約定品一袋ニ付キ三圓ノ利益ヲ得ヘカリシモノナルヲ以テ原告ハ被告ノ債務不履行ノ爲メ合計金二千三百三十一圓ノ損害ヲ被リタリ仍テ右代金ノ返還及損害賠償ヲ求ムル爲メ本訴ニ及ヒタル次第ナレハ反訴請求ノ失當ナルハ勿論ナリ原告ノ支配人赤松時圓カ被告ヨリ船荷證券ノ交付ヲ受ケタルコトハ之ヲ認ムルモ契約ノ受渡場所ヲ變更シタルモノニ非ス唯現品受取ノ便宜ノタメ其交付ヲ受ケタルニ過キス又輸出税ハ原告ノ負擔スヘキモノニ非ス之ニ反スル陳述ヲ爲シタルハ錯誤ニ付キ取消ス本訴當事者ハ何レモ貿易商ナルモ本件取引ハ商法第二百八十條ヲ適用スヘキ趣旨ノモノニ非サル旨ヲ陳述シ立證トシテ甲第一乃至六號ヲ提出シ證人野口文一増井久吉赤松時圓及三好和三郎ノ訊問ヲ求メ乙第三號證ノ一、二同第二及第四號證ノ成立ヲ求メ其他ノ乙號各證ハ不知ト述ヘタリ。

第二十一章

粟代金返還及得べかりし利益を得られざりしによる損害賠償  
請求の本訴訟に粟代金残額及立替金請求の反訴

被告訴訟代理人ハ本訴ニ付キ請求棄却ノ判決ヲ求メ反訴ニ付キ主文第二項ト同趣旨及ヒ訴訟費用ハ原告ノ負擔トストノ判決並ニ保證ヲ條件トスル假執行ノ宣告ヲ求メ本訴ノ答辯及反訴ノ請求原因トシテ當事者間ニ原告主張ノ如キ賣買契約ノ締結セラレタルコト及同年五月五日附ヲ以テ原告ヨリ品質相違ノ旨ノ通知ヲ受ケ同年六月二十二日ニ契約解除ノ通知ヲ受ケタルコトハ之ヲ認ム被告ハ該契約ヲ履行センカ爲メ大正九年三月十四日海城ナル復生號事務所復生ヨリ海城産上栗三車ヲ買受ケ同月下旬同所ヨリ大連ニ之ヲ廻送シ被告ヨリ滿鐵埠頭事務所海運課ニ指圖シテ内二車ハ同年四月五日金澤丸ニ積込ミ殘一車ハ同月十四日第二十一共同丸ニ積込マレタリ而シテ前ノ二車ハ同月八日仁川沖著同月九、十兩日ニ陸揚ケシ後一車ハ同月十六日仁川沖著同月十七、八兩日ニ陸揚ケセラレタリ先是被告ハ原告カ仁川沖ニテ右品ヲ自由ニ引取ルコトヲ得セシムル爲メ大正九年四月七日及十六日ノ兩度ニ右船積栗ニ對スル船荷證券二通ヲ原告ニ交付シ以テ現品ノ授受ニ代ヘタリ故ニ遅クトモ右栗ハ陸揚著手ト同時ニ受渡ヲ完了シタルト同一ノ效力ヲ生シタルモノト謂フヘシ其後前記栗ノ前ノ二車ハ同月十一日後一車ハ五月一日ニ船荷證券ト引換ヘラレタルモノニシテ原告ハ何等異議ヲ留メスシテ之ヲ受領シタルモノナリ而シテ前述船舶ハ何レモ右栗ノ外數千袋ノ他ノ栗ヲ積込ミ居リタルモノナルカ故ニ若シ原告ノ受領シタル栗カ果シテ他地産ノ劣悪ナルモノトモハ其ハ陸揚荷揃ノ際原告ノ代理人カ他品ト取違ヘ若クハ他人ノ爲ニ取違ヘラレタルモノナルヘシ原告ハ著荷陸揚後十七、八日若クハ二十五、六日ヲ經タル五月五日ニ至リ京城其他ノ

轉賣先ニ於テ始メテ違品ナルコトヲ發見シ同日電報ニテ被告ニ其旨通知シタリトノコトナレハ目的物検査ニ付キ怠慢アリ從テ何處ニテ何人ノ爲ニ取違ヘラレタリヤヲ知ルコト能ハサルニ至レルモノナリ以上ノ次第ナレハ被告ハ完全ニ其債務ヲ履行シタルモノト謂フヘク從テ原告ノ請求ノ失當ナルハ勿論原告ハ被告ニ對シ殘代金千六百九十圓三十六錢ヲ支拂フヘキ義務アリ且輸出税金ハ原告ノ依頼ニヨリ該税金四百六十五圓七十一錢ヲ立替ヘタルニ付キ右殘代金ト合セ金貳千五百五十四圓九十七錢及其利息ノ支拂ヲ得ムカ爲メ反訴請求ニ及ヒタル次第ナル旨陳述シ立證トシテ乙第一乃至六號證ヲ提出シ證人劉復生坂田宗太郎及三谷芳太郎ノ訊問ヲ求メ甲第一乃至六號證ノ成立ヲ認メ輸出税ハ原告ノ負擔タルヘキ約ナル旨ノ原告代理人ノ自白ヲ援用シタリ。

【理由】大正九年三月十五日原告被告間ニ原告主張ノ如キ賣買契約ノ締結セラレタルコト並ニ原告カ同年四月中被告ヨリ代金ノ内一萬五千二百九十四圓九十六錢ノ支拂ヲ受ケタルコト及被告カ同月中栗三車分即チ七百七十七袋ヲ商船金澤丸及第二十一共同丸ニ積込ミテ仁川沖ニ廻送シ原告ハ同船ヨリ陸揚セラレタル栗七百七十七袋ヲ受領シタルコトハ當事者間ニ爭ヒナキ事實トス而シテ原告ノ受領シタル栗ハ品質皆劣悪ニシテ海城産ノモノニ非サリシコトハ證人三好和三郎ノ供述ニ照シ明瞭ナリト雖モ乙第一、二號證ノ記載並ニ證人三谷芳太郎同劉復生及同坂田宗太郎ノ供述ヲ綜合考覈スレハ被告カ大正九年三月中海城ニ於ケル特産物商復生號事務所復生ヨリ海城産上等新栗青筋新麻袋入三車分七百七十七袋ヲ買入レ同月下旬大連ニ之ヲ廻送シ四月ニ入り被告ヨリ南

滿鐵道大連埠頭事務所ニ指圖シテ阿波共同汽船會社所屬ノ金澤丸ニ内二車分ヲ同會社所屬第二十一共同丸ニ殘一車分ヲ積込ミテ發送セシメ兩船ハ之ヲ積載シテ金澤丸ハ同月八日第二十一共同丸ハ同月十六日何レモ仁川沖ニ到着シタルコトヲ認ムルニ餘アリ斯ノ如ク被告カ船舶ニ積載シテ仁川沖ニ送致セシ物品ハ青筋新麻袋入海城產上等新粟ナルモ原告カ同船ヨリ陸揚受領シタル物品ハ前示ノ如ク他地產ノ劣等粟ニシテ而モ證人増井久吉ノ供述ニ依レハ其包裝ニハ何等ノ標識モ之ナカリシコトヲ認メ得ヘキヲ以テ原告ノ受領シタル物品ハ被告ノ送致シタルモノニ非サルコト明瞭ナリ而シテ證人野口文一ノ船舶ハ何レモ多量ノ粟ヲ積載シ居タル旨ノ供述ヲ參酌シテ稽フレハ畢竟原告ノ發送シタル物品ハ仁川沖ニ到着後陸揚荷揃ノ際何等カノ過誤ニ因リ他ノ物品ト取違ヘラレタルニ由リ右ノ如キ齟齬ヲ來シタルモノト推斷スルヲ相當トス夫レ斯ノ如ク被告ノ發送セシ物品ハ仁川港ニ陸揚後紛失シ途ニ原告ニ於テ現實ニ之ヲ受取ルコトヲ得サリシモノナリ然リト雖モ本件賣買ニ關シテハ原告カ被告發送ノ前記物品ニ對スル船荷證券ノ交付ヲ受ケタルコトハ爭ナキ事實ナルカ故ニ原告カ被告ノ發送セシ物品ヲ現實ニ入手セサリシコトヲ以テ輒ク該物品ハ未タ被告ニ對シ引渡サレタルモノト斷定スヘキニ非ス抑々船荷證券ニ依リ運送品ヲ受取ルコトヲ得ヘキ者ニ船荷證券ヲ引渡シタルトキハ其引渡ハ運送品ノ上ニ行使スル權利ノ取得ニ付キ運送品ノ引渡ト同一ノ效力ヲ有スルモノナルコトハ商法第六百二十九條ニ依リ船荷證券ニ準用セララルル同法第三百三十五條ノ規定ニ照シ明瞭ナル所ナリ而シテ本件ニ於ケル船荷證券ノ引渡ハ賣主タ

ル被告カ賣買ノ目的タル物品ヲ運送ニ付シ買主タル原告ヲシテ其到達地ニ於テ被告ノ協力ヲ待タスシテ任意ニ運送人ヨリ之ヲ受取ルコトヲ得セシメカ爲メニ爲サレタルモノナルコトハ當事者辯論ノ全趣旨及證人坂田宗太郎ノ此點ニ關スル供述ニ照シ毫モ疑ナキ所ナレハ本件船荷證券ノ引渡ハ原告カ本件賣買ニ因リ目的物ニ對スル所有權ノ取得ニ付キ當該運送品ノ引渡ト同一ノ效力ヲ有スルモノト謂ハサルヘカラス果シテ然ラハ原告カ後日船荷證券ニ依リ現實ニ運送品ヲ受取ルニ當リ自己ノ不注意若ハ他人ノ過誤ニ因リ他ノ物品ト取違ヘタル場合ハ勿論縱令當該運送品ハ既ニ存在セサリシニセヨ其前船荷證券ノ引渡當時ニ於テ當該運送品ノ存在シタル限りハ被告ニ於テ運送ニ付シタル物品ハ原告ニ對シ引渡サレタルモノト爲ササルヘカラス然リ而シテ被告カ發送シタル運送品ニ對スル二通ノ船荷證券ハ金澤丸ノ分ハ大正九年四月七日第二十一共同丸ノ分ハ同月十六日頃ノ兩度ニ於テ奉天ニ於テ被告ノ代理人坂田宗太郎ヨリ原告商店ノ支配人赤松時圓ニ引渡サレタルコトハ坂田宗太郎ノ證言ニ依リ之ヲ認メ得ヘク且被告ニ於テ運送シタル物品ハ約旨ニ適合スル海城產上等新粟ニシテ該物品ヲ積載シタル船舶金澤丸ハ大正九年四月八日第二十一共同丸ハ同月十六日何レモ仁川沖ニ到着シタルコトハ冒頭認定ノ如クニシテ陸揚荷揃ハ其翌日以後ニ行ハレタルモノナルコトハ證人野口文一及坂田宗太郎ノ供述ノ全趣旨ニ照シ明瞭ナルカ故ニ本件船荷證券ノ引渡アリタル當時ニ於テハ本件賣買契約ノ趣旨ニ適合セル目的物件カ運送品トシテ存在シタルモノト謂フヘク從テ本件賣買ニ因ル被告ノ目的物引渡ノ義務ハ完全ニ履行セラレタ

第二十一章

粟代金返還及得べかりし利益を得られざりしによる損害賠償  
請求の本訴訟に粟代金殘額及立替金請求の反訴

ルモノト断定セサルヘカラス原告代理人ハ本件船荷證券ノ引渡ハ賣買契約ニ於ケル受渡場所ノ約定ヲ變更スル趣旨ノモノニ非ス唯現品受取ノ便宜ノ爲船荷證券ノ交付ヲ受ケタルニ過キスト抗辯スレトモ本件船荷證券ノ引渡カ運送品ノ現實ノ引渡ニ代ヘテ爲サレタルモノナルコトハ前段認定ノ如クニシテ之ヲ覆スニ足ルヘキ證據ナシ而シテ賣買當事者カ合意ノ上約定以外ノ場所ニ於テ目的物ノ受渡ヲ爲シ得ヘキハ勿論ニシテ其カ契約ノ變更トナルカ否カハ毫モ之ヲ問フノ要ナシ苟モ賣主カ買主ノ承諾ヲ得テ目的タル物品ノ引渡ヲ爲シタル以上ハ其場所カ契約ニ於テ定メラレタル所タルト否トヲ問ハス之ニ依リテ賣主ノ目的物引渡ノ債務ハ履行完了ニ至ルモノトス然レハ法律上現實ノ引渡ト同一ノ效力ヲ有スル船荷證券ノ引渡アリタル場合ニ於テモ其軌ヲ一ニスルモノト謂ハサルヘカラス從テ原告代理人ノ右主張ハ其理由ナシ叙上ノ如ク被告ハ本件賣買ニ因ル目的物引渡ノ債務ヲ履行シタルモノナリ然レハ原告カ右債務ニ付キ被告ニ履行遲滞ノ責アリトシ之ヲ原因トセル損害賠償請求ノ理由ナキハ勿論斯ル履行遲滞ヲ前提トシテ爲セル契約解除ノ意思表示ハ其效ナキコト明白ナルヲ以テ之ニ依ル原狀回復ノ請求モ亦失當ニシテ却テ原告ハ被告ニ對シ本件賣買ニ依ル代金ヲ支拂フヘキ義務アリ而シテ代金未拂額ハ千六百九十四二十六錢ナルコトハ爭ナク且民法第五百七十五條ニ依レハ買主ハ目的物ノ引渡アリタル日ヨリ代金ノ利息ヲ支拂フ義務アルモノナルヲ以テ右殘金及利息ニ對スル被告ノ反訴請求ハ正當ナリ次ニ反訴請求中輸出稅立替ニ因ル請求ニ付キ案スルニ被告カ本件ノ賣買ノ目的物タル海城產粟ヲ滿洲ヨリ輸出スルニ

付キ輸出稅金四百六十四圓七十一錢ヲ支出シタリトノ事實ハ原告代理人ニ於テ明カニ爭ハス且他ノ陳述ニ依リ之ヲ爭フ意思ノ顯ハレサルヲ以テ之ヲ明白シタルモノト看做スヘキモノトス當該輸出稅ハ原告ニ於テ負擔スヘキ約定ノモノナルコトハ原告代理人ノ明カニ明白シタル所ノモノナルニ最終ノ口頭辯論ニ至リ該明白ハ錯誤ニ出テタルモノナリトシ之ヲ取消ス旨陳述シタレトモ該明白ハ錯誤ニ出テタルモノナリト認ムヘキ事情證據毫モ之ナキヲ以テ前ノ明白ハ依然其效力ヲ保有シ右ノ取消ハ其效ナキモノトセサルヲ得ス而シテ右ノ立替ハ大正九年四月中貿易商タル被告カ其營業ノ範圍内ニ於テ之ヲ爲シタルモノナルコトハ當事者辯論ノ全趣旨ヨリ之ヲ推斷シ得ヘキヲ以テ商法第二百七十五條第二項第二百七十六條ニ依リ原告ハ立替金ニ對シ立替ノ日以後六分ノ利息ヲ附シテ返還スヘキ義務アルモノトス然レハ被告ノ此部分ノ請求モ亦正當ナリ以上說示ノ理由ニ依リ本訴ノ請求ハ全然之ヲ排斥シ反訴ノ請求ハ全部之ヲ認容スヘキモノトシ訴訟費用ニ付テハ民事訴訟法第七十二條第一項被告ノ假執行宣言ヲ求ムル申立ニ對シテハ同法第五百三條第一號ニ則リ主文ノ如ク判決ス。

**第二十二章 賣買相殺殘金並に被告の債務不履行により被りたる損害金請求の訴**

**1 訴の性質 通常訴訟、給付の訴。**

第二十二章 賣買相殺殘金並に被告の債務不履行により被りたる損害賠償請求の訴 三四九

- 2 當事者 原告は被告と青豌豆を賣買したる者、被告は其の相手方。
- 3 管轄 民訴總則の規定に従ふ。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金五千六百八十一圓十七錢(民訴二二)
- 6 貼用印紙<sup>30圓+3圓=33圓</sup>(民訴印紙法二條二)  
編四章其一5參照
- 7 假執行の宣言に付民訴一九六條。

大正八年(ワ)第一一號賣買相殺殘金等請求事件 (札幌地方裁判所小樽支部大正八年十一月十五日判決)

原告

湯淺貿易株式會社

右法定代理人取締役

湯淺竹之助

被告

吉田商事株式會社

右法定代理人取締役

吉田耕作

【主文】 被告ハ原告ニ對シ金四千五百四圓七十七錢ニ大正八年一月五日ヨリ辨濟ニ至ル迄年六分ノ利息ヲ付シテ支拂フヘシ。

其餘ノ原告ノ請求ヲ却下ス。

訴訟費用ハ十分シテ其九分ヲ被告ノ負擔トシ其一分ヲ原告ノ負擔トス。

此判決中原告勝訴ノ部分ハ原告ニ於テ保證金參千圓ヲ供託スルトキハ假ニ執行スルコトヲ得。

【事實】 原告代理人ハ被告ニ對シ金五千六百八十一圓十七錢ニ大正八年一月五日ヨリ辨濟ニ至ル迄年六分ノ利息ヲ付シテ支拂フヘシ訴訟費用ハ被告ノ負擔トストノ判決ヲ求ムト一定ノ申立ヲ爲シ保證ニ因ル假執行ノ宣言ヲ求メ其請求原因トシテ陳述シタル要旨ハ第一原告ハ被告ニ對シ大正七年十二月十一日青豌豆OK一級品二十五英噸ヲ賣渡シ其代金ヲ右百斤ニ付キ十七圓八十錢ト定メ内金五百圓ノ交付ヲ受ケ目的物引渡期限ヲ同月二十日ト約シタル所是ヨリ先キ同年十一月二十二日被告ヨリ同品同數量ヲ買受ケ其代金ヲ右百斤ニ付キ十五圓四十錢ト定メ内金五百圓ヲ交付シ目的物引渡期限ヲ同年十二月二十五日ト約シタル取引アリテ右二口ノ賣買ニ關スル代金ノ支拂及目的物ノ引渡ノ相互債務ハ相殺ニ適シタルニ付キ原告ハ同年十二月二十五日被告ニ對シ右對當額ニ付キ相殺ノ意思表示シタルヲ以テ其代金差額金千七百七十六圓四十錢ハ被告ヨリ支拂ヲ受クヘキ原告ノ債權ナリ第二原告ハ被告ヨリ下記條件ヲ以テ下記二口ノ物品ヲ買受ケタリ(一)大正七年十一月二十二日青豌豆検査OK一級品三十五英噸代金右百斤ニ付キ十五圓三十五錢内金授受五百圓目的物引渡期限同年十二月一日ヨリ同月二十五日迄同引渡場所小樽區内營業倉庫(二)同年十二月十五日馬鈴薯澱粉検査一等品二十五英噸

第二十二章 賣買相殺代金並に被告の債務不履行により被りたる損害賠償請求の訴



代金右百斤ニ付キ十五圓九十錢内金授受五百圓目的物引渡期限同月十日ヨリ同月二十日迄賣人勝手渡場所小樽區内營業倉庫然ルニ被告ハ右各目的物ヲ引渡ササルニ付キ原告ハ同年十二月二十五日被告ニ對シ右各殘代金ノ支拂準備シタルコトヲ告ケ同月二十六日午後四時迄右各目的物ヲ引渡サルヘキコトヲ求メタルニ被告ハ之ニ應セサルヲ以テ同月三十日再ヒ被告ニ對シ同八年一月四日迄ニ代金支拂ト引換ニ右各目的物ヲ引渡サルヘク若シ右期間内ニ之ヲ引渡ササルトキハ同期間ノ滿了ヲ以テ右各賣買契約ヲ解除スヘキ旨ヲ催告シタルモ尙被告ハ之ニ應セサルニ付キ同各契約ハ同上期間ノ滿了ト共ニ解除セラレタルモノトス而シテ右各目的物ハ其後價額上騰シテ青豌豆ハ百斤ニ付キ十九圓ト爲リタルヲ以テ賣買代金ニ比シ右百斤ニ付キ三十六圓五十錢二十五英噸ニ付キ千五百四十四圓七十七錢ノ價值ヲ生シ馬鈴薯澱粉ハ百封度ニ付キ十九圓四十錢ト爲リタルヲ以テ賣買代金ニ比シ右百封度ニ付キ三四五十錢二十英噸ニ付キ千九百六十圓ノ價值ヲ生スルニ至リ右ハ被告ノ前記引渡債務ノ不履行ニ因リ原告ノ喪ヒタル利益ニシテ即チ原告ノ被リタル損害ナルニ付キ被告ヨリ賠償ヲ受クヘキ原告ノ債權ナリ而シテ又右各賣買契約解除ノ結果原告ハ糞ニ被告ニ交付シタル二口ノ内渡代金合計千圓ノ返還ヲ受クルコトヲ得ヘキモノナルニ付キ以上第一、第二ノ債權額ニ之ヲ合算シタル金五千六百八十一圓十七錢ニ損害利息ヲ附帶シテ本訴請求ニ及ヒタリト云フニ在リテ尙被告住所ノ小樽區ニ於テ本件ノ如キ雜穀澱粉類ノ賣買ヲ爲シタル場合ニハ賣主ニ於テ倉庫證券ヲ買主ノ店舗ニ持參シ之ヲ以テ目的物ノ引渡ヲ爲シタル上代金ヲ支拂フヘ

キ商習慣アリテ本件當事者ハ右習慣ニ依リ取引ヲ爲シタルモノナルニ付キ原告ハ前記第二ノ賣買ニ關シ殘代金ノ支拂ヲ被告ニ提供セザリシモノニシテ唯之カ言語上ノ提供ノミヲ爲シタリト附演シタリ。

被告代理人ハ原告ノ請求ヲ却下スヘキ判決ヲ求メ其答辯トシテ被告ハ原告主張ノ事實殊ニ各賣買契約ノ成立並ニ其體様原告ヨリ相殺ノ意思表示アリタルコト被告住所地ニ於ケル原告主張商習慣ノ存在及本件數額等ハ總テ之ヲ認ム然レトモ第一原告主張ノ事件相殺ハ契約ニ關スルモノニシテ契約ノ相殺ハ法律上許スヘカラス第二假ニ契約ニ關スル相殺ニ非ストスルモ原告主張第一ノ賣買ニ付テハ當事者雙方ニ於テ互ニ同時ニ履行ノ抗辯權ヲ有スルモノニシテ此ノ如キ抗辯權ヲ附帶スル債務ハ相殺ヲ爲スニ適セサルモノナルニ付キ原告ノ爲シタル相殺ノ意思表示ハ其效ナシ第三、原告ハ事件相殺ヲ爲スニ先タチ自己ノ債務ニ屬スル賣買代金ノ支拂ヲ被告ニ提供シタルコトナキヲ以テ同相殺ノ意思表示ハ不合法ナリ仍チ原告ノ請求ニ應スルコトヲ得スト演述シタリ。

【理由】 按スルニ本件第二ノ賣買ニ關シ原告ノ演述シタル事實ハ被告ニ於テ全部之ヲ自白シタルヲ以テ被告ハ原告ニ對シ同賣買契約ノ解除ニ基キ其目的物引渡債務不履行ニ因ル原告ノ損害金三千五百四圓七十七錢ヲ賠償シ且同解除ニ因ル原告回復義務ノ履行トシテ糞ニ受取リタル金千圓ヲ返還スヘキ義務アルコト明カナリ次ニ事件第一ノ賣買ニ關シ被告ノ爲シタル抗辯ノ當否ヲ按スルニ被告ハ原告主張ノ相殺ハ契約ニ關スルモノナルニ付キ法律上許スヘカラスト抗辯スルモ本件訴訟及辯論ノ旨趣ニ徴スルニ原

第二十二章 賣買相殺代金並ニ被告の債務不履行により被りたる損害賠償請求の訴

告ハ事件第一ノ二口ノ賣買ニ付キ二個ノ契約ヲ相殺スト主張シタルコトナク其主張ハ右一口ノ賣買ニヨリ發生シタル相互債務ニ關シ相殺ノ意思ヲ表示シタルモノト認メ得ヘキ以テ原告主張ノ相殺ヲ以テ契約ニ關スルモノト爲ス被告ノ抗辯ハ理由ナシ然レトモ凡ソ賣買ハ雙務契約ニシテ當事者間互ニ同時履行ノ抗辯權ヲ有スヘキモノナルヲ以テ當事者間ノ一方カスル抗辯權ヲ有スル相手方ニ對シ爲シタル賣買契約上ノ債務ノ相殺ヲ認容スルニ於テハ相手方ヲシテ謂レナク同抗辯權ヲ喪失セシムルノ效果ヲ成スヘク雙務契約ノ當事者ヲシテ相互ニ抗辯權ヲ有セシメタル法意ニ反スルニ至ルヘキヲ以テ當裁判所ハ同時履行ノ抗辯權ヲ附帶スル債務ニ付テハ同抗辯權ヲ喪失シタル相手方ニ對スル場合ニ非サルヨリハ常ニ相殺適狀ニ非サルモノト認ム然レハ此點ニ關スル被告ノ抗辯ハ理由アルモノニシテ原告カ本件第一ノ賣買ニ關シ被告ニ對シ代金ノ支拂及目的物ノ引渡ノ相互債務ヲ相殺シタルハ不適法ニシテ其效無キモノトス仍テ本件相殺代金差額ニ關スル原告ノ請求ハ失當ナルニ付キ此部分ハ之ヲ却下スヘキモノト認ム而シテ前顯原告ノ請求認容シタル事件第二ノ二口ノ賣買ニ付テハ各爭ナキ其體様ニ徴シ考覈スルニ右ハ孰レモ目的物ノ轉換ニヨリ利益ヲ得ルコトヲ目的トシテ行ハレタルモノト推察シ得ヘク即チ事體商行爲ニ屬スト認ムルヲ以テ原告ノ右賣買ニ關スル損害賠償及内金返還ノ被告ノ債務ニ付キ損害利息ノ率ヲ商法ニ依據シタルハ正當ナリ仍テ爾餘ノ爭點ヲ判斷スルノ要ナシト認メ民事訴訟法第七十二條第一項第七十三條第一項第五百三條第一號ヲ適用シテ主文ノ如ク判決ス。

### 第二十三章 委託したる繭絲賣買の計算金請求の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟 給付の訴。
- 2 當事者 被告は其先代が原告又は訴外人より繭絲の賣買の委託を受けたる者の相續人、原告は右賣買の委託者。
- 3 管轄 民訴總則の規定に従ふ。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金四千四十九圓三十一錢五厘(民訴二二條一項)
- 6 貼用印紙 金三十圓(民訴印紙法二條)

大正六年通第一二八號計算金請求事件 (名古屋地方裁判所第一民事部大正六年七月二十一日判決)

原告	石田松作
被告	未成年者 小柳津恒

第二十三章 委託したる繭絲賣買の計算金請求の訴

右法律上代理人後見人

小柳津 次郎

【本文】 被告ハ原告ニ對シ金四千四百九圓五十一錢五厘ニ内金七十四圓六十三錢ニ付テ明治四十年八月十五日ヨリ本件判決執行濟ニ至ル迄元金壹百圓ニ付キ日歩三錢ノ割合ノ利息ヲ付シテ支拂フヘシ。

【事實】 原告代理人ハ主文ノ如キ判決ヲ求ムル旨申立ヲナシ其請求原因タル事實トシテ被告先代小柳津莊作ハ豐橋地方ニ於テ普通繭絲屋ト稱スル營業ニ從事中同人カ他ヨリ委託ヲ受ケ自己ノ名ヲ以テ販賣スル繭ヲ原告ニ買受若クハ原告ヨリ其所有ノ繭絲ヲ莊作ノ名ヲ以テ他へ販賣スルコトヲ委託シ居リタル所明治三十九年十二月十四日ヨリ翌四十年三月七日迄ノ間ニ於ケル取引ノ計算ハ原告ヨリ莊作ニ支拂フヘキ金額合計金五萬四千七百十二圓〇七錢莊作ヨリ原告ニ支拂フヘキ金額合計金一萬一千八百三十六圓九十一錢及原告ヨリ販賣ヲ委託シタル未販賣ノ繭絲殘品金二百八十一圓トナリタリ然ルニ原告カ右期間内ニ莊作ヨリ買受ケタル繭ノ中ノ合計三千七百五十八貫八百二十丸ハ未タ原告ヘ其引渡ヲ受ケサルヲ以テ原告ハ大正五年二月二十九日被告ニ對シ同年三月一日午後二時迄ニ引渡ヲナスヘク若シ同日時迄ニ引渡ヲナササルトキハ賣買契約ヲ解除スル旨催告ヲナシタルニ該繭ハ莊作及相續人タル被告ニ於テ恣ニ之ヲ他ニ賣却處分シタル爲メ遂ニ原告ニ對シ現實ニ引渡ヲナスコト能ハサリシヲ以テ原告ハ大正五

年三月一日賣買契約解除ノ意思ヲ表示シ茲ニ右賣買契約ハ解除セラレタリ從テ其買受代金四萬三千五百四圓七十四錢五厘ハ原告ニ於テ之ヲ支拂フコトヲ要セス仍テ原告ヨリ莊作ニ支拂フコトヲ要セシ金五萬四千七百七圓七錢ヨリ右金額ヲ控除スルトキハ明治四十年三月七日當時ニ於ケル原告ノ債務額ハ金一萬一千六百六十二圓三十二錢五厘ニ過キス故ニ之ト其當時ニ於ケル原告ノ債權一萬一千八百三十六圓九十一錢トヲ差引計算スルトキハ原告ハ被告ヨリ金百七十四圓五十八錢五厘ノ支拂ヲ受クヘキ債權ヲ有スル次第ナリ然ルニ莊作ハ前記繭絲中一本ヲ明治四十年三月二十九日金十八圓七十一錢ニテ賣却シテ其代金ヲ取得シ同人死後ハ其相續人タル被告ニ於テ其二本ヲ同年四月二十三日金三十五圓十七錢ニテ其一本ヲ同年五月十二日金十八圓九錢ニテ其他ノ殘餘ヲ同年八月七日ヨリ同月十四日迄ニ金三千八百〇二圓六十五錢ニテ賣却シ各其代金ヲ取得シ原告ノ被告ニ支拂フコトヲ要セシ繭代金其他ノ債務ノ辨濟ニ充當シタリ然レトモ前述ノ如ク賣買契約解除ノ爲被告ハ原告ニ對シ何等ノ債權ヲ有セサルコトトナリシ以上ハ前記玉絲ノ賣却代金ハ被告ニ於テ原告ニ對スル債權ト差引スヘキモノトシテ取得スルヲ得サルモノナルヲ以テ是亦被告ヨリ原告ニ支拂フヘキモノナリ依テ五口合計金四千四百九圓三十一錢五厘ト其内七十四圓五十八錢五厘ニ付テハ計算ノ翌日タル明治四十年八月十五日ヨリ豐橋地方ニ於ケル普通繭絲問屋ト稱スル營業者トノ取引上ノ債權債務ニ付キテハ商慣習上百圓ニ付キ日歩三錢以上ノ利息ヲ附スヘキモノナルカ故ニ本件判決執行濟ニ至ル迄慣習上ノ利息元金百圓ニ付キ日歩三錢ツツヲ附シ支拂ヲ

求ム又被告ノ答辯ニ對シテハ第一、原告ハ被告先代莊作ヨリ買受ケタル蘭ノ中三千七百五十八貫四百二十匁ハ未タ其引渡ヲ受ケタルコトナク從テ之ヲ買受代金ノ擔保ニ供シタルコトナク又引渡未濟ノ蘭カ當然買受代金ノ擔保トナルヘキモノナリトノ商慣習アルコトナシ故ニ本件ニ於テハ賣買契約締結後唯引取未濟品トシテ賣主タル莊作ノ手中心ニ殘存シ居リタルニ過キス又被告ハ原告ニ對シテ代金支拂並ニ蘭引取方ヲ請求シタルモ原告カ之ニ應セザリシニヨリ商慣習ニ基キ右賣買目的物タル蘭ヲ成行相場ニテ處分シタリト主張スルモ原告ハ曾テ右ノ如キ代金支拂並ニ蘭引取方ノ請求ヲ受ケタルコトナク又被告主張ノ如キ商慣習アルコトヲ認メス被告先代莊作ハ不法ニモ原告ノ權利ニ屬スル右引渡未濟ノ蘭ヲ自己ノ債務ノ爲メ擔保品トシテ株式會社三遠銀行ニ提供シ同銀行ノ督促急ナリシヨリ莊作死亡後其相續人タル被告ニ於テ之ヲ賣却處分シ以テ三遠銀行ニ對スル自己ノ債務ヲ辨濟シタルモノナリ尙ホ被告カ右蘭ヲ處分シ引取殘額ト差引シタル結果原告ニ對スル殘債權一萬數千圓トナリシヲ以テ之ヲ高橋小十郎及株式會社三遠銀行ニ讓渡シタリトノ被告ノ主張中形式上債權讓渡ノ通知アリシコトハ認ムルモ高橋小十郎及三遠銀行ハ原告ニ對シ右讓受債權一萬數千圓ノ支拂請求訴訟ヲ提起シタルニ本件ニ於ケル原告主張ノ如ク蘭ハ其引渡未濟ニシテ原告ヨリナシタル賣買契約解除ハ適法ニシテ原告ニ代金支拂ノ義務ナシトノ理由ニヨリ債權讓受人タル右兩名ハ敗訴トナリ其判決ハ確定シタリ第二、賣買契約ニ於テハ賣主ハ財產權移轉ノ義務ノミナラス目的物引渡ノ義務アルヲ以テ目的物ヲ引渡ササル間ハ賣買契約ノ履行ヲ完了シタル

モノト云フヲ得ス第三、賣買契約ニ基ク買主ノ目的物引渡請求權ハ獨立シテ消滅時効ニ係ルモノトスルモ引渡義務履行不能ヲ理由トシテ契約解除ヲナシタリト主張スル本訴ニ於テハ引渡請求權ノ時効ト關係ヲ有セス第四、被告ハ原告ノナシタル解除ハ代金ヲ提供セスシテ履行ノ催告ヲナシタルコトヲ前提トスルヲ以テ無効ナリト主張スルモ雙務契約ニ於テ履行ヲ求メラレタル一方ハ同時履行ヲ主張シテ自己ノ履行ヲ拒ムヲ得ルニ止マリ代金提供ナキ相手方ノ履行催告ト解除ノ意思表示トハ假令本件ノ如ク同一書面ヲ以テナシタル場合ト雖モ觀念上ニ於テハ確然之ヲ區別スルヲ得ヘキカ故ニ右履行ノ催告ヲ無効ナリトスルモ解除ノ意思表示ハ一種ノ形成權ニシテ債權ニアラス從テ消滅時効ニ係ルヘキ性質ノモノニアラス第五、假ニ消滅時効ニ係ルヘキモノトスルモ原告ハ本訴係争ノ蘭カ被告ニ對シ履行不能トナリタルコトヲ確知シタルハ三遠銀行及高橋小十郎ヨリ原告ニ對スル取引殘額請求事件ニ付明治四十四年十二月十四日證人鈴木完吉カ被告ノ委託ニ基キ右蘭ヲ賣却處分シタリトノ趣旨ノ證言ヲ耳ニシタル時ニアリ故ニ消滅時効ハ未タ完成セス第六、蘭ノ價格ハ次年度ニ至レハ半減スルコトヲ認メス假ニ相場ハ落ツルモノトスルモ被告ヨリ代金支拂及蘭引取方ノ請求ヲ受ケタルコトナク被告ハ原告ノ買受年度タル明治四十年中ニ不法ニモ自己ノ債務辨濟ノ爲メ賣却シタルモノナレハ原告カ被告ニ對シ損害賠償ノ義務ヲ負フコトナシ第七、被告ハ原告ノ玉絲代金支拂請求權ハ玉絲賣却以後五ヶ年ヲ經過シ消滅時効ニ係リタルモノナル旨主張スルモ原告ハ單純ナル玉絲賣却代金ノ支拂ヲ求ムルニアラスシテ被告ハ玉絲代金ヲ蘭代金其他

當時被告カ原告ニ對シ有セシ債務ノ辨濟ニ充當シ之ヲ領得シタルモ該債權發生ノ根源タル滿賣買契約カ大正五年三月一日解除サレタルヲ以テ曩ニ辨濟トシテ差引計算ヲナシ被告ノ領得シタルモノニシテ時効ハ其時ヨリ進行スヘキモノナレハ未タ消滅時効ニ係ラサルモノナリト供述シ立證トシテ甲第一號證乃至甲第五號證甲第六號證ノ一、二甲七號證ヲ提出シ乙號各證ノ成立ヲ認メタリ。

被告代理人ハ原告ノ請求ヲ棄却ス訴訟費用ハ原告ノ負擔トストノ判決ヲ求ムト申立テ其事實關係トシテ被告先代小柳津莊作カ滿絲賣買ニ關スル問屋營業ヲ爲シ居リ原告ト取引ノ結果明治四十年三月七日ニ於テ莊作ヨリ原告ニ對スル債權金五萬四千七百七十七圓七錢トナリ又莊作カ原告ヨリ委託ヲ受ケ販賣セル物品ノ代金則チ原告ノ債權ニ屬スルモノ金一萬一千八百三十六圓九十一錢トナリ外ニ同年三月二十九日同年四月二十三日同年五月十二日及同年八月七日ヨリ同月十四日ニ至ル間ニ莊作カ原告ヨリ販賣ノ委託ヲ受ケ居リタル玉絲ヲ代金合計金三千八百七十四圓六十三錢ニテ賣却シタルコトハ爭ハス然レトモ第一原告カ莊作ノ取次ニヨリ買受ケタル滿中三千九百五十八貫四百二十匁ハ原告ニ於テ其代金ヲ支拂ハサル爲メ莊作ヨリ原告ニ對スル滿代金債權ノ擔保トシテ質權設定ヲ受ケタリ蓋シ滿ノ賣買契約成立スルトキハ之ト同時ニ滿ノ所有權及占有權ハ原告ニ移轉シ莊作ハ單ニ原告ノ爲メニ其滿絲ヲ所持スルニ過キス而シテ原告ハ其代金ヲ支拂ヒタル後其滿ヲ引取り得ヘキモノニシテ其代金ノ支拂ヒナキ間ハ其代金カ莊作ヨリ原告ニ對スル債權トナルヲ以テ商慣習上其滿ノ上ニ質權設定サルルモノナ

リ然ルニ其代金ニハ支拂場所ノ定メアラサルヲ以テ莊作ヨリ請求次第原告ハ之カ支拂ヲナスヘキモノニシテ其支拂請求ヲ受ケナカラ尙ホ代金ノ支拂ナキトキハ商慣習ニ基キ莊作ハ原告ニ對シ期限ヲ定メテ代金ノ支拂ヲ催告シ尙ホ其支拂ナキトキハ莊作ニ於テ時價ニヨリテ賣物ヲ賣却シ其代金ヲ以テ債權ノ辨濟ニ充當シ得ヘキモノナリ故ニ莊作ハ明治四十年中數回原告ニ對シ本件滿代金ノ支拂ヲナシ滿ヲ引取ルヘキ旨期限ヲ定メテ催告シタルモ原告ハ之カ支拂ヲナササルヲ以テ莊作ハ明治四十一年三月迄ニ合資會社小柳津商店ニ依頼シ其處分ヲナシタリ然ルニ滿ノ相場大ニ下落シ其賣買代金ヲ以テ原告ノ債務全部ノ辨濟ヲ受クル能ハス差引尙ホ被告ヨリ原告ニ對シ一萬數千圓ノ債權ヲ殘存シタリシヲ以テ其債權ヲ被告ヨリ訴外高橋小十郎及株式會社三遠銀行ニ讓渡シタリ故ニ其後大正五年二月二十九日附ヲ以テ原告ヨリ被告ニ對シ滿賣買契約ヲ解除スル旨ノ通知ニ接シタル事實ハ之アルモ原告ハ右賣買契約ヲ解除シ得ヘキモノニ非サルカ故ニ其解除ヲ原因トセル本訴請求ハ不當ナリ第二賣買契約ニ於テハ買主ハ代金支拂ノ義務ヲ負擔シ賣主ハ財產權ヲ買主ニ移轉スル等義務ヲ負フモノナリ故ニ賣主ハ財產權ヲ買主ニ移轉セハ即チ契約ノ履行ヲ終リタルモノナリ買主カ其目的物ノ引渡ヲ求メ得ルハ其所有權カ買主ニ移轉シタル結果其所有權ノ作用ニ出ツルモノニシテ賣買契約ノ效力ニ基クモノニアラス本件ニ於テハ原告カ右賣買ニヨリ滿ノ所有權移轉ヲ受ケシコトハ爭ナキ所ナルヲ以テ莊作ハ其契約ノ履行ヲ終リタルモノナリ故ニ原告ハ右賣買契約ノ不履行又ハ履行不能ヲ理由トシ之カ解除ヲナシ得ヘキ筋合ナキ故ニ解除ヲ原

因トセル本件請求ハ不當ナリ第三、商法第二百八十五條ニヨル商行爲ニ因リ生シタル債權ハ五ヶ年間之ヲ行ハサルトキハ時効ニヨリ消滅スヘキモノニシテ其債權カ金錢債權ナルト物品債權ナルトヲ問ハサルモノナリ故ニ原告カ明治四十年以前ニ於テ莊作ヨリ買受ケタル繭ノ引渡ヲ求ムル債權モ亦五ヶ年ノ時効ニヨリ消滅スヘキモノニシテ大正五年頃ニ於テハ原告ハ被告ニ對シ繭ノ引渡ヲ請求スル權利ハ消滅ニ歸シタルモノナリ從テ所有權侵害ノ方面ヨリ損害賠償ヲ求ムルハ格別賣買契約ノ不履行ヲ理由トシ解除權ヲ行使シ得ヘキニアラス故ニ原告ノ本訴請求ハ不當ナリ第四、原告ハ大正五年二月二十九日附ヲ以テ被告ニ對シ同年三月一日午後二時迄ニ賣買ノ目的タル繭ヲ引渡スヘシ同日ヲ經過シタルトキハ賣買契約ヲ解除スル旨催告ヲナシタルコトハ事實ナリ原告ハ右履行ノ請求ヲナスニ當リ代金ノ提供ヲナシタルコトナシ從テ雙務契約ノ履行ノ催告ヲナス要件ヲ缺キタルモノニシテ此催告ヲ前提トシ契約ノ解除ヲナシ得ヘキニアラス故ニ原告ノ本訴請求ハ不當ナリ第五、契約解除權モ亦一ノ債權ナルニヨリ商行爲短期時効ニヨリ消滅スヘキモノナリ故ニ原告ノ本件賣買契約解除權モ亦既ニ消滅時効ニ係リタルモノナリ第六、假ニ契約解除ヲ相當ナリトスルモ繭ノ取引ハ次年度ノ繭カ市場ニ現ハル迄ニ一切處分スヘキ性質ノモノニシテ時期ヲ失スレハ所謂古繭ト稱スルモノトナリ價格ハ新繭ノ時價ノ半額ニモ當ラサルニ至ルモノナリ而シテ原告ハ莊作ヨリ買受ケタル繭代金ノ支拂ヲナサス相場下落シタル後ニ於テ解除シタルモノナレハ之ニヨリ生スル相場ノ差額ハ原告ニ於テ賠償スヘキ責任アリ然ルニ其差額實ニ二萬餘圓ナルヨ

リ被告ハ茲ニ其債權ト原告ノ請求スル債權トヲ其對當額ニ於テ相殺ノ意思ヲ表示ス第七、假ニ契約解除ヲ相當トシ又相殺ヲ爲シ能ハサルモノナリトスルモ原告ハ繭ノ賣買契約ヲ解除シタル結果被告カ原告ノ委託ニヨリ賣却シタル玉絲ノ代金ノ支拂ヲ被告ニ請求スルモノニシテ而シテ其解除ヲナス所以ノモノハ莊作カ志ニ繭ヲ他ニ賣却シ原告ニ引渡スコト能ハサルニ至ラシメタルカ爲メナリト云フニアルカ故ニ果シテ斯ル場合ナリトセハ原告一方ノ意思ヲ以テ何時ニテモ解除ヲナシ得ヘキモノナルヲ以テ之カ解除ヲナシタル場合ニハ其玉絲賣却ノ當時ヨリ其代金請求權ニ付キ時効カ進行スヘキモノナリ然ルニ原告ノ右代金請求權ハ商取引上ノ債權ニシテ五ヶ年ノ時効ニヨリ消滅スヘキモノナルヲ以テ被告ノ右代金請求ハ時効ニヨリ消滅シタルモノナリ故ニ原告ノ本訴請求ハ不當ナリト供述シ立證トシテ乙第一號證ノ一乃至三乙第二號證ノ一乃至三ヲ提出シ甲號各證ノ成立ヲ認メタリ。

【理由】案スルニ被告先代小柳津莊作カ豊橋地方ニ於テ繭絲問屋ト稱スル營業ニ從事中同人カ他ヨリ委託ヲ受ケ自己ノ名ヲ以テ販賣スル繭ヲ原告ニ買受ケ若クハ原告ヨリ其所有ノ繭絲ヲ莊作ノ名ヲ以テ他ヘ販賣スルコトヲ委託シ居リ明治三十九年十二月十四日ヨリ翌四十年三月七日迄ノ間ニ於ケル取引ノ計算カ原告ヨリ莊作ニ支拂フヘキ金額合計金五萬四千七百十七圓十七錢莊作ヨリ原告ニ支拂フヘキ金額合計金一萬一千八百三十六圓九十一錢トナリ其他原告ヨリ莊作ニ販賣ヲ委託シタル所ノ未販賣ノ玉絲二百八十一匁アリタルコト玉絲ニ付キ莊作ハ其一本ヲ明治四十年三月二十九日金十八圓

七十二錢ニテ賣却シテ其代金ヲ收得シ同人死亡後其相續人タル被告ニ於テモ二本ヲ同年四月二十三日金三十五圓十七錢ニテ其一本ヲ同年五月十二日金十八圓九錢ニテ殘餘ヲ同年八月七日ヨリ同月十四日迄ノ間ニ三千八百二十四圓六十五錢ニテ何レモ賣却シタルコト竝ニ原告カ右明治四十年三月七日迄ノ間ニ莊作ヨリ買受ケタル滿ノ中總計三千七百五十八圓四百二十圓ハ原告ニ引渡ササリシコト及原告ハ大正五年二月二十九日被告ニ對シ同年三月一日午後二時迄ニ之カ引渡ヲナスヘク若シ同日時迄ニ之カ引渡ヲナササルトキハ賣買契約ヲ解除スル旨ノ催告ヲナシタルコトハ爭ナキ所ナリ而シテ被告ハ抗辯ノ第一トシテ被告ハ原告ニ對シ右滿代金ヲ支拂フヘキ旨催告シタリシモ原告ハ之カ支拂ヲナササリシ故商慣習ニヨリ暗黙ノ裡ニ其滿ノ上ニ質權設定ヲ受ケ其後尙其代金ノ支拂ヲ求メシモ之カ支拂ナカリシ故商慣習ニ基キ明治四十一年三月迄ノ間ニ被告自ラ合資會社小柳津商店ニ依頼シ時價ヲ以テ他ニ賣却シ其代金ヲ以テ原告ノ債務ノ辨濟ニ充當シタリト主張スレトモ乙第二號ノ一(證人鈴木安吉調書)第二號證ノ二(證人河合程平調書)乙二號證ノ三(證人大場恒次郎調書)ニヨリテ被告主張ノ如キ商慣習アリト認め難シ加之甲三號證證人小柳津莊次郎調書)ニヨルニ莊作ハ原告ニ賣渡シタル前記ノ滿ヲ更ニ訴外株式會社三遠銀行ニ對シ自己ノ債務金五萬六千八百餘圓ノ擔保ニ差入レ莊作死亡後同銀行ヨリ嚴シク其債務ノ辨濟ヲ督促セラレタルヨリ其辨濟ニ充ツル爲メ小柳津莊次郎ハ莊作ノ相續人ニシテ未成年者ナル被告ノ後見人トシテ親族會ノ同意ヲ得テ右擔保ニ供シタル滿ノ全部ヲ合資會社小柳津商店ニ依頼シ賣却シタルモノナルコトヲ

認メ得ヘシ故ニ莊作カ原告ニ對シ右滿ノ引渡シヲナササリシハ莊作カ原告ニ對スル質權實行ノ結果ニ非スシテ莊作ノ不當ナル處分ニ基キ引渡不可能トナリシモノナルコトヲ認メ得ヘシ故ニ此履行不能ハ莊作ノ責ニ歸スヘキ事由ニヨリ生シタルモノニシテ斯ル場合ニ於テ原告カ右滿ノ賣買契約ヲ解除シ得ヘキモノナルヲ以テ被告ノ此抗辯ハ其理由ナシ被告抗辯ノ第二ハ賣買契約ニ於ケル賣主ノ義務ハ買主ニ對シ財產權ヲ移轉スルニアリ而シテ本件滿ノ賣買ニ在リテハ莊作ノ義務ハ滿ノ所有權ヲ原告ニ移轉スルニアルモノナルニシテ莊作ハ滿ノ所有權ヲ原告ニ移轉シタルモノナレハ既ニ契約ノ履行ヲ終リタルモノニシテ不履行又ハ履行不能ノ問題ヲ生スルノ餘地ナシト云フニアリ蓋本件滿賣買契約成立ノ當時其滿ノ所有權カ原告ニ移轉シタルモノナルコトハ當事者間ニ爭ナキ所ナレトモ賣買契約ノ效力トシテ賣主ハ目的物引渡ノ債務ヲ負擔スルモノナルヲ以テ被告カ自ラ本件滿ヲ原告ニ引渡シ能ハサラシメタル以上ハ被告ハ履行不能ノ結果ニ付キテ責ニ任スヘキモノナリトス故ニ此抗辯ハ理由ナシ被告抗辯ノ第三ハ假ニ賣買契約ニヨリ被告ハ滿引渡ノ債務ヲ負擔シタリトスルモ此債務ハ商行爲ヨリ生シタルモノナレハ五年ノ短期時効ニヨリ消滅スヘキモノナリ然ルニ契約以來既ニ五ヶ年以上ヲ經過シ原告滿引渡請求權ハ時効ニヨリ消滅シタルモノニシテ履行不能ノ問題ヲ生スル餘地ナク從テ履行不能ノ原因トシテ契約解除ヲナスハ不當ナリト云フニ在リ然レトモ本件ニ在リテハ前説明ノ如ク莊作ハ既ニ原告ニ賣渡シタル滿ヲ更ニ自己ノ債務ノ擔保トシテ三遠銀行ニ差入レ其債務辨濟ニ充ツル爲メ明治四十一年三月迄ニ他ニ賣却シタ

ルモノナレハ此時既ニ被告ヨリ原告ニ其請ヲ引渡シ能ハサルニ至リシモノニシテ而モ其取引タルヤ速カニ諸方ニ轉賣セラレ且消費サルヘキ性質ノモノナルカ故ニ既ニ原告ノ所有ニ歸シ特定物トナリタル此請ヲ再ヒ買集メテ原告ニ引渡サントスルカ如キハ何人ト雖モ不可能ニ屬シ所謂客觀的不能トナリタルモノナリ故ニ被告ノ引渡義務ハ此時ニ於テ消滅シ從テ原告ノ引渡請求權モ亦消滅シタルモノナリ故ニ賣買契約ニヨリ目的物引渡請求權ハ獨立シテ消滅時効ニ係ルヘキモノナルモ本件ニ於テハ消滅時効ノ問題ヲ生スル餘地ナシ而シテ被告ノ責ニ歸スヘキ事由ニヨリ履行不能ヲ生シタルモノナレハ原告ハ其請ノ賣買契約ヲ解除シ得ヘキモノニシテ被告ノ抗辯ハ理由ナシ被告第五ノ抗辯ハ原告ハ大正五年二月二十九日催告ヲナシ同年三月一日午後二時ニ請ヲ引渡サンコトヲ求メタレトモ本件請賣買契約ハ雙務契約ナルカ故ニ代金ヲ提供セサルモノナルヲ以テ代金提供ナキ催告ヲ前提トスル契約解除ハ不當ナリト云フニアレトモ前説明ノ如ク本件請ハ其引渡ノ履行不能トナリタルモノナレハ原告ハ先ツ履行ノ催告ヲナスノ要ナク直ニ契約ノ解除ヲナシ得ヘキモノナリ故ニ原告カ先ツ履行ノ請求ヲナシタレハトテ徒ニ無益ナル要求ヲナシタリト云フニ止マリ契約解除權ノ行使ニ何等ノ影響ヲ及ホササルモノトス從テ代金提供ノ有無カ履行ノ催告ニ關シ如何ナル效果ヲ有スヘキヤヲ論スルノ必要ナシ故ニ被告ノ此抗辯ハ理由ナシ被告第六ノ抗辯ハ本件請ノ賣買契約ハ商行爲ニ屬スルヲ以テ其解除權モ亦五ヶ年ノ時効ニヨリ消滅シタルモノナリト云フニアリ今形成權ノ一ナル解除權ハ債權ニ關スル規定ノ準用ニヨリ被告所論ノ如ク消滅

時効ニ係ルモノトスルモ甲五號證ノ一(證人鈴木安吉調書)ニヨリ原告カ右履行不能ノ事實ヲ知り得タルハ明治四十四年十二月十四日ナリト認ムルヲ相當トスルカ故ニ原告カ解除ノ意思ヲ表示セル大正五年三月迄ニ未タ五ヶ年ヲ經過セス故ニ此抗辯ハ理由ナシ被告抗辯ノ第七ハ契約解除ヲ不當ナリトスルモ目的物ハ既ニ古物トナリタル後契約ヲ解除セラレタルモノナレハ其價格下落シ二萬圓ノ損害ヲ生シタリ依テ原告ノ本訴請求ト對等額ニ於テ相殺ノ意思ヲ表示スト云フニアリ然レトモ前説明ノ如ク被告ハ明治四十四年三月迄ニ自ラ恣ニモ請ヲ賣却シタルモノニシテ原告カ契約ヲ解除シタルカ爲メ損害ヲ被リタル事實ナシ故ニ被告ハ原告ニ對シ損害賠償請求權ヲ有セサルモノニシテ相殺ニヨリ原告主張ノ權利ヲ消滅セシメ得サルモノトス故ニ此抗辯ハ理由ナシ被告第八ノ抗辯ハ原告ハ履行不能ヲ原因トシ契約解除ヲナシタル結果明治四十年中莊作及被告カ委託ニ基キ販賣シタル玉絲代金ノ支拂ヲ求ムルモノナリ然ルニ右ノ場合ニ於テハ原告一方ノ意思ニテ何時ニテモ契約解除ヲナシ得ヘキモノナレハ原告ノ玉絲代金支拂請求權ノ時効ハ莊作及被告カ販賣ヲナシタル當時ヨリ進行スヘキモノニシテ既ニ五ヶ年ヲ經過シタルヲ以テ原告ノ玉絲代金支拂請求權ハ消滅シタリト云フニ在リ然リト雖モ原告ト莊作トノ間ニ本件請賣買契約存在シタリシ結果原告ハ被告ニ對シ其請代金支拂ノ債務ヲ有シタルニヨリ被告ノ右玉絲代金債權ト差引計算ヲナシ原告ノ右玉絲代金債權ハ一旦消滅シタルモ右請賣買契約解除ノ結果被告ハ原狀ニ回復スル義務ヲ負フニ至リタルモノニシテ原告ノ右玉絲代金支拂請求權ハ右契約解除ニヨリ發生シタルモノ



ナリ故ニ未タ消滅時効ニ係ラサルモノニシテ被告ノ此抗辯モ亦理由ナシ以上説明スル如ク被告ノ抗辯ハ何レモ其理由ナク原告ノ本件賣買契約解除ハ正當ナリトス而シテ甲一號證通帖及甲二號證(解除通知書)ニ對照シ賣買ヲ解除シタル滿ハ合計三千七百五十八圓四百二十匁ニシテ其代價合計金四萬三千五百四十四圓七十四錢五厘ナルコトヲ認メ得ルカ故ニ此代金ハ原告ヨリ被告ニ支拂フコトヲ要セサルニ至レルモノナリ依テ明治三十九年十二月十四日ヨリ明治四十年三月七日迄ノ間ニ於ケル原告ト莊作トノ間ノ取引中原告ノ債務金五萬四千七百七圓七錢ノ内ヨリ之ヲ差引クトキハ原告ノ債務ハ金一萬一千六百六十二圓三十二錢五厘トナリ之ト原告ノ債權金一萬一千八百三十六圓九十一錢トヲ差引クトキハ明治四十年三月七日ニ於テ原告ハ莊作ニ對シ金七百七十四圓五十八錢五厘ノ債權ヲ有シタルコトヲ認メ得ヘク且其外ニ原告ハ玉絲代金三千八百七十三圓六十三錢ノ支拂ヲ受クヘキ債權ヲ有スルコトヲ認メ得ヘシ而シテ甲六號證ノ二證人伊奈半吉調書)ニ徴シ豊橋地方ニ於ケル滿絲問屋ニ對スル滿絲ノ取引ニ付キ元金百圓ニ對シ日歩三錢以上ノ利息ヲ附スヘキ慣習アルコトヲ知り得ルカ故ニ被告ハ原告ニ對シ合計金四千四十九圓二十一錢五厘ト内金七百七十四圓五十八錢五厘ニ付テハ前記計算ノ翌日タル明治四十年三月八日ヨリ又内金三千八百七十四圓六十三錢ニ付テハ玉絲最後ノ賣却日附ノ翌日タル同年八月十五日ヨリ本件判決執行済ニ至ル迄元金百圓ニ付キ日歩三錢ノ割合ノ利息ヲ附シテ支拂フヘキモノナリトス依テ訴訟費用ニ付キ民事訴訟法第七十二條ニヨリ主文ノ如ク判決ス。

## 第二十四章 委託販賣代金請求の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、給付の訴。
- 2 當事者 原告は蓄音器等の販賣を委託したる者、被告は其受任者。
- 3 管轄 民訴總則の規定に従ふ。本訴の事物の管轄は第一審は區裁判所であるべきに(裁審法一四條一號)地方裁判所が第一審判決を爲したることに注意を要する(民訴二五條)
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 金百七十三圓三十八錢(民訴二二條一項)
- 6 貼用印紙 金七圓(民訴印紙法二條)
- 7 假執行の宣言に付民訴一九六條

大正六年(一)第一四三四號委託販賣代金請求事件 (東京地方裁判所第二民事部大正六年十二月十三日判決)

原告

松本重雄

右法律上代理人親權者

被告

松本常三郎  
菅原利作

【本文】 被告ハ原告ニ對シ百七十三圓三十八錢竝ニ之ニ對スル大正六年六月六日ヨリ本件判決執行済ニ至ル迄年六分ニ相當スル損害金ヲ支拂フヘシ。  
訴訟費用ハ被告ノ負擔トス。  
本判決ハ原告ニ於テ保證トシテ金五十圓若クハ之ニ相當スル有價證券ヲ供託スルトキハ假ニ執行スルコトヲ得。

【事實】 原告訴訟代理人ハ主文第一、二項ト同趣旨ノ判決竝ニ保證ヲ條件トスル假執行ノ宣言ヲ求ムル旨申立テ其請求原因トシテ原告ハ商號ヲ三光堂ト稱シ蓄音機及音譜其他附屬品ノ販賣ヲ營業ト爲ス商人ニシテ明治四十五年五月中被告ト右商品ニ付キ委託販賣契約ヲ締結シ委託品ノ價格ハ雙方協定スルモノヲ除クノ外原告一般卸賣値段ニ依ルコト委託商品ハ被告ノ注文書ニヨリ原告ヨリ引渡スコト被告ハ委託商品ヲ原價以上ニ販賣スルハ勿論一般小賣價格ヲ破ラサルコト委託販賣代金ハ毎月末日其原價竝ニ原告ノ支出シタル運賃諸費用ヲ原告ニ送金スルコト被告ノ販賣手数料ハ販賣代金中ヨリ前記金額ヲ控除シタル殘額ヲ收得スルコト原告ヨリ商品ノ返還ヲ請求スルトキハ被告ハ何時ニテモ之ニ應スルコトヲ協定シ爾來取引ヲ爲シタル結果大正二年十二月三十日現在取引計算殘金八十三圓三十八錢ト爲リタルモ被告ハ之カ支拂ヲ爲サス又原告ハ其支店ニ於テ明治四十五年六月三十日被告ト同様ノ委託販賣契約ヲ締結シ爾來取引ノ結果

大正二年十二月三十日現在取引計算殘額金九十圓ト爲リタルモ被告ハ之カ支拂ヲ爲サス仍テ原告ハ大正六年五月二十六日被告ニ對シ右二口ノ債務ヲ同年六月二日迄ニ辨済スヘキ旨催告シタルモ被告ハ之ニ應セサルニヨリ本訴ヲ爲シタル旨陳述シタリ。

被告ハ原告請求ヲ棄却スル旨ノ判決アリ度旨申立テ答辯トシテ原告主張事實ハ全部之ヲ認ムルモ民法第七十三條第一號ニ從ヒ本件債權ハ二年ノ時効ニヨリ消滅シタルカ故ニ支拂ノ義務ナキ旨供述シタリ。

【理由】 案スルニ原告主張事實ハ全部被告ノ認ムル所ナリ而シテ被告ハ時効ヲ援用スルカ故ニ果シテ本件債權ハ時効ニヨリ消滅シタルヤ否ニ付キ案スルニ本件債權ハ商人タル原告カ其商品ノ賣却ヲ委託シ被告ハ原告ノ爲ニ之ヲ賣却シ得タル代金ヲ原告ニ支拂ハサルヘカラサルニヨリ生シタルコト當事者間ニ爭ナキ以上商法第二百八十五條ニヨリ五年ノ時効ニヨリ消滅スヘキモノトス被告ハ民法第七十三條第一號ニヨリ本件債權ハ二年ノ時効ニヨリ消滅セル旨主張スルモ同號ハ生産者卸賣商人及小賣商人ト相手方トノ間ニ爲シタル產物及商品ノ賣買契約ニヨリ代價ノ債權ニ付テノミ適用アルコト疑無キカ故ニ本件債權ノ如ク當事者間ノ委託關係ニヨリ生シタル債權ニ付キ適用無シ而モ其他之ニ關シ特別ナル短期時効ヲ定メタル場合ノ規定存在スルコトナシ然リ而シテ本件債權ハ當事者間ニ於テ爲シタル大正二年五月三十日迄ノ取引計算ニヨルモノナルカ故ニ同日ヨリ原告カ被告ニ對シ其支拂ノ催告ヲ爲シタル大正六年五月二十六日迄未タ五ヶ年ヲ經過セス從テ本件債權ハ時効ニヨリ消滅セサルモノト云フヘシ仍テ原

告ノ本訴請求ヲ正當ト爲シ民事訴訟法第七十二條第一項第五百三條第一號ニ則リ主文ノ如ク判決シタリ。

### 第二十五章 販賣手數料請求の訴

- 1 訴の性質 通常訴訟、給付の訴。
- 2 當事者 原告は水産組合聯合會、被告は原告の經營せる魚類共同販賣所の販賣取扱人にして販賣手數料に付原告と特約を締結しある者。
- 3 管轄 民訴總則の規定に従ふ。
- 4 訴提起の時期 特規なし。
- 5 訴訟物の價額 合計金四千四百四十八圓四十二錢(民訴二二條一項)
- 6 貼用印紙 金三十圓(民訴印紙法二條)
- 7 本訴に付ては漁業法特に其五八條重要物産同業組合法特に其八條九條等參照。

大正六年(一)第一六〇號販賣手數料支拂請求控訴事件 (長崎控訴院民事部大正七年五月七日判決)

控訴人

長崎縣水産組合聯合會

右代表者副組長

大石 榮三 耶

森田 友吉

外十五人

被控訴人

【全文】 原判決ヲ廢棄ス。

被控訴人森田友吉ハ金千四百八十九圓四十四錢同小川ヒサハ金七百四十九圓三十五錢同宮永力次耶ハ金三百九圓八十三錢同小牟田丈告ハ金三百二圓二十五錢同末富與四耶ハ金二百六十四圓九十八錢同太田角太郎ハ金百五十四圓九十一錢同小牟田倉吉ハ金百四十七圓五十二錢同紙屋巳代次ハ金百八十九圓二十四錢同小牟田米吉ハ金九十四圓三十七錢同久米淺吉ハ金四十四圓五十八錢同伊東ハツハ金二十三圓三十八錢同小牟田彌三耶ハ金二十七圓六十三錢同山田源市ハ金六十七圓八十七錢同福富幹治ハ金八十五圓十三錢同田中信太郎ハ金五十圓十三錢ヲ各自控訴人ニ支拂フヘシ。  
被控訴人末富與四耶山田源市福富幹治山本クラ田中信太郎ニ對スル控訴人ノ其餘ノ請求ハ之ヲ棄却ス。

訴訟費用ハ第一、二審共被控訴人ノ負擔トス。

【事實】 控訴代理人ハ第一審判決ヲ廢棄ス被控訴人末富與四耶ハ金二百七十四圓九十四錢同山田源市ハ金七十九圓二錢同福富幹治ハ金二十五圓六十四錢同山本クラハ金十六

圓二十二錢同田中信太郎ハ金五十九圓九十九錢其他ノ被控訴人ハ各主文表示ノ金員ヲ控訴人ニ支拂フヘシ訴訟費用ハ第一、二審共被控訴人ノ負擔タル旨ノ判決ヲ求ムト申立テ被控訴代理人ハ控訴棄却ノ判決ヲ求ムル旨申立テタリ。

控訴代理人ハ本訴請求ノ原因トシテ被控訴人ハ執レモ控訴人ノ經營セル魚類共同販賣所ノ販賣取扱人ニシテ其取扱ニ係ル魚類ノ販賣手数料七分ノ内六分ハ報酬手當トシテ控訴人ヨリ給與テ受ケ殘額一分ハ毎月十五日及末日ノ二回ニ區分シ一半ハ其月十八日迄ニ又他ノ一半ハ翌月三日迄ニ計算書ヲ添ヘ現金ヲ共同販賣所長ニ引繼クヘキ契約ヲ爲シ居レル所大正五年度ヨリ右販賣取扱人タル被控訴人ニ對シ始メテ營業稅ヲ賦課セラルルニ至リシカ若シ被控訴人ニ營業稅ヲ賦課セラルル場合ニハ控訴人ニ於テ之ヲ負擔スヘキ契約アリタルヲ以テ大正五年一月控訴人ハ更ニ被控訴人ニ對シ市場稅營業稅ノ外控訴人ノ所得稅全部ヲモ控訴人ニ於テ負擔スヘキニ付キ前記六分ノ手當ヲ五分八厘五毛ニ減セラレタキ旨ノ交渉ヲ爲シ被控訴人ノ承諾ヲ得タルニ依リ之ヲ同年度ノ豫算ニ計上シ總會ノ決議ヲ經テ縣知事ノ認可ヲ受ケタリ然ルニ其後同年四月被控訴人ヨリ從來ノ如ク手當ヲ六分ニ據置キ控訴人ニ於テ市場稅營業稅及所得稅ノ全部ヲ負擔セラレタキ旨要求シ來リタルニ付キ控訴人ハ已ムヲ得ス特ニ五分九厘ニ讓歩スヘキ旨通告シ置キタルニ意外ニモ同年十月ニ至リ被控訴人ハ控訴人ニ對シ自ラ諸稅全部ヲ負擔スヘキニ依リ販賣所ニ納ムヘキ手数料一分ヲ三厘ニ減額セラレタキ旨申出テ同年十一月七日附ヲ以テ右解決迄手数料ハ長崎魚類仲買株式會社ニ保管方ヲ委託セル旨通知シ

來レリ因テ控訴人ハ同年十二月六日附ヲ以テ營業稅ハ全部控訴人之ヲ負擔スヘキ故右保管手数料ハ同月十二日迄ニ被控訴人ヨリ之ヲ支拂ヒ其以後ハ從前ノ如ク取扱ハレタキ旨ノ通牒ヲ發シテ手数料支拂ノ督促ヲ爲シタルモ荏苒之カ履行ヲ爲サス而シテ被控訴人カ控訴人ニ支拂フヘキ販賣手数料ハ大正五年四月一日ヨリ同六年三月三十一日迄ノ計算ニ於テ本訴請求ノ數額ト爲ル旨主張シ尙其補充乃至再抗辯トシテ(一)控訴人カ法人登記ヲ爲シ居ラサルハ事實ナルモ控訴人ハ元來登記ヲ爲スヲ要セスシテ他人ニ對抗スルコトヲ得ル法人ナリ(二)控訴聯合會ニ於テハ現時組長ハ缺員ナリ從來內務部長カ組長ニ選任セララルル慣例ニシテ大正五年三月廣瀨內務部長カ總會ノ決議ニ依リ組長ニ選舉セラレタルモ重要物產同業組合法第八條ニ依ル農商務大臣ノ認可ハ同法施行規則第四十五條ニ依リ之ヲ地方長官ニ委任セラレアリテ未タ知事ノ認可ナキ故組長ノ資格ナク而シテ同法第九條ニ組長故障アルトキ副組長之ヲ代理ストアルハ組長缺員ノ場合ヲモ包含ス(三)被控訴人カ現今魚問屋業者タルコトハ之ヲ認メス被控訴人ハ明治四十一年頃迄魚問屋業者トシテ魚類ノ委託販賣ヲ爲シ來リシモ自利ヲ圖ルニ急ニシテ往々漁業者ノ利益ヲ阻害シ弊害頗ル多カリシ爲メ當時西彼杵長崎水產組合ハ之ヲ矯正スル目的ヲ以テ魚類共同販賣所ヲ設置シ長崎市ニ於テ魚類ノ販賣ヲ爲スモノニシテ該共同販賣所ヲ經由セサルトキハ過怠金ヲ徵收スルノ規定ヲ設ケ之ヲ勵行シタルニ當時水產組合員タリシ被控訴人ハ所屬組合ノ定款又ハ決議ニ服従スヘキ義務アルニ拘ラス巧ニ從來緣故アル漁業者ヲ操從シテ之カ對抗策ヲ企テタル爲メ共同販賣所ヲ經由セス被控訴人